

# 草枕

夏目漱石

青空文庫



## 一

山路やまみちを登りながら、こう考えた。

智ちに働けば角かどが立つ。情じょうに棹さおさせば流される。意地とおを通せば窮き屈ゆうくつだ。とかくに人の世は住みにくい。

住みにくさが高こうじると、安い所へ引き越こしたくなる。どこへ越えしても住みにくいと悟さとつた時、詩が生れて、画えが出来る。

人の世を作つたものは神でもなければ鬼でもない。やはり向う三軒りょう両りょう隣となりにちらちらするただの人である。ただの人が作つた人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人で

なしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう。

越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容くつろげて、束つかの間まの命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人つかわしという天職が出来て、ここに画家かきという使命が降くだる。あらゆる芸術の士は人の世を長閑のどかにし、人の心を豊かにするが故ゆえに尊たつとい。

住みにくき世から、住みにくき煩わずらいを引き抜いて、ありがたい世界をまのあたりに写すのが詩である、画えである。あるは音楽と彫刻である。こまかに云いえば写さないでもよい。ただまのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落さぬとも璆き

鏘の音は胸裏に起る。丹青は画架に向つて塗抹せんでも  
 五彩の絢爛は自から心眼に映る。ただおのが住む世を、かく  
 観じ得て、靈台方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清くう  
 ららかに收め得れば足る。この故に無声の詩人には一句なく、無む  
 色の画家には尺縑なきも、かく人世を観じ得るの点において、  
 かく煩惱を解脱するの点において、かく清淨界に出し  
 入し得るの点において、またこの不同不二の乾坤を建  
 立し得るの点において、我利私慾の羈絆を掃蕩するの点にお  
 いて、——千金の子よりも、万乘の君よりも、あらゆる俗  
 界の寵児よりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十

五年にして明暗は表裏のことく、日のあたる所にはきつと影がさすと悟つた。三十の今日はこう思つてゐる。——喜びの深きとき憂いよいよ深く、樂みの大きいなるほど苦しみも大きい。これを切り放そうとすると身が持てぬ。片づけようとすれば世が立たぬ。金は大事だ、大事なものが殖えれば寝る間も心配だろう。恋はうれしい、嬉しい恋が積もれば、恋をせぬ昔がかえつて恋しかろ。閣僚の肩は数百万人の足を支えている。背中には重い天下がおぶさつてゐる。うまい物も食わねば惜しい。少し食べば飽き足らぬ。存分食べばあとが不愉快だ。……

余の考がここまで漂流して來た時に、余の右足は突然坐りのわるい角石の端を踏み損くなつた。平衡を保つために、すわや

と前に飛び出した左足が、仕損じの埋め合せをすると共に、余の腰は具合よく方三尺ほどな岩の上に卸りた。肩にかけた絵の具箱が腋の下から躍り出しだけで、幸いと何の事もなかつた。

立ち上がる時に向うを見ると、路から左の方にバケツを伏せたような峰が聳えている。杉か檜か分からぬが根元から頂きまでことごとく蒼黒い中に、山桜が薄赤くだんだらに棚引いて、続つき目が確と見えぬくらい靄が濃い。少し手前に禿山が一つ、群をぬきんでて眉に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去つたか、鋭どき平面をやけに谷の底に埋めている。天辺に一本見えるのは赤松だろう。枝の間の空さえ判然している。行く手は二丁ほどで切れているが、高い所から赤い毛布が動いて来るのを見ると、

登ればあすこへ出るのだろう。路はすこぶる難義だ。

土をならすだけならきほど手間も入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平らにしても石は平らにならぬ。石は切り碎いても、岩は始末がつかぬ。掘崩した土の上に悠然と峙つて、吾らのために道を譲る景色はない。向うで聞かぬ上は乗り越すか、廻らなければならん。巖のない所でさえ歩るきよくはない。左右が高くつて、中心が窪んで、まるで一間幅を三角に穿つて、その頂点が真中を貫いていると評してもよい。路を行くと云わんより川底を涉ると云う方が適當だ。固より急ぐ旅でないから、ぶらぶらと七曲りへかかる。

たちまち足の下で雲雀の声がし出した。谷を見下したが、どこ

で鳴いてるか影も形も見えぬ。ただ声だけが明らかに聞える。せつせと忙しく、絶間なく鳴いている。方幾里の空気が一面に蚤に刺されていたたまれないような気がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の余裕もない。のどかな春の日を鳴き尽くし、鳴きあかし、また鳴き暮らさなければ気が済まんと見える。その上どこまでも登つて行く、いつまでも登つて行く。雲雀はきっと雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句は、流れて雲に入つて、漂うているうちに形は消えてなくなつて、ただ声だけが空の裡に残るのかも知れない。

巖角を鋭どく廻つて、按摩なら真逆様に落つるところを、  
際どく右へ切れて、横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀

はあすこへ落ちるのかと思つた。いいや、あの黄金の原から飛び上がつてくるのかと思つた。次には落ちる雲雀と、上の雲雀が十文字にすれ違うのかと思つた。最後に、落ちる時も、上の時も、また十文字に擦れ違うときにも元気よく鳴きつづけるだろうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。時には自分の魂の居所さえ忘れて正体なくなる。ただ菜の花を遠く望んだときに眼が醒める。雲雀の声を聞いたときに魂のありかが判然する。はんぜん雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全体が鳴くのだ。魂の活動が声にあらわれたもののうちで、あれほど元気のあるものはない。ああ愉快だ。こう思つて、こう愉快

になるのが詩である。

たちあちシユレーの雲雀の詩を思い出して、口のうちで覚えた  
ところだけ 暗 謳して見たが、覚えていたのは 一一一 句しか  
なかつた。その一一一 句のなかにいふのがある。

We look before and after

And pine for what is not:

Our sincerest laughter

With some pain is fraught;

Our sweetest songs are those that tell of saddest thought.

「前をみしむ、後をみしむ、物欲しみ、あれがぬるかなわれ。

腹からの、笑といへど、妬しみの、心うなづく。うつむきや、

極きわみの歌に、悲しさの、極おもいみの想こも、籠こもるとぞ知れ」

なるほどいくら詩人が幸福でも、あの雲雀のように思い切つて、一心不乱に、前後を忘却して、わが喜びを歌う訳には行くまい。

西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく万斛ばんこくの愁うれいなどと云う字がある。詩人だから万斛しろうとで素人さうじんなら一合ごうで済むかも知れぬ。

して見ると詩人は常の人よりも苦労性で、凡骨ぼんこつの倍以上に神経が鋭敏かなしみなのかも知れん。超俗の喜びもあろうが、無量の悲も多からう。そんならば詩人になるのも考え方だ。

しばらくは路たひらが平たいらで、右は雜木山ぞうきやま、左は菜の花の見つづけである。足の下に時々蒲公英たんぽぽを踏みつける。鋸のこぎりのような葉が遠慮なく四方へのして真中に黄色な珠たまを擁護している。菜の花に気をと

られて、踏みつけたあとで、気の毒な事をしたと、振り向いて見ると、黄色な珠は依然として鋸のなかに鎮座<sup>ちんざ</sup>している。呑氣<sup>のんき</sup>なのだ。また考えをつづける。

詩人に憂<sup>うれい</sup>はつきものかも知れないが、あの雲雀<sup>ひばり</sup>を聞く心持になれば微塵<sup>みじん</sup>の苦<sup>く</sup>もない。菜の花を見ても、ただうれしくて胸<sup>おど</sup>が躍るばかりだ。蒲公英もその通り、桜も——桜はいつか見えなくなつた。こう山の中へ来て自然の景物<sup>けいぶつ</sup>に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば足が草臥<sup>くたび</sup>れて、旨<sup>うま</sup>いものが食べられぬくらいの事だろう。

しかし苦しみのないのはなぜだろう。ただこの景色を一幅<sup>ふく</sup>の画<sup>え</sup>として観<sup>み</sup>、一巻<sup>かん</sup>の詩として読むからである。画<sup>が</sup>であり詩である以

上は地面じめんを貰つて、開拓する氣にもならねば、鉄道をかけて一ひとも儲けする了りょうけん見けんも起らぬ。ただこの景色が——腹の足しにもならぬ、月給の補いにもならぬこの景色が景色としてのみ、余が心を楽ませつつあるから苦勞も心配も伴わぬのだろう。自然の力はここにおいて尊たつとい。吾人の性情を瞬刻に陶冶とうやして醇じゅん乎ことして醇なる詩境に入らしむるのは自然である。

恋はうつくしかろ、孝もうつくしかろ、忠君愛國も結構だろう。しかし自身がその局に当れば利害の旋風つむじまに捲き込まれて、うつくしき事にも、結構な事にも、目は眩くらんでしまう。したがつてどこに詩があるか自身には解ひげしかねる。

これがわかるためには、わかるだけの余裕のある第三者の地位

に立たねばならぬ。三者の地位に立てばこそ芝居は観て面白い。小説も見て面白い。芝居を見て面白い人も、小説を読んで面白い人も、自己の利害は棚たなへ上げている。見たり読んだりする間だけは詩人である。

それすら、普通の芝居や小説では人情を免まぬかれぬ。苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたりする。見るものもいつかその中に同化して苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたりする。取柄とりえは利慾が交らぬまじと云う点に存するかも知れぬが、交らぬだけにその他の情緒じょうしょは常よりは余計に活動するだろう。それが嫌いやだ。

苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたりは人の世につきものだ。余も三十年の間それを仕通しとおして、飽々あきあきした。飽き飽きしき

た上に芝居や小説で同じ刺激を繰り返しては大変だ。余が欲する詩はそんな世間的の人情を鼓舞するようなものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界じんかいを離れた心持ちになれる詩である。いくら傑作でも人情を離れた芝居はない、理非を絶した小説は少くろう。どこまでも世間を出る事が出来ぬのが彼らの特色である。ことに西洋の詩になると、人事が根本になるからいわゆる詩歌しがの純粹なるものもこの境きょうを解脱げだつする事を知らぬ。どこまでも同情だとか、愛だとか、正義かだとか、自由だとか、浮世うきよの勧工場かんこうばにあるものだけで用を弁べんじてゐる。いくら詩的になつても地面の上を馳けてあるいて、錢の勘定を忘れるひまがない。シェレーが雲雀ひばりを聞いて嘆息したのも無理はない。

うれしい事に東洋の詩歌はそこを解脱したのがある。

採菊きくをとる

とうりのもとあうぜんとなんざんをみる  
東籬下 悠然見南山。のぞ

。ただそれぎりの裏に暑苦しい世の中  
をまるで忘れた光景が出てくる。垣の向うに隣りの娘が覗いてる  
訳でもなければ、南山なんざんに親友が奉職している次第でもない。超

然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持ちになれる。

獨坐幽篁裏、彈琴復長嘯、深林人不知、  
明月來相照。ただ二十字のうちに優に別乾坤べつけんこんを建こんり  
立ゆうしていり。この乾坤の功德は「不如歸」や「金色夜叉」  
の功德ではない。汽船、汽車、権利、義務、道徳、礼義で疲れ果  
てた後に、すべてを忘却してぐつすり寝込むような功德である。

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀にこの出世間的の詩味

は大切である。惜しい事に今の詩を作る人も、詩を読む人もみんな、西洋人にかぶれているから、わざわざ呑氣な扁舟を泛べてこの桃源に溯るのはないようだ。余は固より詩人を職業にしておらんから、王維や淵明の境界を今世に布教して広げようと云う心掛も何もない。ただ自分にはこう云う感興が演芸会よりも舞踏会よりも薬になるように思われる。ファウストよりも、ハムレットよりもありがたく考えられる。こうやつて、ただ一人絵の具箱と三脚几を担いで春の山路をのそのそあるくのも全くこれがためである。淵明、王維の詩境を直接に自然から吸収して、すこしの間でも非人情の天地に逍遙したいからの願い。一つの酔興だ。

もちろん人間の一分子だから、いくら好きでも、非人情はそ  
 う長く続く訳には行かぬ。淵明だつて年が年中南山を見詰  
 めていたのでもあるまいし、王維も好んで竹藪の中に蚊帳を釣  
 らずに寝た男でもなかろう。やはり余つた菊は花屋へ売りこかし  
 て、生えた筈は八百屋へ払い下げたものと思う。こう云う余もそ  
 の通り。いくら雲雀と菜の花が気に入つたつて、山のなかへ野宿  
 するほど非人情が募つてはおらん。こんな所でも人間に逢う。じ  
 んじん端折りの頬冠りや、赤い腰巻の姉さんや、時には人間  
 より顔の長い馬にまで逢う。百万本の檜に取り囲まれて、海面を  
 抜く何百尺かの空気を呑んだり吐いたりしても、人の臭いはなか  
 なか取れない。それどころか、山を越えて落ちつく先の、今宵の

宿は那古井の温泉場だ。

ただ、物は見様でどうでもなる。レオナルド・ダ・ヴィンチが弟子に告げた言に、あの鐘の音を聞け、鐘は一つだが、音はどうとも聞かれる。一人の男、一人の女も見様次第でいかよとも見立てがつく。どうせ非人情をしに出掛けた旅だから、そのつもりで人間を見たら、浮世小路の何軒目に狭苦しく暮した時は違うだろう。よし全く人情を離れる事が出来んでも、せめて御能拝見の時くらいは淡い心持ちにはなれそなうものだ。能にも人情はある。七騎落でも、墨田川でも泣かぬとは保証が出来ん。しかしあれは情三分芸七分で見せるわざだ。我らが能から享けるありがた味は下界の人情をよくそのままに写す手際から出て

くるのではない。そのままの上へ芸術という着物を何枚も着せて、世の中にあるまじき悠長な振舞をするからである。

しばらくこの旅中に起る出来事と、旅中に出逢う人間を能の仕組と能役者の所作に見立てたらどうだろう。まるで人情を棄てる訳には行くまいが、根が詩的に出来た旅だから、非人情のやりついでに、なるべく節儉してそこまでは漕ぎつけたいものだ。

南山や幽篁とは性の違つたものに相違ないし、また雲雀や菜の花といつしょにする事も出来まいが、なるべくこれに近づけて、近づけ得る限りは同じ観察点から人間を見てみたい。芭蕉と云う男は枕元へ馬が尿するのをさえ雅な事と見立てて発句にした。余もこれから逢う人物を——百姓も、町人も、村役場の書記

も、爺さんも婆さんも——ことごとく大自然の点景として描き出されたものと仮定して取こなして見よう。もつとも画中の人物と違つて、彼らはおのがじし勝手な真似をするだろう。しかし普通の小説家のようにその勝手な真似の根本を探ぐつて、心理作用に立ち入つたり、人事葛藤の詮議立てをしては俗になる。動いても構わない。画中の人間が動くと見れば差し支ない。画中の人物はどう動いても平面以外に出られるものではない。平面以外に飛び出して、立方的に働くと思えばこそ、こつちと衝突したり、利害の交渉が起つたりして面倒になる。面倒になればなるほど美的に見ている訳に行かなくなる。これから逢う人間には超然と遠き上から見物する氣で、人情の電気がむやみに双方で起らないよう

にする。そうすれば相手がいくら働いても、こちらの懐には容易に飛び込めない訳だから、つまりは画の前へ立つて、画中の人物が画面の中うちをあちらこちらと騒ぎ廻るのを見るのと同じ訳になる。間三尺あいだも隔へだていれば落ちついて見られる。あぶな氣げなしに見られる。言ことばを換えて云かえば、利害に気を奪われないから、全力を擧あげて彼らの動作を芸術の方面から観察する事が出来る。余念もなく美か美でないかと鑑識かんしきする事が出来る。

ここまで決心をした時、空があやしくなつて來た。煮え切れない雲が、頭の上へ靠もた垂れ懸かかつていたと思つたが、いつのまにか、崩くずれ出して、四方はただ雲の海かと怪しまれる中から、しとしと春の雨が降り出した。菜の花は疾くに通り過して、今は山と山

の間を行くのだが、雨の糸が濃こまやかでほとんど霧を欺あざむくくらいだから、隔へだたりはどれほどかわからぬ。時々風が来て、高い雲を吹き払うとき、薄黒い山の背せが右手に見える事がある。何でも谷一つ隔てて向うが脈の走つている所らしい。左はすぐ山の裾すそと見える。深く罩こめる雨の奥から松らしいものが、ちよくちよく顔を出す。出すかと思うと、隠れる。雨が動くのか、木が動くのか、夢が動くのか、何となく不思議な心持ちだ。

路は存外ぞんがい広くなつて、かつ平たいらだから、あるくに骨は折れんが、雨具の用意がないので急ぐ。帽子から雨垂あまだれがぽたりぽたりと落ちる頃、五六間先きから、鈴の音がして、黒い中から、馬子まごがふうとあらわれた。

「ここらに休む所はないかね」

「もう十五丁行くと茶屋がありますよ。だいぶ濡ぬれたね」

まだ十五丁かと、振り向いているうちに、馬子の姿は影画のようになつまれて、またふうと消えた。

糠ぬかのように見えた粒は次第に太く長くなつて、今は一筋ひとすじごとに風に捲まかれる様さままでが目に入る。羽織はとくに濡れ尽つくして肌着に浸み込んだ水が、身体の温度ぬくもりで生暖なまあたたかく感ぜられる。気持がわるいから、帽を傾けて、すたすた歩ある行く。

茫ぼうぼう々たる薄墨色うすすみいろの世界を、幾条いくじょうの銀箭ぎんせんが斜めに走るなかを、ひたぶるに濡れて行くわれを、われならぬ人の姿と思えば、詩にもなる、句にも詠まれる。有体なる己おのれを忘れ尽つくして

純客觀に眼をつくる時、始めてわれは画中の人物として、自然の景物と美しき調和を保つ。ただ降る雨の心苦しくて、踏む足の疲れたるを気に掛ける瞬間に、われはすでに詩中の人にもあらず、画裡の人にもあらず。依然として市井の一豎子に過ぎぬ。雲煙飛動の趣も眼に入らぬ。落花啼鳥の情けも心に浮ばぬ。蕭々として独り春山を行く吾の、いかに美しきかはなおさらには解せぬ。初めは帽を傾けて歩行た。後にはただ足の甲のみを見詰めてあるいた。終りには肩をすぼめて、恐る恐る歩行た。雨は満目の樹梢を搖かして四方より孤客に逼る。非人情がちと強過ぎたようだ。

「おい」と声を掛けたが返事がない。

軒下から奥を覗くと煤けた障子が立て切つてある。向う側は見えない。五六足の草鞋が淋しそうに庇から吊されて、屈託氣にふらりふらりと揺れる。下に駄菓子の箱が三つばかり並んで、そばに五厘銭と文久銭が散らばっている。

「おい」とまた声をかける。土間の隅に片寄せてある臼の上に、ふくれていた鶏が、驚ろいて眼をさます。ククク、クククと騒ぎ出す。敷居の外に土竈が、今しがたの雨に濡れて、半分ほど色が変つてる上に、真黒な茶釜がかけてあるが、土の茶釜か、

銀の茶釜かわからぬ。幸い下は焚きつけてある。

返事がないから、無断でずつと這入つて、床几の上へ腰を卸した。<sup>はた</sup>鶏は羽搏<sup>にわとりはばた</sup>きをして臼から飛び下りる。今度は畳の上へあがつた。障子<sup>しようじ</sup>がしめてなければ奥まで馳けぬける気かも知れない。雄が太い声でこけつこつこと云うと、雌が細い声でけけつこつこと云う。まるで余を狐か狗のようと考えてゐるらしい。床几の上には一升枡<sup>いつしようます</sup>ほどな煙草盆<sup>たばこぼん</sup>が閑静に控えて、中にはとぐろを捲いた線香<sup>ま</sup>が、日の移るのを知らぬ顔で、すこぶる悠長<sup>ゆうちょう</sup>に燻<sup>いぶ</sup>つてゐる。雨はしだいに収まる。

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子<sup>すす</sup>がさらりと開く。<sup>あ</sup>なかから一人の婆さんが出る。

どうせ誰か出るだろうとは思つていた。<sup>へつい</sup>竈に火は燃えている。菓子箱の上に錢が散らばっている。線香は呑氣に燻つてゐる。どうせ出るにはきまつてゐる。しかし自分の見世みせを明け放しても苦にならないと見えるところが、少し都とは違つてゐる。返事がないのに床几に腰をかけて、いつまでも待つてゐるのも少し二十世紀とは受け取れない。こちらが非人情で面白い。その上出て來た婆さんの顔が氣に入つた。

二三年前宝生の舞台で高砂たかさごを見た事がある。その時これはうつくしい活人画かつじんがだと思つた。籌ほうきを担かついだ爺さんが橋懸りはしがかりを五六歩来て、そろりと後向うしろむきになつて、婆さんと向い合う。

その向い合つた姿勢が今でも眼につく。余の席からは婆さんの顔

がほとんど真まむきに見えたから、ああうつくしいと思つた時に、その表情はぴしやりと心のカメラへ焼き付いてしまつた。茶店の婆さんの顔はこの写真に血を通わしたほど似ている。

「御婆さん、ここをちょっと借りたよ」

「はい、これは、いつこう存じませんで」

「だいぶ降つたね」

「あいにくな御天氣で、さぞ御困りで御座んしょ。おおおおだいぶお濡ぬれなさつた。今火を焚たいて乾かわかして上げましょ」

「そこをもう少し燃もしつけてくれれば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた」

「へえ、ただいま焚いて上げます。まあ御茶を一つ」

と立ち上がりながら、しつしつと一 声<sup>ふたこえ</sup>で鶏<sup>にわとり</sup>を追<sup>さ</sup>い下げる。こここと馳<sup>か</sup>け出した夫婦は、焦茶色<sup>こげちゃいろ</sup>の畳から、駄菓子箱の中を踏みつけて、往来へ飛び出す。雄の方が逃げるとき駄菓子の上へ糞<sup>ふん</sup>を垂<sup>た</sup>れた。

「まあ一つ」と婆さんはいつの間にか割り抜き盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黒く焦げ<sup>こ</sup>てている底に、一筆<sup>ひとふで</sup>がきの梅の花が三輪無雜作<sup>むぞうさ</sup>に焼き付けられている。

「御菓子を」と今度は鶏の踏みつけた胡麻ねじと微塵棒<sup>みじんぼう</sup>を持つてくる。糞<sup>ふん</sup>はどこぞに着いておらぬかと眺<sup>なが</sup>めて見たが、それは箱のなかに取り残されていた。

婆さんは袖<sup>そで</sup>無しの上から、襷<sup>たすき</sup>をかけて、竈<sup>へつつい</sup>の前へうずくまる。

余は懐から写生帖を取り出して、婆さんの横顔を写しながら、話  
しをしかける。

「閑静でいいね」

「へえ、御覽の通りの山里で」

「鶯は鳴くかね」

「ええ毎日のように鳴きます。此辺は夏も鳴きます」

「聞きたいな。ちつとも聞えないとなお聞きたい」

「あいにく今日は——先刻の雨でどこぞへ逃げました」

折りから、寵のうちが、ぱちぱちと鳴つて、赤い火が颯と風を  
起して一尺あまり吹き出す。

「さあ、御あたり。さぞ御寒かる」と云う。軒端のきばを見ると青い煙

りが、突き当つて崩れながらに、微かな痕をまだ板庇にからんでいる。

「ああ、好い気持ちだ、御蔭で生き返った」

「いい具合に雨も晴れました。そら天狗巖が見え出しました」

逡巡として曇り勝ちなる春の空を、もどかしとばかりに吹き払う山嵐の、思い切りよく通り抜けた前山の一角は、未練もなく晴れ尽して、老嫗の指さす方にと、あら削りの柱のごとく聳えるのが天狗岩だそうだ。

余はまず天狗巖を眺めて、次に婆さんを見比べた。画家として余が頭のなかに存在する婆さんの顔は高砂の嫗と、蘆雪のかいた山姥のみである。蘆雪のはんはん々に両方を見比べた。画家として余が頭のなかに存在する婆さんは

図を見たとき、理想の婆さんは物凄いものだと感じた。紅葉のなかか、寒い月の下に置くべきものと考えた。宝生の別会能を観るに及んで、なるほど老女にもこんな優しい表情があり得るものかと驚いた。あの面は定めて名人の刻んだものだろう。惜しい事に作者の名は聞き落したが、老人もこうあらわせば、豊かに、穏やかに、あたたかに見える。金屏にも、春風にも、あるは桜にもあしらつて差し支ない道具である。余は天狗岩よりは、腰をして、手を翳して、遠く向うを指している、袖無し姿の婆さんを、春の山路の景物として恰好なものだと考えた。余が写生帖を取り上げて、今しばらくという途端に、婆さんの姿勢は崩れた。

手持無沙汰に写生帖を、火にあてて乾かしながら、

「御婆さん、丈夫そうだね」と訊ねた。

「はい。ありがたい事に達者で——針も持ちます、苧もうみます、  
御団子の粉も磨きます」

この御婆さんに石臼を挽かして見たくなつた。しかしそんな  
注文も出来ぬから、

「ここから那古井までは一里足らずだつたね」と別な事を聞いて  
見る。

「はい、二十八丁と申します。旦那は湯治に御越しで……」

「込み合わなければ、少し逗留しようかと思うが、まあ気が  
向けばさ」

「いえ、戦争が始まりましてから、頓と参るものは御座いません。<sup>とん</sup>

まるで締め切り同様で御座います」

「妙な事だね。それじゃ泊めてくれないかも知れんね<sup>と</sup>」

「いえ、御頼みになればいつでも宿めます<sup>と</sup>」

「宿屋はたつた一軒だつたね」

「へえ、志保田さんと御聞きになればすぐわかります。村のもの

もちで、湯治場だか、隠居所だかわかりません」

「じや御客がなくても平気な訳だ」

「旦那は始めてで」

「いや、久しい以前ちよつと行つた事がある」

会話はちよつと途切れる。帳面をあけて先刻の鶏を静かに写生<sup>さつき</sup>

していると、落ちついた耳の底へじやらんじやらんと云う馬の鈴が聽え出した。この声がおのずと、拍子をとつて頭の中に一種の調子が出来る。眠りながら、夢に隣りの臼の音に誘われるような心持ちである。余は鶏の写生をやめて、同じページの端に、

春風や惟然が耳に馬の鈴

と書いて見た。山を登つてから、馬には五六匹逢つた。逢つた五六匹は皆腹掛をかけて、鈴を鳴らしている。今の世の馬とは思われない。

やがて長閑な馬子唄(のどか)が、春に更けた空山(まごうた)一路(くうざんいちらう)の夢を破る。憐れの底に氣楽な響(ひびき)がこもつて、どう考へても画(え)にかいだ声だ。

馬子唄の鈴鹿越ゆるや春の雨

と、今度は斜<sup>はず</sup>に書きつけたが、書いて見て、これは自分の句でないと気がついた。

「また誰ぞ来ました」と婆さんが半ば<sup>なか</sup>ひとり<sup>ひと</sup>言のように云う。

ただ一條<sup>ひとすじ</sup>の春の路だから、行くも帰るも皆近づきと見える。

最前<sup>お</sup>逢うた五六匹のじやらんじやらんもことごとくこの婆さんの腹の中でもまた誰ぞ來たと思われては山を下り、思われては山を登つたのだろう。路寂<sup>じやくまく</sup>寞<sup>ここん</sup>と古今の春を貫いて、花を厭<sup>いと</sup>えれば足を着くるに地なき小村<sup>こむら</sup>に、婆さんは幾<sup>いくねん</sup>年の昔からじやらん、じやらんを数え尽くして、今日<sup>こんにち</sup>の白頭<sup>はくとう</sup>に至つたのだろう。

馬子唄<sup>まご</sup>や白髪<sup>しらが</sup>も染めで暮るる春

と次のページへ認めたが、これでは自分の感じを云い終<sup>おお</sup>せない、

もう少し工夫のありそうなものだと、鉛筆の先を見詰めながら考えた。何でも白髪という字を入れて、幾代の節と云う句を入れて、馬子唄という題も入れて、春の季も加えて、それを十七字に纏めたいと工夫しているうちに、

「はい、今日は」と実物の馬子が店先に留つて大きな声をかける。  
「おや源さんか。また城下へ行くかい」

「何か買物があるなら頼まれて上げよ

「そうさ、鍛冶町かじちょうを通つたら、娘に靈巖寺れいがんじの御札おふだを一枚もらつてきておくれなさい」

「はい、貰つてきよ。一枚か。——御秋おあきさんは善よい所へ片づいて仕合せだ。な、御叔母おばさん」

「ありがたい事に今こんにちには困りません。まあ仕合せと云うのだが  
ろか」

「仕合せとも、御前。あの那古井なこいの嬢さまと比べて御覽」

「本当に御氣の毒な。あんな器量を持つて。近頃はちつとは具合  
がいいかい」

「なあに、相変らずさ」

「困るなあ」と婆さんが大きな息をつく。

「困るよう」と源さんが馬の鼻を撫なでる。

枝繁えだしげき山桜の葉も花も、深い空から落ちたままなる雨の塊かたま  
りを、しつぽりと宿していたが、この時わたる風に足をすべわれ  
て、いたまれずに、仮りの住居すまいを、さらさらと転ころげ落ちる。馬

は驚ろいて、長い鬚を上下に振る。

「コーラツ」と叱りつける源さんの声が、じやらん、じやらんと共に余の冥想を破る。

御婆さんが云う。「源さん、わたしや、お嫁入りのときの姿が、まだ眼前に散らついている。裾模様の振袖に、高島田で、馬に乗つて……」

「そうさ、船ではなかつた。馬であつた。やはりここで休んで行つたな、御叔母さん」

「あい、その桜の下で嬢様の馬がとまつたとき、桜の花がほろほろと落ちて、せつかくの島田に斑が出来ました」

余はまた写生帖をあける。この景色は画にもなる、詩にもなる。

心のうちに花嫁の姿を浮べて、当時の様を想像して見てしたり顔に、

### 花の頃を越えてかしこし馬に嫁

と書きつける。不思議な事には衣装も髪も馬も桜もはつきりと目に映じたが、花嫁の顔だけは、どうしても思いつけなかつた。しばらくあの顔か、この顔か、と思案しているうちに、ミレーのかいた、オフェリヤの面影おもかげが忽然こつぜんと出て来て、高島田の下へすぽりとはまつた。これは駄目だと、せつかくの図面さつそくを早速取り崩す。衣装も髪も馬も桜も一瞬間に心の道具立から奇麗きれいに立ち退いたが、オフェリヤの合掌して水の上を流れて行く姿だけは、朦朧もうろうと胸の底に残つて、棕梠箒しゆろぼうきで煙を払うように、さっぱり

しなかつた。空に尾を曳く彗星の何となく妙な気になる。

「それじや、まあ御免」と源さんが挨拶する。

「帰りにまた御寄り。あいにくの降りで七曲りは難儀だろ」

「はい、少し骨が折れよ」と源さんは歩行出す。源さんの馬も歩行出す。じやらんじやらん。

「あれは那古井の男かい」

「はい、那古井の源兵衛で御座んす」

「あの男がどこぞの嫁さんを馬へ乗せて、峠を越したのかい」とうげ

「志保田の嬢様が城下へ御輿入のときに、嬢様を青馬に乗せて、源兵衛が羈縄を牽いて通りました。——月日の立つのは早いもの

で、もう今年で五年になります」

鏡に對うときのみ、わが頭の白きを啣つものは幸の部に屬する人である。指を折つて始めて、五年の流光に、転輪の疾き趣を解し得たる婆さんは、人間としてはむしろ仙に近づける方だろう。余はこう答えた。

「さぞ美くしかつたろう。見にくればよかつた」

「ハハハ今でも御覧になれます。湯治場とうじばへ御越しなされば、きつと出て御挨拶をなされましよう」

「はあ、今では里にいるのかい。やはり裾模様すそもようの振袖ふりそでを着て、高島田に結つていればいいが」

「たのんで御覧なされ。着て見せましょ」

余はまさかと思つたが、婆さんの様子は存外真面目まじめである。非

人情の旅にはこんなのが出なくては面白くない。婆さんが云う。

「嬢様ながらと長良おとめの乙女おとめとはよく似ております」

「顔おもてがかい」

「いいえ。身の成り行きがで御座おざんす」

「へえ、その長良の乙女と云うのは何者かい」

「昔むかしこの村に長良の乙女と云う、美くしい 長ちょう者じやの娘が御座

りましたそうな」

「へえ」

「ところがその娘に二人の男が一度に懸想けそうして、あなた」

「なるほど」

「ささだ男に靡なびこうか、ささべ男に靡なびこうかと、娘はあけくれ思

い煩わざらつたが、どちらへも靡きかねて、とうとう

あきづけばをばなが上に置く露の、けぬべくもわは、おもほ  
ゆるかも

と云う歌を咏よんで、淵川ふちかわへ身を投げて果はてました』

余はこんな山里へ来て、こんな婆さんから、こんな古雅こがな言葉で、こんな古雅な話をきこうとは思おもいがけなかつた。

「これから五丁東くだへ下ると、道端みちばたに五輪塔ごりんのとうが御座んす。ついでに長良ながらの乙女おとめの墓を見て御行きなされ」

余は心のうちに是非見て行こうと決心した。婆さんは、そのあとを語りつづける。

「那古井の嬢様にも二人の男たちが祟たたりました。一人は嬢様が京都へ

修行に出て御出おいでの頃御逢おあいなさつたので、一人はこここの城下で随一の物持ちで御座んす」

「はあ、御嬢さんはどつちへ靡いたかい」

「御自身は是非京都の方へと御望みなさつたのを、そこには色々な理由わけもありましたらが、親ご様が無理にこちらへ取りきめて……」

⋮

「めでたく、渾川ふちかわへ身を投げんでも済んだ訳だね」

「ところが——先方さきでも器量望みで御貰おもらいなさつたのだから、随分大事にはなさつたかも知れませぬが、もともと強いられて御出なさつたのだから、どうも折合おりあいしがわるくて、御親類しゆりでもだいぶ御心配の様子で御座んした。ところへ今度の戦争で、旦那様の勤

めて御出の銀行がつぶれました。それから嬢様はまた那古井の方へ御帰りになります。世間では嬢様の事を不人情だとか、薄情だとか色々申します。もとは極々内氣の優しいかたが、この頃ではだいぶ気が荒くなつて、何だか心配だと源兵衛が来るたびに申します。……」

これからさきを聞くと、せつかくの趣向しうこうが壊れる。ようやく仙人になりかけたところを、誰か来て羽衣はごろもを帰せ帰せと催促さいそくするような気がする。七曲ななまがりの険を冒おかして、やつとの思おもいで、ここまで来たものを、そうむやみに俗界に引き下おろされては、飄ひ然ようぜんと家を出た甲斐かいがない。世間話ひもある程度以上に立ち入ると、浮世の臭においが毛孔けあなから染しみこ込んで、垢あかで身体からだが重くなる。

「御婆さん、那古井へは一筋道だね」と十銭銀貨を一枚床几の上へかちりと投げ出して立ち上がる。

「長良の五輪塔から右へ御下りなさると、六丁ほどの近道になります。路みちはわるいが、御若い方にはその方がよろしかる。——これは多分に御茶代を——氣をつけて御越しなされ」

### 三

昨夕は妙な気持ちがした。

宿へ着いたのは夜の八時頃であつたから、家の具合庭の作り方は無論、東西の区別さえわからなかつた。何だか廻廊のような所

をしきりに引き廻されて、しまいに六畳ほどの小さな座敷へ入れられた。昔むかし来た時とはまるで見当が違う。晩餐ばんさんを済まして、湯に入つて、室へやへ帰つて茶を飲んでいると、小女こおんなが来て床とこの延べよかと云う。

不思議に思つたのは、宿へ着いた時の取次も、晩食ばんめしの給仕も、湯壺ゆつぼへの案内も、床を敷く面倒も、ことごとくこの小女一人で弁じている。それで口は滅多めつたにきかぬ。と云うて、田舎染いなかじみてもおらぬ。赤い帯を色氣いろけなく結んで、古風な紙燭しそくをつけて、廊下のような、梯子段はしごだんのような所をぐるぐる廻わらされた時、同じ帯の同じ紙燭で、同じ廊下とも階段ともつかぬ所を、何度も降りて、湯壺へ連れて行かれた時は、すでに自分がら、カンヴァスの中

を往来しているような気がした。

給仕の時には、近頃は客がないので、ほかの座敷は掃除がしないから、普段<sup>ふだん</sup>使つている部屋で我慢してくれと云つた。床を延べる時にはゆるりと御休みと人間らしい、言葉を述べて、出て行つたが、その足音が、例の曲りくねつた廊下<sup>とおざ</sup>を、次第に下の方へ遠かつた時に、あとがひつそりとして、人の気が<sup>け</sup>しないのが気になつた。

生れてから、こんな経験はただ一度しかない。昔し房州<sup>ぼうしゅう</sup>を館<sup>たてやま</sup>山<sup>さん</sup>から向うへ突き抜けて、上総<sup>かずさ</sup>から銚子<sup>ちようし</sup>まで浜伝いに歩行<sup>あるい</sup>した事がある。その時ある晩、ある所へ宿<sup>とまつ</sup>た。ある所と云うよりほかに言いようがない。今では土地の名も宿の名も、まるで忘れて

しまつた。第一宿屋へとまつたのかが問題である。**棟の高い大き**  
 な家に女がたつた二人いた。余がとめるかと聞いたとき、年を取  
 つた方がはいと云つて、若い方がこちらへと案内をするから、つ  
 いて行くと、荒れ果てた、広い間<sup>ま</sup>をいくつも通り越して一番奥の、  
**中一階**<sup>ちゅうにかい</sup>へ案内をした。三段登つて廊下から部屋へ這入ろうとす  
 ると、板<sup>いた</sup>庇<sup>ひさし</sup>の下に傾<sup>かたむ</sup>きかけていた一叢<sup>ひとむら</sup>の修竹<sup>しゆうちく</sup>が、そよ  
 りと夕風を受けて、余の肩から頭を撫<sup>なな</sup>でたので、すでにひやりと  
 した。橡<sup>えん</sup>板<sup>いた</sup>はすでに朽ちかかっている。来年は筍<sup>たけのこ</sup>が橡を突き抜  
 いて座敷のなかは竹だらけになろうと云つたら、若い女が何にも  
 云わずににやにやと笑つて、出て行つた。

その晩は例の竹が、枕元で婆娑<sup>ばさ</sup>ついて、寝られない。障子<sup>しようじ</sup>を

あけたら、庭は一面の草原で、夏の夜の月明かるに、眼を走しらせると、垣も塀もあらばこそ、まともに大きな草山に続いている。草山の向うはすぐ大海原でどどんどんと大きな濤が人の世を威嚇しに来る。余はどうとう夜の明けるまで一睡もせずには、怪し気な蚊帳のうちに辛防しながら、まるで草双紙にでもありそうな事だと考えた。

その後旅もいろいろしたが、こんな氣持になつた事は、今夜この那古井へ宿るまではかつて無かつた。

仰向に寝ながら、偶然目を開けて見ると欄間に、朱塗りの縁をとつた額がかかるつている。文字は寝ながらも竹影払階塵不動と明らかに読まれる。大徹という落款もたしかに見

える。余は書においては皆無鑒識のない男だが、平生から、黄璧の高泉和尚の筆致を愛している。隠元も即非も木庵もそれぞれに面白味はあるが、高泉の字が一番蒼勁でしかも雅馴である。今この七字を見ると、筆のあたりから手の運び具合、どうしても高泉としか思われない。しかし現に大徹あるからには別人だろう。ことによると黄璧に大徹という坊主がいたかも知れぬ。それにしては紙の色が非常に新しい。どうしても昨今のものとしか受け取れない。

横を向く。床にかかっている若冲の鶴の図が目につく。これは商売柄だけに、部屋に這入った時、すでに逸品と認めた。若冲の図は大抵精緻な彩色ものが多いたが、この鶴は世間に気き

兼なしの一筆がきで、一本足ですらりと立つた上に、卵形の胴がふわっと乗かつている様子は、はなはだ吾意を得て、逸の趣は、長い嘴のさきまで籠つてゐる。床の隣りは違い棚を略して、普通の戸棚につづく。戸棚の中には何があるか分らない。すやすやと寝入る。夢に。

長良の乙女おとめが振袖ながらを着て、青馬あおに乗つて、峠を越すと、いきなり、ささだ男と、ささべ男が飛び出して両方から引つ張る。女が急にオフェリヤになつて、柳の枝へ上のぼつて、河の中を流れながら、うつくしい声で歌をうたう。救つてやろうと思つて、長い竿さおを持つて、向島むこうじまを追懸おつかけて行く。女は苦しい様子もなく、笑いながら、うたいながら、行末ゆくえも知らず流れを下る。余は竿をかつい

で、おおいおおいと呼ぶ。

そこで眼が醒めた。腋の下から汗が出ている。妙に雅俗混淆な夢を見たものだと思った。昔し宋の大慧禪師と云う人は、悟道の後、何事も意のごとくに出来ん事はないが、ただ夢の中では俗念が出て困ると、長い間これを苦にされたそうだが、なるほどもつともだ。文芸を性命にするものは今少しうつくしい夢を見なければ幅が利かない。こんな夢では大部分画にも詩にもならんと思ひながら、寝返りを打つと、いつの間にか障子に月がさして、木の枝が二三本斜めに影をひたしている。冴えるほどの春の夜だ。気のせいか、誰か小声で歌をうたつてゐるような気がする。夢のなかの歌が、この世へ抜け出したのか、あるいはこの世の声が遠

き夢の国へ、うつつながらに紛れ込んだのかと耳まきをそばだ時てる。たしかに誰かうたつていて。細くかつ低い声には相違ないが、眠らんとする春の夜に一縷よ  
いちるの脈をかすかに搏うたせつつある。不思議な事に、その調子はとにかく、文句をきくと——枕元でやつてるのでないから、文句のわかりようはない。——その聞えぬはずのものが、よく聞える。あきづけば、をばなが上に、おく露の、けぬべくもわは、おもほゆるかもと長良ながらの乙女おとめの歌を、繰り返し繰り返すように思われる。

初めのうちは櫻えんに近く聞えた声が、しだいしだいに細く遠退とおのいて行く。突然とやむものには、突然の感はあるが、憐れはうすい。ふつづりと思い切つたる声を聞く人の心には、やはりふつづりと

思い切つたる感じが起る。これと云う句切りもなく自然に細りて、いつの間にか消えるべき現象には、われもまた秒を縮め、分を割いて、心細さの細さが細る。死なんとしては、死なんとする病夫のごとく、消えんとしては、消えんとする灯火のごとく、今やむか、やむかとのみ心を乱すこの歌の奥には、天下の春の恨みをことごとく萃めたる調べがある。

今まで床の中に我慢して聞いていたが、聞く声の遠ざかるに連れて、わが耳は、釣り出さると知りつつも、その声を追いかげたくなる。細くなればなるほど、耳だけになつても、あとを慕つて飛んで行きたい気がする。もうどう焦慮ても鼓膜に応えはあるまいと思う一刹那の前、余はたまらなくなつて、われ知らず

布団ふとんをすり抜けると共にさらりと障子しようじを開けた。途端とたんに自分の膝ひざから下が斜めななに月の光りを浴びる。寝巻ねまきの上にも木の影が揺れながら落ちた。

障子をあけた時にはそんな事には気がつかなかつた。あの声はと、耳の走る見当を見破ると——向うにいた。花ならば海棠かいどうかと思わる幹を背せに、よそよそしくも月の光りを忍んで朦朧もうろうたる影法師かげぼうしがいた。あれかと思う意識さえ、確とは心にうつらぬ間に、黒いものは花の影を踏み碎いて右へ切れた。わがいる部屋つづきの棟むねの角かどが、すらりと動く、背せいの高い女姿を、すぐに遮つてしまふ。

借着かりぎの浴衣ゆかた一枚で、障子へつらまつたまま、しばらく茫然ぼうぜんと

していたが、やがて我に帰ると、山里の春はなかなか寒いものと悟つた。ともかくもと抜け出でた布団の穴に、再び帰参きさんして考え出した。括り枕くくまくらのしたから、袂時計たもとどけいを出して見ると、一時十分過ぎである。再び枕の下へ押し込んで考え出した。よもや化物ばけものではあるまい。化物でなければ人間で、人間ひととすれば女だ。あるいは此家の御嬢さんごじようさんかも知れない。しかし出帰でがえりの御嬢さんごじようさんとしては夜なかに山つづきの庭へ出るのがちと不穩當ふおんとうだ。何にしてもなかなか寝られない。枕の下にある時計までがちくちく口をきく。今まで懐中時計の音の気になつた事はないが、今夜に限つて、さあ考えろ、さあ考えろと催促さいそくすることく、寝るな寝るなど忠告ちゆうがくするごとく口をきく。怪けしからん。

怖いものもただ怖いものそのままの姿と見れば詩になる。凄い事も、己れを離れて、ただ単独に凄いのだと思えば画になる。失恋が芸術の題目となるのも全くその通りである。失恋の苦しみを忘れて、そのやさしいところやら、同情の宿るところやら、憂のこもるところやら、一歩進めて云えば失恋の苦しみそのものの溢るるところやらを、単に客観的に眼前に思い浮べるから文学美術の材料になる。世には有りもせぬ失恋を製造して、自から強いて煩悶して、愉快を貪ぼるものがある。常人はこれを評して愚だと云う、気違だと云う。しかし自から不幸の輪廓を描いて好んでその中に起臥するのは、自から烏有の山水を刻画して壺中の天地に歓喜すると、その芸術的の立脚地を得たる点において

全く等しいと云わねばならぬ。この点において世上幾多の芸術家は（日常の人としてはいざ知らず）芸術家として常人よりも愚である、氣違である。われわれは草鞋旅行をする間あいだ、朝から晩まで苦しい、苦しいと不平を鳴らしつづけているが、人に向つて曾遊そうゆうを説く時分には、不平らしい様子は少しも見せぬ。面白かつた事、愉快であつた事は無論、昔の不平をさえ得意に喋ちようちょう々日々して、したり顔である。これはあえて自ら欺くの、人を偽いつるのと云う了見りょうけんではない。旅行をする間は常人の心持ちで、曾遊を語るときはすでに詩人の態度にあるから、こんな矛盾が起る。して見ると四角な世界から常識と名のつく、一角いっかくを磨滅まめつして、三角のうちに住むのを芸術家と呼んでもよかろう。

この故に天然にあれ、人事にあれ、衆俗の辟易して近づきがたしとなすところにおいて、芸術家は無数の琳琅を見、無上の宝璐を知る。俗にこれを名けて美化と云う。その実は美化でも何でもない。燦爛たる彩光は、炳乎として昔から現象世界に実在している。ただ一翳眼に在つて空花乱墜するが故に、俗累の羈絆牢として絶ちがたきが故に、榮辱得喪のわれに逼る事、念々切なるが故に、ターナーが汽車を写すまでは汽車の美を解せず、応挙が幽靈を描くまでは幽靈の美を知らずに打ち過ぎるのである。

余が今見た影法師も、ただそれきりの現象とすれば、誰れが見ても、誰に聞かしても饒に詩趣を帶びている。——孤村の温泉、

——春宵の花影、——月前の低誦、——朧夜の姿——  
 ——どれもこれも芸術家の好題目である。この好題目が眼前にありながら、余は入らざる詮義立てをして、余計な探ぐりを投げ込んでいる。せつかくの雅境に理窟の筋が立つて、願つてもない風流を、氣味の悪わるさが踏みつけにしてしまつた。こんな事なら、  
 非人情も標榜する価値がない。もう少し修行をしなければ詩人とも画家とも人に向つて吹聴する資格はつかぬ。昔し以太利亞の画家サルヴァトル・ロザは泥棒が研究して見たい一心から、おのれの危険を賭にして、山賊の群に這入り込んだと聞いた事がある。飄然と画帖を懷にして家を出でたからには、余にもそのくらいの覚悟がなくては恥ずかしい事だ。

こんな時にどうすれば詩的な立脚地に帰れるかと云えば、おのれの感じ、そのものを、おのが前に据えつけて、その感じから一步退いて有体に落ちついて、他人らしくこれを検査する余地さえ作ればいいのである。詩人とは自分の屍骸を、自分で解剖して、その病状を天下に発表する義務を有している。その方便は色々あるが一番手近なのは何でも蚊でも手当り次第十七字にまとめて見るのが一番いい。十七字は詩形としてもつとも軽便であるから、顔を洗う時にも、廁に上つた時にも、電車に乗つた時にも、容易に出来る。十七字が容易に出来ると云う意味は安直に詩人になると云う意味であつて、詩人になると云うのは一種の悟りであるから軽便だと云つて侮蔑する必要はない。軽便であれば

あるほど功德<sup>くどく</sup>になるからかえつて尊重すべきものと思う。まあちよつと腹が立つと仮定する。腹が立つたところをすぐ十七字にする。十七字にするときは自分の腹立ちがすでに他人に変じている。腹を立つたり、俳句を作つたり、そう一人<sup>ひとり</sup>が同時に働くものではない。ちよつと涙をこぼす。この涙を十七字にする。するや否<sup>いな</sup>やうれしくなる。涙を十七字に纏<sup>まと</sup>めた時には、苦しみの涙は自分から遊離<sup>ゆうり</sup>して、おれは泣く事の出来る男だと云う嬉しさだけの自分になる。

これが平生<sup>へいぜい</sup>から余の主張である。今夜も一つこの主張を実行して見ようと、夜具の中で例の事件を色々と句に仕立てる。出来たら書きつけないと散漫<sup>さんまん</sup>になつていかぬと、念入りの修業だか

ら、例の写生帖をあけて枕元へ置く。

「海棠の露をふるふや物狂ひ」と真先に書き付けて読んで見ると、別に面白くもないが、さりとて氣味のわるい事もない。次に「花の影、女の影の朧かな」とやつたが、これは季が重なつてゐる。しかし何でも構わない、気が落ちついて呑気になればいい。それから「正一位、女に化けて朧月」と作つたが、狂句めいて、自分がらおかしくなつた。

この調子なら大丈夫と乗気になつて出るだけの句をみなかき付ける。

春の星を落して夜半のかざしかな

春の夜の雲に濡らすや洗ひ髪

春や今宵歌つかまつる御姿  
海棠のかいだうの精が出てくる月夜かな

うた折々月下の春ををちこちす

思ひ切つて更け行く春の独りかな  
などと、試みているうち、いつしか、うとうと眠くなる。

恍惚こうこつと云うのが、こんな場合に用いるべき形容詞かと思う。

熟睡がいかいのうちには何人なんびとも我を認め得ぬ。明覚めいかくの際には誰たれあって  
外界がいかいを忘るるものはなかろう。ただ両域の間に縷るのごとき幻境  
が横よこたわる。醒さめたりと云うには余り臚おぼろにて、眠ると評せんには少  
しく生氣せいきを剥あます。起臥起きの二界を同瓶裏どうへいりに盛りて、詩歌しひかの彩管さいかん  
をもつて、ひたすらに攬かき雜まぜたるがごとき状態を云うのである。

自然の色を夢の手前までぼかして、ありのままの宇宙を一段、霞かすみてまえでぼかして、ありのままの宇宙を一段、霞かすみの国へ押し流す。睡魔の妖腕ようわんをかりて、ありとある実相の角度なめらかを滑かにすると共に、かく和やわらげられたる乾坤けんこんに、われからと微かに鈍にぶき脈みを通わせる。地はを這う煙の飛ばんとして飛び得ざるごとく、わが魂たましいの、わが殻からを離れんとして離れるに忍びざる態ていである。抜け出でんとして逡巡ためらい、逡巡ためらいては抜け出でんとし、果はては魂と云う個体を、もぎどうに保たもちかねて、氤いん氤うんたる暝めい氛ふんが散るともなしに四肢五体に纏てんめん綿めいして、依々たり恋れんれん々たる心持ちである。

余が寤寐ごびの境さかいにかく逍しよう遙ようしていると、入口の唐紙からかみがすうと開いた。あいた所へまぼろしのごとく女の影がふうと現われた。

余は驚きもせぬ。恐れもせぬ。ただ心地よく眺めている。眺めると云うてはちと言葉が強過ぎる。余が閉じている瞼の裏に幻影の女が断りもなく滑り込んで来たのである。まぼろしはそろりそろりと部屋のなかに這入る。仙女の波をわたるがごとく、畳の上には人らしい音も立たぬ。閉ずる眼のなかから見る世の中だから確とは解らぬが、色の白い、髪の濃い、襟足の長い女である。

近頃はやる、ぼかした写真を灯影にすかすような気がする。

まぼろしは戸棚の前でとまる。戸棚があく。白い腕が袖をすべつて暗闇のなかにほのめいた。戸棚がまたしまる。畠の波がおのずから幻影を渡し返す。入口の唐紙がひとりでに閉たる。余が眠りはしだいに濃やかになる。人に死して、まだ牛にも馬にも生

れ変わらない途中はこんなであろう。

いつまで人と馬の相あいなか中に寝ていたかわれは知らぬ。耳元にききつと女の笑い声がしたと思つたら眼がさめた。見れば夜の幕はとくに切り落されて、天下は隅すみから隅まで明るい。うららかな春は日るびが丸窓の竹格子たけごうしを黒く染め抜いた様子を見ると、世の中に不思議と云うものの潜ひそむ余地はなさそうだ。神秘は十萬億土じゅうまんおくどへ帰つて、三途の川さんずのかわの向むこうがわ側がわへ渡つたのだろう。

浴衣ゆかたのまま、風呂場ふろばへ下りて、五分ばかり偶然と湯壺ゆつぼのなかで顔を浮かしていた。洗う気にも、出る気にもならない。第一昨夕ゆうべはどうしてあんな心持ちになつたのだろう。昼と夜さかいを界にこう天は地が、でんぐり返るのは妙だ。

身体を拭くさえ退儀だから、いい加減にして、濡れたまま上つて、風呂場の戸を内から開けると、また驚かされた。

「御早う。昨夕はよく寝られましたか」

戸を開けるのと、この言葉とはほとんど同時にきた。人のいるさえ予期しておらぬ出合頭の挨拶だから、さそくの返事も出る違さえないうちに、

「さ、御召しなさい」

と後ろへ廻つて、ふわりと余の背中へ柔かい着物をかけた。ようやくの事「これはありがとう……」だけ出して、向き直る、途端に女は二三歩退いた。

昔から小説家は必ず主人公の容貌を極力描写することに相場

がきまつてゐる。古今東西の言語で、佳人の品評に使用せられたるものを見挙げたならば、大藏經とその量を争うかも知れぬ。この辟易すべき多量の形容詞中から、余と三歩の隔りに立つ、体を斜めに捩つて、後目に余が驚愕と狼狽を心地よげに眺めている女を、もつとも適当に叙すべき用語を拾い来つたら、どれほどの数になるか知れない。しかし生れて三十余年の今日に至るまで未だかつて、かかる表情を見た事がない。美術家の評によると、希臘の彫刻の理想は、端肅の二字に帰するそうである。端肅とは人間の活力の動かんとして、未だ動かざる姿と思う。動けばどう変化するか、風雲か雷霆か、見わけのつかぬところに余韻が縹渺と存するから含蓄の趣を百

世いの後に伝うるのであろう。世上幾多の尊厳と威儀とはこの湛ぜん然たる可能力の裏面に伏在している。動けばあらわれる。あらわるれば一か二か三か必ず始末がつく。一も二も三も必ず特殊の能⼒には相違なかろうが、すでに一となり、二となり、三となつた暁には、泥帶水の陋ろうを遺憾いかんなく示して、本来円満の相に戻る訳には行かぬ。この故ゆえに動どうと名のつくものは必ず卑しい。運慶うんけいの仁王おうも、北斎ほくさいの漫画まんがも全くこの動の一字で失敗している。動か静か。これがわれら画工がこうの運命を支配する大問題である。古来美人の形容も大抵はこの二大範はん疇ちゆうのいずれにか打ち込む事が出来べきはずだ。

ところがこの女の表情を見ると、余はいざれとも判断に迷つた。

口は一文字を結んで静である。眼は五分のすきさえ見出すべく動いている。顔は下膨の瓜実形で、豊かに落ちつきを見せているに引き易えて、額は狭苦しくも、こせついて、いわゆる富士額の俗臭を帶びている。のみならず眉は両方から逼つて、中間に数滴の薄荷を点じたることく、ぴくぴく焦慮している。鼻ばかりは軽薄に鋭どくもない、遲鈍に丸くもない。画にしたら美しかろう。かように別れ別れの道具が皆一癖あつて、乱調にどやどやと余の双眼に飛び込んだのだから迷うのも無理はない。

元来は静であるべき大地の一角に陥欠が起つて、全体が思わず動いたが、動くは本来の性に背くと悟つて、力めて往昔の姿にもどううとしたのを、平衡を失つた機勢に制せられて、心なら

すも動きつづけた今こんにち日は、やけだから無理でも動いて見せると云わぬばかりの有様が——そんな有様がもしあるとすればちようどこの女を形容する事が出来る。

それだから軽侮けいぶの裏に、何となく人に縋りたい景色が見える。

人を馬鹿にした様子の底に慎つつしみ深い分別ふんべつがほのめいでいる。才に任せ、気を負えれば百人の男子を物の数とも思わぬ勢いきおいの下から温お和となしい情けが吾知らず湧わいて出る。どうしても表情に一致がない。悟りと迷まよいが一軒の家に喧嘩けんかをしながらも同居ていしている体だ。この女の顔に統一の感じのないのは、心に統一のない証拠で、心に統一がないのは、この女の世界に統一がなかつたのだろう。不幸に压おしつけられながら、その不幸に打ち勝とうとしている顔だ。不ふ

仕合しあわせな女に違ない。

「ありがとう」と繰り返しながら、ちよつと会えしゃく釈した。  
 「ほほほほ御部屋は掃除そうじがしてあります。往いつて御覧なさい。い  
 ずれ後のちほど」

と云うや否いなや、ひらりと、腰をひねつて、廊下を軽氣かろげに馳かけて行  
 つた。頭は銀杏いちょうがえし返に結いつていて、白い襟えりがたぼの下から見え  
 る。帯の黒縄くろじゆ子は片側かたかわだけだろう。

ぽかんと部屋へ帰ると、なるほど奇麗きれいに掃除がしてある。ちよ

## 四

つと気がかりだから、念のため戸棚をあけて見る。下には小さな用簾ようだんすが見える。上から友禅ゆうぜんの扱帶しごきが半分垂たたれかかって、いるのは、誰か衣類でも取り出して急いで、出て行つたものと解釈が出来る。扱帶の上部はなまめかしい衣裳いしょうの間にかくれて先は見えない。片側には書物が少々詰めてある。一番上に白隱和尚はくいんおしょの遠良天釜おらてがまと、伊勢物語いせものがたりの一巻が並んでる。昨夕ゆうべのうつつは事実かも知れないと思つた。

何氣なく座布団ざぶとんの上へ坐ると、唐木からきの机の上に例の写生帖なにげが、鉛筆を挟はさんだまま、大事そうにあけてある。夢中に書き流した句を、朝見たらどんな具合だろうと手に取る。

「海棠かいだうの露ものぐるひをふるふや物狂」の下にだれだか「海棠の露をふるふ

や朝烏あさがらす」とかいたものがある。鉛筆だから、書体はしかと解わからんが、女にしては硬過ぎかたする、男にしては柔か過ぎやわらる。おやとまた吃驚びっくりする。次を見ると「花の影、女の影の朧かなおぼろかな」の下に「花の影女の影を重ねけりかさかせり」とつけてある。「正一位しやういちら」女に化けて朧月おぼろづき」の下には「御曹子女に化けて朧月おぼろづき」とある。真似まねをしたつもりか、添削てんさくした気か、風流の交わりか、馬鹿か、馬鹿にしたのか、余は思わず首を傾かたむけた。

後ほどと云つたから、今に飯めしの時にでも出て来るかも知れない。  
出て来たら様子が少しは解るだろう。ときには時計を見ると、もう十一時過ぎである。よく寝たものだ。これでは午飯ひるめしだけで間に合せる方が胃のためによかろう。

右側の障子をあけて、昨夜の名残はどの辺かなと眺める。海棠と鑑定したのははたして、海棠であるが、思つたよりも庭は狭い。五六枚の飛石を一面の青苔が埋めて、素足で踏みつけたら、さも心持ちがよきそうだ。左は山つづきの崖に赤松が斜めに岩の間から庭の上へさし出している。海棠の後ろにはちよつとした茂みがあつて、奥は大竹藪が十丈の翠りを春の日に曝している。右手は屋の棟で遮ぎられて、見えぬけれども、地勢から察すると、だらだら下りに風呂場の方へ落ちているに相違ない。

山が尽きて、岡となり、岡が尽きて、幅三丁ほどの平地となり、その平地が尽きて、海の底へもぐり込んで、十七里向うへ行つてまた隆然と起き上つて、周囲六里の摩耶島となる。これが那

古井の地勢である。温泉場は岡の麓ふもとを出来るだけ崖がけへさしかけて、  
 岐の景色を半分庭へ囲い込んだ一構ひとかまえであるから、前面は二階  
 でも、後ろは平屋ひらやになる。椽えんから足をぶらさげれば、すぐと踵かかと  
 菖こけに着く。道理こそ昨夕は楷子段はしごだんをむやみに上のぼつたり、下くだつた  
 り、異な仕掛けいしかけの家うちと思つたはずだ。

今度は左り側の窓を開ける。自然と凹む二畳ばかりの岩のなか  
 に春の水がいつともなく、たまつて静かに山桜の影をひたしている。  
 二株ふたか三株ぶみかぶの熊笹くまさざが岩の角を彩いろどる、向うに枸杞くくとも見える生  
 垣けがきがあつて、外は浜から、岡へ上の岐道そばみちか時々人声が聞える。  
 往來の向うはだらだらと南下みなみさがりに蜜柑みかんを植えて、谷の窮きわまる  
 所にまた大きな竹藪が、白く光る。竹の葉が遠くから見ると、白

く光るとはこの時初めて知つた。藪から上は、松の多い山で、赤い幹の間から石磴<sup>せきとう</sup>が五六段手にとるように見える。大方御寺だろう。

入口の襖<sup>ふすま</sup>を開け、櫻<sup>えん</sup>へ出ると、欄干<sup>らんかん</sup>が四角に曲つて、方角から云えば海の見ゆべきはずの所に、中庭を隔てて、表二階の一間<sup>ひとま</sup>がある。わが住む部屋も、欄干に倚ればやはり同じ高さの二階なのには興が催おされる。湯壺<sup>ゆつぼ</sup>は地<sup>じ</sup>の下にあるのだから、入湯<sup>にゆうとう</sup>と云う点から云えば、余は三層樓上に起臥<sup>きが</sup>する訳になる。

家は随分広いが、向う二階の一間と、余が欄干に添うて、右へ折れた一間のほかは、居室台所は知らず、客間と名がつきそうなのは大抵<sup>たいてい</sup>立て切つてある。客は、余をのぞくのほかほとんど皆<sup>か</sup>

無いむなのだろう。しめた部屋は昼も雨あまど戸戸をあけず、あけた以上は夜も閉たぬらしい。これでは表の戸締りさえ、するかしないか解らん。非人情の旅にはもつて来いと云う屈くつきよう強な場所だ。

時計は十二時近くなつたが飯めしを食わせる景色はさらにない。ようやく空腹を覚えて来たが、空山くうざん不見ひとをみず人と云う詩中にあるとと思うと、一とかたげぐらい僕約いがんしても遺憾はない。画えをかくのも面倒だ、俳句は作らんでもすでに俳三昧はいざんまいに入つてゐるから、作るだけ野暮やぼだ。読もうと思つて三脚さんきやくき几くに括りつけて來た二三冊の書籍もほどく氣にならん。こうやつて、煦々くくたる春日しゆんじつ背せなか中をあぶつて、橡えんがわ側に花の影と共に寝ころんでいるのが、天下の至らく樂である。考えれば外道に堕おげどうちる。動くと危ない。出来るならば

鼻から呼吸もしたくない。畳から根の生えた植物のようにじつとして二週間ばかり暮して見たい。

やがて、廊下に足音がして、段々下から誰か上<sup>あが</sup>つてくる。近づくのを聞いていると、二人らしい。それが部屋の前でとまつたなと思つたら、一人はなんにも云わず、元の方へ引き返す。襖<sup>ふすま</sup>がありたから、今朝の人と思つたら、やはり昨夜<sup>ゆうべ</sup>の小女郎<sup>こじょろう</sup>である。何だか物足らぬ。

「遅くなりました」と膳<sup>ぜん</sup>を据<sup>す</sup>える。朝食<sup>あさめし</sup>の言訳も何にも言わぬ。焼肴<sup>やきざかな</sup>に青いものをあしらつて、椀<sup>わん</sup>の蓋<sup>ふた</sup>をとれば早蕨<sup>さわらび</sup>の中に、紅白に染め抜かれた、海老<sup>えび</sup>を沈ませてある。ああ好い色だと思つて、椀の中を眺<sup>なが</sup>めていた。

「御嫌いか」と下女が聞く。

「いいや、今に食う」と云つたが實際食うのは惜しい気がした。ターナーがある晩餐の席で、皿に盛るもサラドを見詰めながら、涼しい色だ、これがわしの用いる色だと傍の人に話したと云う逸事をある書物で読んだ事があるが、この海老と蕨の色をちよつとターナーに見せてやりたい。いつたい西洋の食物で色のいいものは一つもない。あればサラドと赤大根ぐらいなものだ。滋養の点から云つたらどうか知らんが、画家から見るとすこぶる発達せん料理である。そこへ行くと日本の献立は、吸物でも、口取でも、刺身でも物奇麗に出来る。会席膳を前へ置いて、一箸も着けずに、眺めたまま帰つても、目の保養から云え巴、御茶屋

へ上がつた甲斐<sup>かい</sup>は充分ある。

「うちに若い女の人<sup>が</sup>いるだろう」と椀を置きながら、質問をかけた。

「へえ」

「ありや何だい」

「若い奥様でござんす」

「あのほかにまだ年寄の奥様がいるのかい」

「去年御亡<sup>おな</sup>くなりました」

「旦那さんは」

「おります。旦那さんの娘さんでござんす」

「あの若い人<sup>が</sup>かい」

「へえ」

「御客はいるかい」

「おりません」

「わたし一人かい」

「へえ」

「若い奥さんは毎日何をしているかい」

「針仕事を……」

「それから」

「三味を弾きます」

これは意外であつた。面白いからまた

「それから」と聞いて見た。

「御寺へ行きます」と小女郎こじょろうが云う。

これはまた意外である。御寺と三味線は妙だ。

「御寺まい詣りまいをするのかい」

「いいえ、和尚様おしょうさまの所へ行きます」

「和尚さんが三味線でも習うのかい」

「いいえ」

「じゃ何をしに行くのだい」

「大徹だいてつ様さまの所へ行きます」

なあるほど、大徹と云うのはこの額を書いた男に相違ない。この句から察すると何でも禅坊ぜんぼう主うらしい。戸棚に遠良天釜おらてがまがあつたのは、全くあの女の所持品だろう。

「この部屋は普段誰か這入つている所かね」

「普段は奥様がおります」

「それじゃ、昨夕ゆうべ、わたしが来る時までここにいたのだね」

「へえ」

「それは御気の毒な事をした。それで大徹さんの所へ何をしに行  
くのだい」

「知りません」

「それから」

「何でござんす」

「それから、まだほかに何かするのだろう」

「それから、いろいろ……」

「いろいろつて、どんな事を」

「知りません」

会話はこれで切れる。飯はようやく了る。膳を引くとき、小女郎が入口の襖を開たら、中庭の栽込みを隔てて、向う二階の欄干に銀杏返しが頬杖を突いて、開化した楊柳観音のよう

に下を見詰めていた。今朝に引き替えて、はなはだ静かな姿である。俯向いて、瞳の働きが、こちらへ通わないから、相好にかほどな変化を来たしたものであろうか。昔の人は人に存するもの眸子より良きはなしと云つたそうだが、なるほど人焉んぞさんや、人間のうちで眼ほど活きている道具はない。寂然と倚る亞字欄の下から、蝶々が二羽寄りつ離れつ舞い上がる。途端

にわが部屋の襖はあいたのである。襖の音に、女は卒然と蝶から眼を余の方に転じた。視線は毒矢の「」とく空を貫いて、会釈もなく余が眉間に落ちる。はつと思う間に、小女郎が、またはたと襖を立て切つた。あとは至極呑気な春となる。

余はまた「」へりと寝こんだ。たちまち心に浮んだのは、

Sadder than is the moon's lost light,

Lost ere the kindling of dawn,

To travellers journeying on,

The shutting of thy fair face from my sight.

と「」であつた。もし余があの銀杏返しに懸想して、身を碎いても逢わんと思つ矢先に、今のような一瞥の別れを、魂消るま

でに、嬉しとも、口惜しとも感じたら、余は必ず「んな意味をこ  
んな詩を作るだらう。その上に

Might I look on thee in death,

With bliss I would yield my breath.

と日本の一 句やハレ、付け加えたかも知れぬ。幸い、普通ありふれた、  
恋とか愛とか云つ 境界 はすでに通り越して、そんな苦しみは  
感じたくとも感じられない。しかし今の刹那に起つた出来事の詩  
趣はゆたかにこの五六行にあらわれている。余と銀杏返しの間  
柄 にこんな切ない思はないとしても、二人の今の関係を、この  
詩の中に適用して見るのは面白い。あるいはこの詩の意味をわれ  
らの身の上に引きつけて解釈しても愉快だ。二人の間には、ある

因果の細い糸で、この詩にあらわれた境遇の一部分が、事実となつて、括りつけられている。因果もこのくらい糸が細いと苦くにはならぬ。その上、ただの糸ではない。空を横切る虹の糸、野辺に棚引く霞の糸、露にかがやく蜘蛛の糸。切ろうとすれば、すぐ切れて、見ているうちに勝れてうつくしい。万一この糸が見る間に太くなつて井戸縄のようにかたくなつたら？ そんな危険はない。余は画工である。先はただの女とは違う。

突然襖があいた。寝返りを打つて入口を見ると、因果の相手のその銀杏返しが敷居の上に立つて青磁の鉢を盆に乗せたまま佇んでいる。

「また寝ていらっしやるか、昨夕は御迷惑で御座んしたろう。何な

返んべんも御邪魔をして、「ほほほほ」と笑う。臆おくした景色けしきも、隠す景色も——恥ずる景色は無論ない。ただこちらが先せんを越されたのみである。

「今朝はありがとう」とまた礼を云つた。考えると、丹前たんぜんの礼をこれで三返べん云つた。しかも、三返ながら、ただ難有うと云う三字である。

女は余が起き返ろうとする枕元へ、早くも坐つて

「まあ寝ていらっしゃい。寝ても話は出来ましよう」と、さも氣作きさくに云う。余は全くだと考えたから、ひとまず腹はら這ばいになつて、両手で顎あごを支え、しばし畳の上へ肘壺ひじづぼの柱を立てる。

「御退屈だろうと思つて、御茶を入れに来ました」

「ありがとう」またありがとうが出た。菓子皿のなかを見ると、立派な羊羹ようかんが並んでいる。余はすべての菓子のうちでもつとも羊羹ようかんが好だ。別段食いたくはないが、あの肌合はだあいが滑らかに、緻密みつに、しかも半透明はんとうめいに光線を受ける具合は、どう見ても一個の美術品だ。ことに青味を帶びた煉上げ方ねりあわせは、玉と蠟石ぎょくろうせきの雑種のようで、はなはだ見て気持ちがいい。のみならず青磁の皿に盛られた青い煉羊羹は、青磁のなから今生れたようにつやつやして、思わず手を出して撫なでて見たくなる。西洋の菓子で、これほど快感を与えるものは一つもない。クリームの色はちよつと柔やわらかだが、少し重苦しい。ジエリは、一いちもく目宝石のように見えるが、ぶるぶる颤ふるえて、羊羹ほどの重味がない。白砂糖と牛乳で五重の塔を作

るに至つては、言語道断の沙汰である。

「うん、なかなか美事だ」

「今しがた、源兵衛が買つて帰りました。これならあなたに召し上がられるでしよう」

源兵衛は昨夕城下へ留つたと見える。余は別段の返事もせず羊羹を見ていた。どこで誰が買つて来ても構う事はない。ただ美くしければ、美くしいと思うだけで充分満足である。

「この青磁の形は大変いい。色も美事だ。ほとんど羊羹に対して遜色がない」

女はふふんと笑つた。口元に侮どりの波が微かに揺れた。余の言葉を洒落と解したのだろう。なるほど洒落とすれば、軽蔑

される価あたいはたしかにある。智慧ちえの足りない男が無理に洒落れた時には、よくこんな事を云うものだ。

「これは支那ですか」

「何ですか」と相手はまるで青磁を眼中に置いていない。

「どうも支那らしい」と皿を上げて底ながを眺めて見た。

「そんなものが、御好きなら、見せましようか」

「ええ、見せて下さい」

「父こつとうが骨董こつとうが大好きですから、だいぶいろいろなものがあります。父にそう云つて、いつか御茶でも上げましよう」

茶と聞いて少し辟へきえき易した。世間に茶人ちゃじんほどもつたいぶつた風流人はない。広い詩界をわざとらしく窮屈なわばに繩張りをして、極きわ

めて自尊的に、極めてことさらに、極めてせせこましく、必要もないのに 鞠躬如きくきゅうじよとして、あぶくを飲んで結構がるものはないわゆる茶人である。あんな煩瑣はんさな規則のうちに雅味があるなら、麻布の聯隊ざぶれんたいのなかは雅味で鼻がつかえるだろう。廻れ右、前への連中はことごとく大茶人でなくてはならぬ。あれは商人とか町人とか、まるで趣味の教育のない連中が、どうするのが風流か見当がつかぬところから、器械的に利休りきゅう以後の規則を鵜呑うのみにして、これでおおかた風流なんだろう、とかえつて眞の風流人を馬鹿にするための芸である。

「御茶つて、あの流儀のある茶ですかな」

「いいえ、流儀も何もありやしません。御厭おいやなら飲まなくつても

いい御茶です

「そんなら、ついでに飲んでもいいですよ」

「ほほほほ。父は道具を人に見ていただくのが大好きなんですか  
ら……」

「褒めなくつちやあ、いけませんか」

「年寄りだから、褒めてやれば、嬉しがりますよ」

「へえ、少しなら褒めて置きましょう」

「負けて、たくさん御褒めなさい」

「はははは、時にあなたの言葉は田舎いなかじやない」

「人間は田舎なんですか」

「人間は田舎の方がいいのです」

「それじゃ幅<sup>はば</sup>が利<sup>き</sup>きます」

「しかし東京にいた事がありましょ<sup>う</sup>う」

「ええ、いました、京都にもいました。渡りものですから、方々にいました」

「ここと都と、どつちがいいですか」

「同じ事ですわ」

「こう云う静かな所が、かえつて氣樂でしょ<sup>う</sup>う」

「氣樂も、氣樂でないも、世の中は氣の持ちよう一つでどうでもなります。のみ 蟲<sup>のみ</sup>の国<sup>いや</sup>が厭<sup>いや</sup>になつたつて、蚊<sup>か</sup>の国<sup>ひつこ</sup>へ引越し<sup>ひきこ</sup>しゃ、何<sup>なん</sup>にもなりません」

「蚤<sup>は</sup>も蚊<sup>も</sup>いな<sup>い</sup>国<sup>へ</sup>行<sup>つ</sup>たら、いいでしょ<sup>う</sup>う」

「そんな国があるなら、ここへ出して御覧なさい。さあ出してちようだい」と女は詰め寄せる。

「御望みなら、出して上げましよう」と例の写生帖をとつて、女が馬へ乗つて、山桜を見ている心持ち——無論とつさの筆使いだから、画にはならない。ただ心持ちだけをさらさらと書いて、

「さあ、この中へ御這入りなさい。蚤も蚊もいません」と鼻の前へ突きつけた。驚くか、恥ずかしがるか、この様子では、よもや、苦しがる事はなかろうと思つて、ちよつと景色を伺うと、

「まあ、窮屈な世界だこと、横幅ばかりじやありませんか。そんな所が御好きなの、まるで蟹ね」と云つて退けた。余は「わはははは」と笑う。軒端に近く、啼きかけた鶯が、中途で声

を崩して、遠き方へ枝移りをやる。兩人はわざと対話をやめて、

しばらく耳を峙てたが、いつたん鳴き損ねた咽喉は容易に開けぬ。

「昨日は山で源兵衛に御逢いでしたろう」

「ええ」

「ながら おとめ ごりんのとう 長良の乙女の五輪塔を見ていらしつたか」

「ええ」

「あきづけば、をばなが上に置く露の、けぬべくもわは、おもほ  
ゆるかも」と説明もなく、女はすらりと節もつけずに歌だけ述べ  
た。何のためか知らぬ。

「その歌はね、茶店で聞きましたよ」

「婆さんが教えましたか。あれはもと私のうちへ奉公したもので、

私がまだ嫁に……」と云いかけて、これはと余の顔を見たから、余は知らぬ風をしていた。

「私がまだ若い時分でしたが、あれが来るたびに長良の話をして聞かせてやりました。うただけはなかなか覚えなかつたのですが、何遍も聴きくうちに、とうとう何もかも 詳あんしょう誦じゅうしてしまいました」

「どうれで、むずかしい事を知つてると思つた。——しかしあの歌は憐あわれな歌ですね」

「憐れでしようか。私ならあんな歌は咏よみませんね。第一、淵ふちか川わへ身を投げるなんて、つまらないじやありませんか」

「なるほどつまらないですね。あなたならどうしますか」

「どうするつて、訳ないじやありませんか。さきだ男もささベ男

も、男妾おとこめかにするばかりですか

「両方ともですか」

「ええ」

「えらいな」

「えらかがない、当たり前ですか」

「なるほどそれじや蚊の国へも、蚤の国へも、飛び込まずに済む

訳だ」

「蟹のような思いをしなくつても、生きていられるでしょう」

ほーう、ほけきようと忘れかけた鶯うぐいすが、いつ勢いきおいを盛り返してか、

時ならぬ高音たかねを不意に張つた。一度立て直すと、あとは自然に出  
ると見える。身を逆さかしまにして、ふくらむ咽喉のどの底を震ふるわして、小

さき口の張り裂くるばかりに、

ほーう、ほけきよーう。ほーー、ほけつーきようーと、つづけ  
様に嶃する。<sup>さまざえ</sup>

「あれが本当の歌です」と女が余に教えた。

## 五

「失礼ですが旦那は、やつぱり東京ですか」

「東京と見えるかい」

「見えるかいって、一目見りやあ、——第一言葉でわかりまさあ」

「東京はどこだか知れるかい」

「そうさね。東京は馬鹿に広いからね。——何でも下町じやねえようだ。山の手だね。山の手は麴町かね。え？ それじや、小石川？ でなければ牛込か四谷でしよう」

「まあそんな見当だろう。よく知つてゐな」

「こう見えて、私も江戸つ子だからね」

「道理で生糀だと思つたよ」

「えへへへへ。からつきし、どうも、人間もこうなつちや、みじめですぜ」

「何でまたこんな田舎へ流れ込んで来たのだい」

「ちげえねえ、旦那のおつしやる通りだ。全く流れ込んだんだからね。すっかり食い詰めつちまつて……」

「もとから髪結床の親方かね」

「親方じやねえ、職人さ。え？ 所かね。所は 神田松永町かんだまつながちようでさあ。なあに猫の額ひたい見たような小さな汚ねえ町でさあ。旦那なん  
か知らねえはずさ。あすこに 竜閑橋りゆうかんばしてえ橋がありましよう。  
え？ そいつも知らねえかね。竜閑橋や、名代なだいな橋だがね」

「おい、もう少し、石鹼しゃほんを塗つけてくれないか、痛くって、いけ  
ない」

「痛いたうがすかい。私わっちや 痛いた性かんしょうでね、どうも、こうやつて、逆さかず  
剃りをかけて、一本一本髪ひげの穴を掘らなくつちや、気が済まねえ  
んだから、——なあに 今時いまどきの職人なあ、剃するんじやねえ、撫なで  
るんだ。もう少しだ我慢おしなせえ」

「我慢さつきは先さつから、もうだいぶしたよ。御願だから、もう少し湯か石鹼をつけとくれ」

「我慢しきれねえかね。そんなに痛かあねえはずだが。全體ぜんたい、髭ひざがあんまり、延び過ぎてるんだ」

やけに頬の肉をつまみ上げた手を、残念そうに放した親方は、棚たなの上から、薄うすつ片ぺらな赤い石鹼を取り卸おろして、水のなかにちょっと浸ひたしたと思つたら、それなり余の顔をまんべんなく一応撫で廻わした。裸石鹼を顔へ塗りつけられた事はあまりない。しかもそれを濡ぬらした水は、幾日いくにち前に汲まんだ、溜め置きかと考へると、余りぞつとしない。

すでに髪結床かみゆいどこである以上は、御客の権利として、余は鏡に向

わなければならん。しかし余はさつきからこの権利を放棄したく考へてゐる。鏡と云う道具は平らに出来て、なだらかに人の顔を写さなくては義理が立たぬ。もしこの性質が具わらない鏡を懸けて、これに向えと強いるならば、強いるものは下手な写真師と同じく、向うものの器量を故意に損害したと云わなければならぬ。

虚榮心を挫くのは修養上一種の方便かも知れぬが、何も己れの真価以下の顔を見せて、これがあなたですよと、こちらを侮辱するには及ぶまい。今余が辛抱して向き合ふべく余儀なくされている鏡はたしかに最前から余を侮辱している。右を向くと顔中鼻になる。左を出すと口が耳元まで裂ける。仰向くと蟇蛙を前から見たように眞平に圧し潰され、少しこごむと福禄寿の

祈誓児<sup>もうしご</sup>のようすに頭<sup>かしら</sup>がせり出してくる。いやしくもこの鏡<sup>かがみ</sup>に対<sup>たい</sup>する間<sup>あいだ</sup>は一人でいろいろな化物<sup>ばけもの</sup>を兼勤<sup>けんきん</sup>しなくてはならぬ。写るわが顔<sup>おもて</sup>の美術的<sup>びじゅつてき</sup>ならぬはまず我慢<sup>我まん</sup>するとしても、鏡<sup>かがみ</sup>の構造<sup>こうぞう</sup>やら、色合<sup>いろあわせ</sup>や、銀紙<sup>ぎんし</sup>の剥<sup>は</sup>げ落ちて、光線<sup>こうせん</sup>が通り抜ける模様<sup>もくがた</sup>などを総合<sup>そうごう</sup>して考<sup>か</sup>えると、この道具<sup>どうぐ</sup>その物<sup>もの</sup>からが醜體<sup>きたい</sup>を極<sup>きわ</sup>めている。小人<sup>しょうじん</sup>から罵詈<sup>ばり</sup>されるとき、罵詈<sup>ばり</sup>それ自身<sup>じしん</sup>は別に痛痒<sup>つうよう</sup>を感じぬが、その小人<sup>しょうじん</sup>の面前に起臥<sup>きが</sup>しなければならぬとすれば、誰しも不愉快<sup>ふぶきょく</sup>だろう。

その上<sup>うえ</sup>この親方<sup>おやぢ</sup>がただの親方<sup>おやぢ</sup>ではない。そとから覗<sup>のぞ</sup>いたときは、胡坐<sup>あぐら</sup>をかいて、長煙管<sup>ながぎせる</sup>で、おもぢやの日英同盟<sup>にちえいどうめい</sup>国旗<sup>こぎ</sup>の上<sup>うへ</sup>、しきりに煙草<sup>たばこ</sup>を吹きつけて、さも退屈<sup>たいくつげ</sup>気に見えたが、這入<sup>はい</sup>つて、

わが首の所置を托する段になつて驚ろいた。髭を剃る間は首の所有権は全く親方の手にあるのか、はた幾分かは余の上にも存するのか、一人で疑がい出したくらい、容赦なく取り扱われる。余の首が肩の上に釘付けにされてゐるにしてもこれでは永く持たない。

彼は髪剃かみそりを揮うに当つて、毫も文明の法則ごうを解しておらん。

頬にあたる時はがりりと音がした。揉もみ上の所ではぞきりと動脈が鳴つた。頤あごのあたりに利刃りじんがひらめく時分にはごりごり、ごりごりと霜柱しもばしらを踏みつけるような怪しい声が出た。しかも本人は日本一の手腕を有する親方をもつて自任している。

最後に彼は酔つ払つてゐる。旦那えと云うたんびに妙な臭においが

する。時々は異なガスを余が鼻柱へ吹き掛ける。これではいつ何な  
 時、髪剃がどう間違つて、どこへ飛んで行くか解らない。使う  
 当人にさえ判然たる計画がない以上は、顔を貸した余に推察ので  
 きようはずがない。得心ずくて任せた顔だから、少しの怪我なら  
 苦情は云わないつもりだが、急に気が変つて咽喉笛(のどぶえ)でも搔き切ら  
 れては事だ。

「石鹼なんぞを、つけて、剃るなあ、腕が生なんだが、旦那の  
 は、髭が髭だから仕方があるめえ」と云いながら親方は裸石鹼を、  
 裸のまま棚の上へ放り出すと、石鹼は親方の命令に背いて地面の  
 上へ転がり落ちた。

「旦那あ、あんまり見受けねえようだが、何ですかい、近頃来な

すつたのかい」

「二三日前來たばかりさ」

「へえ、どこにいるんですい」

「志保田に逗つてゐよ」

「うん、あすこの御客さんですか。おおかたそんな事たろうと思つてた。実あ、私もあの隠居さんを頼て來たんですよ。——なにね、あの隠居が東京にいた時分、わつしが近所にいて、——それで知つてゐのさ。いい人でさあ。ものの解つたね。去年御新造が死んじまつて、今じや道具ばかり捻くつてるんだが——何でも素晴らしいものが、有るてえますよ。売つたらよっぽどな金目だろうつて話さ」

「奇麗な御嬢さんがいるじゃないか」

「あぶねえね」

「何が？」

「何がって。旦那の前めえだが、あれで出返りでもどりですぜ」

「そうかい」

「そうかいどころの騒さわぎじやねえんだね。全体なら出て来なくつてもいいところをさ。——銀行が潰つぶれて贅ぜいたく沢わが出来ねえつて、出ちまつたんだから、義理が悪わるいやね。隠居ほうきょさんがああしているうちはいいが、もしもの事があつた日にや、法返ほうがえしがつかねえ訳わけになりますあ」

「そうかな」

「あたり前でさあ。本家の兄たあ、仲がわるしさ」

「本家があるのかい」

「本家は岡の上にあります。遊びに行つて御覧なさい。景色のいい所ですよ」

「おい、もう一遍石鹼しゃほんをつけてくれないか。また痛くなつて來た」

「よく痛くなる髭ひげだね。髭が硬過こわすぎるからだ。旦那の髭じや、三日に一度は是非そり剃を当てなくつちや駄目ですぜ。わつしの剃で痛けりや、どこへ行つたつて、我慢出来つこねえ」

「これから、そうしよう。何なら毎日來てもいい」

「そんなに長く逗とうりゆう留るする気なんですか。あぶねえ。およしな

せえ。益もねえ事こつた。ろく碌でもねえものに引っかかって、どんな目に逢うか解りませんぜ」

「どうして」

「旦那あの娘は面めんはいいようだが、本当はき印じるしですぜ」

「なぜ」

「なぜって、旦那。村のものは、みんな氣狂きちがえだつて云つてるんでさあ」

「そりや何かの間違だろう」

「だつて、現げんに証拠しおがあるんだから、御よしなせえ。けんのんだ」「おれは大丈夫だいじゆうだが、どんな証拠しおがあるんだい」

「おかしな話しきね。まあゆつくり、煙草たばこでも呑のんで御出おいでなせえ

話すから。——頭あ洗いましようか

「頭はよそう」

「頭垢だけ落して置くかね」

親方は垢の溜つた十本の爪を、遠慮なく、余が頭蓋骨の上に

並べて、断わりもなく、前後に猛烈なる運動を開始した。この爪

が、黒髪の根を一本ごとに押し分けて、不毛の境を巨人の熊手が

疾風の速度で通ることくに往来する。余が頭に何十万本の髪の毛  
が生えているか知らんが、ありとある毛がことごとく根こぎにさ

れて、残る地面がべた一面に蚯蚓腫にふくれ上つた上、余勢が  
地磐を通して、骨から脳味噌まで震盪を感じたくらい烈しく、

親方は余の頭を搔き廻わした。

「どうです、好い心持でしよう」

「非常な 辣腕らつわんだ」

「え？ こうやると誰でもさっぱりするからね」

「首が抜けそうだよ」

「そんなに倦怠けつたるうがすかい。全く陽気の加減だね。どうも春て  
え奴やつあ、やに身体からだがなまけやがつて——まあ一ぶく御上おあがんなさ  
い。一人で志保田にいちや、退屈でしよう。ちと話しに御出おいでなせ  
え。どうも江戸えつ子は江戸えつ子同志でなくつちや、話しが合わね  
えものだから。何ですかい、やつぱりあの御嬢さんが、御愛想に  
出てきますかい。どうもさつぱし、見境みさけのねえ女だから困つち  
まわあ」

「御嬢さんが、どうとか、したところで頭垢が飛んで、首が抜け

そうになつたつけ」

「違ねえ、がんがらがんだから、からつきし、話に締りがねえつたらねえ。——そこでその坊主が逆せちまつて……」

「その坊主たあ、どの坊主だい」

「觀海寺の納所坊主がさ……」

「納所にも住持にも、坊主はまだ一人も出て来ないんだ」

「そうか、急勝だから、いけねえ。苦味走つた、色の出来そ

うな坊主だつたが、そいつが御前さん、レコに参つちまつて、とうどう文をつけたんだ。——おや待てよ。口説たんだつけかな。いんにや文だ。文に違えねえ。すると——こうつと——何だか、

行きさつが少し変だぜ。うん、そうか、やつぱりそうか。するて  
えと奴さんやつこ、驚ろいちまつてからに……」

「誰が驚ろいたんだい」

「女がさ」

「女が文を受け取つて驚ろいたんだね」

「ところが驚ろくような女なら、殊勝しおらしいんだが、驚ろくどこ  
ろじやねえ」

「じゃ誰が驚ろいたんだい」

「口説た方がさ」

「口説ないのじやないか」

「ええ、じれつてえ。間違つてらあ。ふみ文ふみをもらつてさ」

「それじゃやつぱり女だろう」

「なあに男がさ」

「男なら、その坊主だろう」

「ええ、その坊主がさ」

「坊主がどうして驚ろいたのかい」

「どうしてって、本堂で和尚さんと御経を上げてると、突然<sup>いきなり</sup>  
あの女が飛び込んで来て——ウフフフ。どうしても狂印<sup>きじるし</sup>だね」

「どうかしたのかい」

「そんなに可愛いなら、仏様の前で、いつしょに寝ようつて、出  
し抜けに、泰安さんの頸つ玉<sup>くびつたま</sup>へかじりついたんでさあ」

「へええ」

「面喰めんくらつたなあ、泰安さ。氣狂きちうげえに文をつけて、飛んだ恥を搔かかせられて、とうとう、その晩こつそり姿を隠して死んじまつて……」

「死んだ?」

「死んだろうと思うのさ。生きちゃいられめえ」

「何とも云えない」

「そうさ、相手が氣狂じや、死んだつて冴えねえから、ことによると生きてるかも知れねえね」

「なかなか面白い話だ」

「面白いの、面白くないのって、村中大笑いでさあ。ところが当人だけは、根ねが気が違つてるんだから、洒啞しゃあしゃあ洒啞しゃあしゃあして平気なもん

で——なあに旦那のようになつかりしていりや大丈夫ですがね、相手が相手だから、滅多にからかつたり何かすると、大変な目に逢いますよ」

「ちつと気をつけるかね。ははははは

生温い磯から、塩氣のある春風がふわりふわりと来て、親方の暖簾を眠たそうに煽る。身を斜にしてその下をくぐり抜ける燕の姿が、ひらりと、鏡の裡に落ちて行く。向うの家では六十ばかりの爺さんが、軒下に蹲踞まりながら、だまつて貝をむいている。かちやりと、小刀があたるたびに、赤い味が笊のなかに隠れる。殻はきらりと光りを放つて、二尺あまりの陽炎を向へ横切る。丘のごとくに堆かく、積み上げられた、貝殻は牡蠣か、馬鹿か

か、馬刀貝か。崩れた、幾分は砂川の底に落ちて、浮世の表から、暗らくろい国へ葬られる。葬られるあとから、すぐ新しい貝が、柳の下へたまる。爺さんは貝の行末ゆくえを考かうる暇さえなく、ただ空しき殻を陽炎かげろうの上へ放ほうり出す。彼かれの笊ざるには支さうべき底なくして、彼かれの春の日は無尽藏すながわに長閑のびかと見える。

砂川は二間に足らぬ小橋の下を流れて、浜の方へ春の水をそそぐ。春の水が春の海と出合うあたりには、参差しんしとして幾尋いくひろの干網が、網の目を抜けて村へ吹く軟風に、腥なまぐさき微温ぬくもりを与えてつあるかと怪しまれる。その間から、鈍刀どんとうを溶とかして、気長にのたくらせたように見えるのが海の色だ。

この景色とこの親方とはどうてい調和しない。もしこの親方の

人格が強烈で四辺の風光と拮抗するほどの影響を余の頭脳に与えたならば、余は両者の間に立つてすこぶる円方鑿の感に打たれただろう。幸にして親方はさほど偉大な豪傑ではなかつた。いくら江戸っ子でも、どれほどたんかを切つても、この渾然として駘蕩たる天地の大気象には叶わない。満腹の饒舌を弄して、あくまでこの調子を破ろうとする親方は、早く一微塵となつて、怡々たる春光の裏に浮遊している。矛盾とは、力において、量において、もしくは意氣体躯において氷炭相容る能わざして、しかも同程度に位する物もしくは人の間に在つて始めて、見出し得べき現象である。両者の間隔がはなはだしく懸絶するときは、この矛盾はようやく礪磨して、かえつて大勢

力の一部となつて活動するに至るかも知れぬ。大人の手足となつて才子が活動し、才子の股肱となつて昧者が活動し、昧者の心腹となつて牛馬が活動し得るのはこれがためである。今わが親方は限りなき春の景色を背景として、一種の滑稽を演じている。長閑な春の感じを壊すべきはずの彼は、かえつて長閑な春の感じを刻意に添えつつある。余は思わず弥生半ばに呑気な弥次と近づきになつたような気持ちになつた。この極めて安価なる気家は、太平の象具したる春の日にもつとも調和せる一彩色である。

こう考えると、この親方もなかなか画にも、詩にもなる男だから、とうに帰るべきところを、わざと尻を据えて四方八方の話を

して いた。 ところへ 暖簾をすべりのれんをすべりて 小さな坊主頭が

「御免、 一つ剃つて 貰おうか」

と這入つて 来る。 白木綿の着物に 同じ 丸絹の帶をしめて、 上から 蚊帳の ように 粗い 法衣を 羽織つて、 すこぶる 気楽に 見える 小坊主であつた。

「了念さん。 どうだい、 こないだあ 道草あ、 食つて、 和尚

さんに 叱られ たろう」

「いんにや、 褒められた」

「使に 出て、 途中で 魚なんか、 とついて、 了念は 感心だつて、

褒められたのかい」

「若いに似ず 了念は、 よく 遊んで 来て 感心じや 云うて、 老師が 褒

められたのよ」

「道理で頭に瘤こぶが出来てらあ。そんな不作法な頭あ、剃するなあ骨こが折れていけねえ。今日は勘弁するから、この次から、捏ね直して来ねえ」

「捏ね直すくらいなら、ますこし上手な床屋へ行きます」

「はははは頭は凹ぼこでこ凸ぼくでこだが、口だけは達者なもんだ」

「腕は鈍いが、酒だけ強いのは御前おまえだろ」

「籠べら棒ぼうめ、腕が鈍いって……」

「わしが云うたのじやない。老師が云われたのじや。そう怒るまい。年甲斐としがいもない」

「ヘン、面白くもねえ。——ねえ、旦那」

「ええ？」

「全体坊主なんてえものは、高い石段の上に住んでやがつて、屈くく  
 托たくがねえから、自然に口が達者になる訳ですかね。こんな小坊  
 主までなかなか口幅くちはばつてえ事を云いますぜ——おつと、もう少  
 し頭どたまを寝かして——寝かすんだてえのに、——言きう事を聴きかなけ  
 りや、切るよ、いいか、血けが出るぜ」

「痛いがな。そう無茶むちゃをしては」

「このくらいな辛抱さいぱうが出来なくつて坊主になれるもんか」

「坊主にはもうなつとるがな」

「まだ一人前いちにんめいじやねえ。——時にあの泰安さんは、どうして死  
 んだつけな、御小僧さん」

「泰安さんは死にはせんがな」

「死なねえ？　はてな。死んだはずだが」

「泰安さんは、その後発憤して、陸前の大梅寺へ行つて、修し業三昧じや。今に智識になられよう。結構な事よ」

「何が結構だい。いくら坊主だつて、夜逃をして結構な法はあるめえ。御前なんざ、よく気をつけなくつちやいけねえぜ。とかく、しくじるなあ女だから——女つてえば、あの狂印(きじるし)はやつぱり和(お)尚さん(しょう)の所へ行くかい」

「狂印と云う女は聞いた事がない」

「通じねえ、味噌擂だ。行くのか、行かねえのか」

「狂印は来んが、志保田の娘さんなら来る」

「いくら、和尚さんの御祈祷ごきとうでもあればかりや、癒なおるめえ。全く先の旦那せんたなが祟たたつてゐるんだ」

「あの娘さんはえらい女だ。老師ほがよう褒ほめておられる」「石段をあがると、何でも逆様さかさまだから叶かなわねえ。和尚さんが、何て云つたつて、気狂きちがえは氣狂きちがえだらう。——さあ剃すれたよ。早く行つて和尚さんに叱のられて来めえ」

「いやもう少し遊んで行つて賞ほめられよう」「勝手にしろ、口の減へらねえ餓鬼がきだ」

「咄とつこの乾屎櫈かんしけつ」

「何だと？」

青い頭はすでに暖簾のれんをくぐつて、春風しゅんぷうに吹かれている。

## 六

夕暮の机に向う。障子も襖も開け放つ。宿の人は多くもあらぬ上に、家は割合に広い。余が住む部屋は、多くもあらぬ人の、人らしく振舞う境を、幾曲の廊下に隔てたれば、物の音さえ思索の煩にはならぬ。今日は一層静かである。主人も、娘も、下女も下男も、知らぬ間に、われを残して、立ち退いたかと思われる。立ち退いたとすればただの所へ立ち退きはせぬ。霞の国か、雲の国かであろう。あるいは雲と水が自然に近づいて、舵をとるさえ懶き海の上を、いつ流れたとも心づかぬ間に、白い帆が雲と

も水とも見分け難き境に漂い来て、果ては帆みずからが、いずこに己れを雲と水より差別すべきかを苦しむあたりへ——そんな遙かな所へ立ち退いたと思われる。それでなければ卒然と春のなかに消え失せて、これまでの四大しだいが、今頃は目に見えぬ靈氣れいふんとなつて、広い天地の間に、顕微鏡けんびきょうの力を藉かるとも、些さの名残なごりを留めぬようになつたのであろう。あるいは雲雀ひばりに化して、菜の花の黄きを鳴き尽したる後のち、夕暮深き紫のたなびくほとりへ行つたかも知れぬ。または永き日を、かつ永くする虹あぶのつとめを果したる後、蘿ずいに凝こる甘き露を吸い損そこねて、落椿おちつけきの下に、伏せられながら、世を香ばしく眠つているかも知れぬ。とにかく静かなものだ。

空しき家を、空しく抜ける春風はるかぜの、抜けて行くは迎える人へ

の義理でもない。拒むものへの面當でもない。自から來りて、  
自から去る、公平なる宇宙の意である。掌に顎を支えたる余の心  
も、わが住む部屋のごとく空しければ、春風は招かぬに、遠慮も  
なく行き抜けるであろう。

踏むは地と思えばこそ、裂けはせぬかとの氣遣も起る。戴く  
は天と知る故に、稻妻の米噉に震う怖も出来る。人と争わね  
ば一分が立たぬと浮世が催促するから、火宅の苦は免かれぬ。

東西のある乾坤に住んで、利害の綱を渡らねばならぬ身には、  
事実の恋は讐である。目に見る富は土である。握る名と奪える誉  
とは、小賢かしき蜂が甘く釀すと見せて、針を棄て去る蜜のごと  
きものであろう。いわゆる樂は物に着するより起るが故に、あら

ゆる苦しみを含む。ただ詩人と画客なるものあつて、飽くまでこの待対世界の精華を嚼んで、徹骨徹髓の清きを知る。霞を餐し、露を曇み、紫を品し、紅を評して、死に至つて悔いぬ。彼らの樂は物に着するのではない。同化してその物になるのである。その物になり済ました時に、我を樹立すべき余地は茫々たる大限の青嵐を盛る。いたずらにこの境遇を拈出するのは、敢へない。ただ這裏の福音を述べて、縁ある衆生を麾くのみである。有体に云えば詩境と云い、画界と云うも皆人々具足の道である。春 秋に指を折り尽して、白頭に呻吟するの徒と

といえども、一生を回顧して、閱歴の波動を順次に点検し来ると  
き、かつては微光の臭骸に洩れて、吾を忘れし、拍手の興  
を喚び起す事が出来よう。出来ぬと云わば生甲斐のない男である。  
されど一事に即し、一物に化するのみが詩人の感興とは云わ  
ぬ。ある時は一弁の花に化し、あるときは一双の蝶に化し、  
あるいはウォーヴウォースのごとく、一団の水仙に化して、心を沢  
く風の裏に撩乱せしむる事もあるが、何とも知れぬ四辺の  
風光にわが心を奪われて、わが心を奪えるは那物ぞとも明  
瞭に意識せぬ場合がある。ある人は天地の耿気に触ると云う  
だろう。ある人は無絃の琴を靈台に聴くと云うだろう。またあ  
る人は知りがたく、解しがたき故に無限の域に縹として、

紗のちまたに彷徨すると形容するかも知れぬ。何と云うも皆その人の自由である。わが、唐木の机に憑りてぽかんとした心裡の状態は正にこれである。

余は明かに何事をも考えておらぬ。またはたしかに何物をも見ておらぬ。わが意識の舞台に著るしき色彩をもつて動くものがなは動いている。世の中に動いてもおらぬ、世の外にも動いておらぬ。ただ何となく動いている。花に動くにもあらず、鳥に動くにもあらず、人間に対して動くにもあらず、ただ恍惚と動いている。

強いて説明せよと云わるるならば、余が心はただ春と共に動い

ていると云いたい。あらゆる春の色、春の風、春の物、春の声を打つて、固めて、仙丹に練り上げて、それを蓬萊の靈液に溶いて、桃源の日で蒸発せしめた精気が、知らぬ間に毛孔から染み込んで、心が知覚せぬうちに飽和されてしまつたと云いたい。普通の同化には刺激がある。刺激があればこそ、愉快であろう。

余の同化には、何と同化したか不分明であるから、毫も刺激がない。刺激がないから、窈然として名状しがたい樂いたのしみがある。風に揉まれて上の空なる波を起す、軽薄で騒々しい趣とは違う。目に見えぬ幾尋の底を、大陸から大陸まで動いている潢洋たる蒼海の有様と形容する事が出来る。ただそれほどに活力がないばかりだ。しかしそこにかえつて幸福がある。偉大なる活力の發

現は、この活力がいつか尽き果てるだらうとの懸念が籠る。常の姿にはそう云う心配は伴わぬ。常よりは淡きわが心の、今の状態には、わが烈しき力の銷磨<sup>はげしま</sup>はせぬかとの憂を離れたるのみならず、常の心の可もなく不可もなき凡境をも脱却している。淡しとは單に捕え難しと云う意味で、弱きに過ぎる虞<sup>おそれ</sup>を含んではおらぬ。冲融<sup>ちゆうゆう</sup>とか澹蕩<sup>たんとう</sup>とか云う詩人の語はもつともこの境を切実に言い<sup>おお</sup>させたものだらう。

この境界<sup>きょうがい</sup>を画<sup>え</sup>にして見たらどうだらうと考えた。しかし普通の画にはならないにきまつてゐる。われらが俗に画と称するものは、ただ眼前の人事風光をありのままなる姿として、もしくはこれをわが審美眼に漉過<sup>ろくか</sup>して、絵絹<sup>えぎぬ</sup>の上に移したものに過ぎぬ。

花が花と見え、水が水と映り、人物が人物として活動すれば、画の能事は終つたものと考えられている。もしこの上に一頭地を抜けば、わが感じたる物象を、わが感じたるままの趣を添えて、画布の上に淋漓として生動させる。ある特別の感興を、己が捕えたる森羅の裡に寓するのがこの種の技術家の主意であるから、彼らの見たる物象觀が明瞭に筆端に迸しつておらねば、画を製作したとは云わぬ。己れはしかじかの事を、しかじかに観、しかじかに感じたり、その觀方も感じ方も、前人の籬下に立ちて、古来の伝説に支配せられたるにあらず、しかももつとも正しくして、もつとも美くしきものなりとの主張を示す作品にあらざれば、わが作と云うをあえてせぬ。

この二種の製作家に主客<sup>しゅかく</sup>深浅の区別はあるかも知れぬが、明瞭なる外界の刺激を待つて、始めて手を下すのは双方共同一である。されど今、わが描かんとする題目は、さほどに分<sup>ぶん</sup>明<sup>みよう</sup>なものではない。あらん限りの感覚を鼓舞<sup>こふ</sup>して、これを心外に物色したところで、方円の形、紅<sup>こうろく</sup>緑<sup>こうりょく</sup>の色は無論、濃淡の陰、洪<sup>こうせん</sup>纖<sup>すじ</sup>線を見出しかねる。わが感じは外から来たのではない、たとい來たとしても、わが視界に横<sup>よこ</sup>たる、一定の景物でないから、これが源因<sup>げんいん</sup>だと指を挙げて明らかに人に示す訳<sup>わけ</sup>に行かぬ。あるものはただ心持ちである。この心持ちを、どうあらわしたら画になるだろう——否<sup>いや</sup>この心持ちをいかなる具体を藉<sup>か</sup>りて、人の合点するよう<sup>がてん</sup>に髣<sup>ほうふつ</sup>髣<sup>いわ</sup>せしめ得るかが問題である。

普通の画は感じはなくとも物さえあれば出来る。第二の画は物と感じと両立すればできる。第三に至つては存するものはただ心持ちだけであるから、画にするには是非共この心持ちに恰好なる対象をえらばなければならん。しかるにこの対象は容易に出て来ない。出て来ても容易に纏まらない。纏つても自然界に存するものは丸で趣を異にする場合がある。したがつて普通の人から見れば画とは受け取れない。描いた当人も自然界の局部が再現したものが認めておらん、ただ感興の上した刻下の心持ちを幾分でも伝えて、多少の生命をさしがたきムードに与うれば大成功と心得ている。古来からこの難事業に全然の績を收め得たる画工があるかないか知らぬ。ある点までこの流派に指を染め得たる

ものを挙ぐれば、文与可の竹である。雲谷門下の山水である。  
 下つて大雅堂の景色である。蕪村の人物である。泰西の画家  
 に至つては、多く眼を具象世界に馳せて、神往の氣韻に傾倒  
 せぬ者が大多数を占めているから、この種の筆墨に物外の神  
 韻を伝え得るものははたして幾人あるか知らぬ。

惜しい事に雪舟、蕪村らの力めて描出した一種の氣韻  
 は、あまりに単純でかつあまりに変化に乏しい。筆力の点から云  
 えばとうていこれらの大家に及ぶ訳はないが、今わが画にして見  
 ようと思う心持ちはもう少し複雑である。複雑であるだけにどう  
 も一枚のなかへは感じが收まりかねる。頬杖をやめて、両腕を  
 机の上に組んで考えたがやはり出て来ない。色、形、調子が出来

て、自分の心が、ああここにいたなど、たちまち自己を認識する  
 ようにかかなければならぬ。生き別れをした吾子わがこを尋ね当てる  
 ため、六十余州を回かいこく国して、寝ても寤めても、忘れる間まがなか  
 つたある日、十字街頭にふと邂逅かいこう逅して、稻妻いなづまの遮ぎるひまも  
 なきうちに、あつ、ここにいた、と思うようにかかなければなら  
 ない。それがむずかしい。この調子さえ出れば、人が見て何と云  
 つても構わない。画でないと罵ののしられても恨うらみはない。いやしくも色  
 の配合がこの気持ちの一部を代表して、線の曲直きょくちょくがこの気合  
 の幾分を表現して、全体の配置がこの風韻ふういんのどれほどかを伝え  
 るならば、形にあらわれたものは、牛であれ馬であれ、ないしは  
 牛でも馬でも、何でもないものであれ、厭いとわない。厭わないがど

うも出来ない。写生帖を机の上へ置いて、両眼が帖のなかへ落ち込むまで、工夫したが、とても物にならん。

鉛筆を置いて考えた。こんな抽象的な興趣を画にしようとするのが、そもそもの間違である。人間にそう変りはないから、多くの人のうちにはきっと自分と同じ感興に触れたものがあつて、この感興を何らの手段かで、永久化せんと試みたに相違ない。試みたとすればその手段は何だろう。

たちまち音楽の二字がぴかりと眼に映つた。なるほど音楽はかかる時、かかる必要に逼<sup>せま</sup>られて生まれた自然の声であろう。樂<sup>がく</sup>は聽<sup>き</sup>くべきもの、習うべきものであると、始めて気がついたが、不幸にして、その辺の消息はまるで不案内である。

次に詩にはなるまいかと、第三の領分に踏み込んで見る。レツシングと云う男は、時間の経過を条件として起る出来事を、詩の本領であるごとく論じて、詩画は不一にして両様なりとの根本義を立てたように記憶するが、そう詩を見ると、今余の発表しようとさせつている境界もどうてい物になりそうにない。余が嬉しいと感ずる心裏の状況には時間はあるかも知れないが、時間の流れに沿うて、遞次に展開すべき出来事の内容がない。一が去り、二が來り、二が消えて三が生まるるがために嬉しいのではない。初から窈然として同所に把住する趣きで嬉しいのである。すでに同所に把住する以上は、よしこれを普通の言語に翻訳したところで、必ずしも時間的に材料を按排する必要はあるまい。

やはり絵画と同じく空間的に景物を配置したのみで出来るだろう。ただいかなる景<sup>けい</sup>情<sup>じょう</sup>を詩中に持ち来つて、この曠<sup>こう</sup>然として倚<sup>き</sup>托<sup>たく</sup>なき有様を写すかが問題で、すでにこれを捕え得た以上はレツシングの説に従わんでも詩として成功する訳だ。ホーマーがどうでも、ヴァージルがどうでも構わない。もし詩が一種のムードをあらわすに適しているとすれば、このムードは時間の制限を受け、順次に進<sup>しん</sup>捲<sup>ちよく</sup>する出来事の助けを藉<sup>か</sup>らずとも、単純に空間的な絵画上の要件を充<sup>み</sup>たしさえすれば、言語をもつて描<sup>えが</sup>き得るものと思う。

議論はどうでもよい。ラオコーンなどは大概忘れているのだから、よく調べたら、こつちが怪しくなるかも知れない。とにかく、

画えにしそくなつたから、一つ詩にして見よう、と写生帖の上へ、鉛筆を押しつけて、前後に身をゆすぶつて見た。しばらくは、筆の先の尖とがつた所を、どうにか運動させたいばかりで、毫も運動させる訳わけに行かなかった。急に朋友ほうゆうの名を失念して、咽喉のどまで出かかっているのに、出てくれないような気がする。そこで諦めると、出損でそくなつた名は、ついに腹の底へ収まつてしまふ。

葛湯くずゆを練るとき、最初のうちは、さらさらして、箸に手応はし てごたえがないものだ。そこを辛抱しんぱうすると、ようやく粘着ねばりが出て、攬き淆かまが少しうれしくなる。それでも構わぬ、箸を休ませずに廻すと、今度は廻し切れなくなる。しまいには鍋なべの中の葛が、求めぬに、先方から、争つて箸に附着してくる。詩を作るのはまさにこれだ。

手掛りのない鉛筆が少しづつ動くようになるのに勢を得て、かれこれ二三十分したら、

青春二三月。愁隨芳草長。閑花落空庭。素琴橫虛堂。　蛸掛不動。篆煙繞竹梁。

と云う六句だけ出来た。読み返して見ると、みな画になりそうな句ばかりである。これなら始めから、画にすればよかつたと思う。なぜ画よりも詩の方が作り易やすかつたかと思う。ここまで出たら、あとは大した苦もなく出そうだ。しかし画に出来ない情を、次には咏うたつて見たい。あれか、これかと思わざらい煩じょうつた末とうとう、

独坐無隻語。方寸認微光。人間徒多事。此境孰可忘。会得一日静。正知百年忙。遐懷寄何處。緬邈白雲鄉。

と出来た。もう一<sup>いつぺん</sup>返最初から読み直して見ると、ちょっと面白く読まるが、どうも、自分が今しがた入<sup>はい</sup>った神境を写したものとすると、索然<sup>さくぜん</sup>として物足りない。ついでだから、もう一首作つて見ようかと、鉛筆を握つたまま、何の気もなしに、入口の方を見ると、襖<sup>ふすま</sup>を引いて、開<sup>あ</sup>け放<sup>はな</sup>つた幅三尺の空間をちらりと、奇麗な影が通つた。はてな。

余が眼を転じて、入口を見たときは、奇麗なものが、すでに引き開けた襖の影に半分かくれかけていた。しかもその姿は余が見ぬ前から、動いていたものらしく、はつと思う間に通り越した。

余は詩をすべて入口を見守る。

一分と立たぬ間に、影は反対の方から、逆にあらわれて來た。

ふりそですがた  
振袖姿のすらりとした女が、音もせず、向う二階の椽側を  
じゃくねん  
寂然として歩行て行く。余は覚えず鉛筆を落して、鼻から吸  
いかけた息をぴたりと留めた。

花曇りの空が、刻一刻に天から、ずり落ちて、今や降ると待  
たれたる夕暮の欄干に、しとやかに行き、しとやかに帰る振袖  
の影は、余が座敷から六間の中庭を隔てて、重き空気のなかに蕭  
寥と見えつ、隠れつする。

女はもとより口も聞かぬ。傍目も触らぬ。椽に引く裾の音さえ  
おのが耳に入らぬくらい静かに歩行ていて。腰から下にぱつと  
色づく、裾模様は何を染め抜いたものか、遠くて解わ  
だ無地と模様のつながる中が、おのずから暈されて、夜と昼との

境のごとき心地こころちである。女はもとより夜と昼との境をあるいている。

この長い振袖を着て、長い廊下を何度も往き度戻る気か、余には解からぬ。いつ頃からこの不思議な装よそおいをして、この不思議な歩行ゆみをつづけつつあるかも、余には解らぬ。その主意に至つてはもとより解らぬ。もとより解るべきはずならぬ事を、かくまでも端正に、かくまでも静肅に、かくまでも度を重ねて繰り返す人の姿の、入口にあらわれては消え、消えてはあらわるる時の余の感じは一種異様である。逝く春の恨うらみを訴うる所作ならば何が故にかくは無頓着むどんじやくなる。無頓着なる所作ならば何が故にかくは綺羅きらを飾れる。

暮れんとする春の色の、嬪媛として、しばらくは冥邈の戸口をまぼろしに彩どる中に、眼も醒むるほどの帶地は金欄か。あざやかなる織物は往きつ、戻りつ蒼然たる夕べのなかにつつまれて、幽闇のあなた、遼遠のかしこへ一分ごとに消えて去る。燦めき渡る春の星の、暁近くに、紫深き空の底に陥いる趣である。

太玄の闇おのずから開けて、この華やかなる姿を、幽冥の府に吸い込まんとするとき、余はこう感じた。金屏を背に、銀燭を前に、春の宵の一刻を千金と、さざめき暮らしてこそしかるべきこの装の、厭う景色もなく、争う様子も見えず、色相世界から薄れて行くのは、ある点において超自然の情景であ

る。刻々と逼る黒き影を、すかして見ると女は肅然として、焦きもせず、狼狽もせず、同じほどの歩調をもつて、同じ所を徘徊しているらしい。身に落ちかかる災を知らぬとすれば無邪氣の極である。知つて、災と思わぬならば物凄い。黒い所が本来の住居で、しばらくの幻影を、元のままなる冥漠の裏に收めればこそ、かように間覗の態度で、有と無の間に逍遙しているのだろう。女のつけた振袖に、紛たる模様の尽きて、是非もなき磨墨に流れ込むあたりに、おのが身の素性をほのめかしてい る。

またこう感じた。うつくしき人が、うつくしき眠りについて、その眠りから、さめる暇もなく、幻覚のままで、この世の呼吸を

引き取るときに、枕元に病を護るわれらの心はさぞつらいだろう。四苦八苦を百苦に重ねて死ぬならば、生甲斐のない本人はもとより、傍に見ている親しい人も殺すが慈悲と諦められるかも知れない。しかしやすやと寝入る児に死ぬべき何の科があろう。眠りながら冥府に連れて行かれるのは、死ぬ覚悟をせぬうちに、だまし打ちに惜しき一命を果すと同様である。どうせ殺すものなら、とても逃れぬ定業と得心もさせ、断念もして、念佛を唱えた。死ぬべき条件が具わらぬ先に、死ぬる事実のみが、ありありと、確かめらるるときに、南無阿弥陀仏と回向をする声が出るくらいなら、その声でおういおういと、半ばあの世へ足を踏み込んだものを、無理にも呼び返したくなる。仮りの眠りから、いつの

間まとも心づかぬうちに、永い眠りに移る本人には、呼び返される  
 方が、切れかかった煩惱ぼんのうの綱をむやみに引かるるようで苦しい  
 かも知れぬ。慈悲だから、呼んでくれるな、穩かに寝かしてくれ  
 と思うかも知れぬ。それでも、われわれは呼び返したくなる。余  
 は今度女の姿が入口にあらわれたなら、呼びかけて、うつつの裡うち  
 から救つてやろうかと思つた。しかし夢のように、三尺の幅を、  
 すうと抜ける影を見るや否や、何だか口が聴けなくなる。今度は  
 と心を定めているうちに、すうと苦もなく通つてしまふ。なぜ何  
 とも云えぬかと考うる途端とたんに、女はまた通る。こちらに窺うかがう人が  
 あつて、その人が自分のためにどれほどやきもき思つてゐるか、  
 微塵みじんも気に掛からぬ有様で通る。面倒にも氣の毒にも、初手しょてから、

余のごときものに、氣をかねておらぬ有様で通る。今度は今度は  
と思っているうちに、こらえかねた、雲の層が、持ち切れぬ雨の  
糸を、しめやかに落し出して、女の影を、蕭々しょうしうと封じ了る。

## 七

寒い。てぬぐい  
手拭てぬぐいを下げて、湯壺ゆつぼへ下くだる。

三畳へ着物を脱いで、段々を、四つ下りると、八畳ほどな風呂  
場へ出る。石に不自由せぬ国と見えて、下は御影みかげで敷き詰めた、  
真中を四尺ばかりの深さに掘り抜いて、豆腐屋とうふやほどな湯槽ゆぶねを据え  
る。槽ふねとは云うもののやはり石で畳んである。鉱泉と名のつく以

上は、色々な成分を含んでいるのだろうが、色が純透明だから、  
 入り心地<sup>はいごこち</sup>がよい。折々は口にさえふくんで見るが別段の味<sup>におい</sup>も臭<sup>き</sup>もない。病氣にも利くそうだが、聞いて見ぬから、どんな病に利くのか知らぬ。もとより別段の持病もないから、実用上の価値はかつて頭のなかに浮んだ事がない。ただ這<sup>はい</sup>入る度に考え出すのは、白樂天<sup>はくらくてん</sup>の温泉<sup>おんせん</sup>水<sup>みず</sup>滑<sup>なめらか</sup>洗<sup>ぎよし</sup>凝<sup>あらう</sup>脂<sup>を</sup>と云う句だけである。

温泉と云う名を聞けば必ずこの句にあらわれたような愉快な気持になる。またこの氣持を出し得ぬ温泉は、温泉として全く価値がないと思つてゐる。この理想以外に温泉についての注文はまるでない。

すっぽりと浸<sup>つ</sup>かると、乳のあたりまで這<sup>はい</sup>入る。湯はどこから湧<sup>わ</sup>い

て出るか知らぬが、常でも槽の縁を奇麗に越している。春の石は乾くひまなく濡れて、あたたかに、踏む足の、心は穏やかに嬉しい。降る雨は、夜の目を掠めて、ひそかに春を潤おすほどの中めやかさであるが、軒のしづくは、ようやく繁く、ぽたり、ぽたりと耳に聞える。立て籠められた湯気は、床から天井を隈なく埋めて、隙間さえあれば、節穴の細きを厭わず洩れ出でんとする景色である。

秋の霧は冷やかに、たなびく靄は長閑に、夕餉炊く、人の煙は青く立つて、大いなる空に、わがはかなき姿を托す。様々の憐れはあるが、春の夜の温泉の曇りばかりは、浴するものの肌を、柔らかにつつんで、古き世の男かと、われを疑わしむる。眼に写る

ものの見えぬほど、濃くまつわりはせぬが、薄絹を一重破れば、何の苦もなく、下界の人と、己れを見出すように、浅きものではない。一重破り、二重破り、幾重を破り尽すともこの煙りから出す事はならぬ顔に、四方よりわれ一人を、温かき虹の中に埋め去る。酒に酔うと云う言葉はあるが、煙りに酔うと云う語句を耳にした事がない。あるとすれば、霧には無論使えぬ、霞には少し強過ぎる。ただこの靄に、春宵の二字を冠したるとき、始めて妥当なるを覚える。

余は湯槽のふちに仰向の頭を支えて、透き徹る湯のなかの軽き身体を、出来るだけ抵抗力なきあたりへ漂わして見た。ふわり、ふわりと魂がくらげのように浮いている。世の中もこんな気にな

れば樂<sup>らく</sup>なものだ。分別<sup>ふんべつ</sup>の錠<sup>じょう</sup>前<sup>まえ</sup>を開<sup>あ</sup>けて、執<sup>しゆう</sup>着<sup>じやく</sup>の栓<sup>しんぱり</sup>張<sup>ばり</sup>をはずす。どうともせよと、湯泉<sup>ゆ</sup>のなかで、湯泉<sup>ゆ</sup>と同化してしまう。流れるものほど生きるに苦は入らぬ。流れるもののなかに、魂まで流していれば、基督<sup>キリスト</sup>の御弟子となつたよりありがたい。なるほどこの調子で考えると、土左衛門<sup>どざえもん</sup>は風<sup>ふうりゆう</sup>流<sup>りゆう</sup>である。スウインバーンの何とか云う詩に、女が水の底で往生して嬉しがつている感じを書いてあつたと思う。余が平生から苦にしていた、ミレーのオフェリヤも、こう觀察するとだいぶ美しくなる。何でみんな不愉快な所を<sup>えら</sup>選んだものかと今まで不審に思っていたが、あれはやはり画<sup>え</sup>になるのだ。水に浮んだまま、あるいは水に沈んだまま、あるいは沈んだり浮んだりしたまま、ただそのままの姿で

苦なしに流れる有様は美的に相違ない。それで両岸にいろいろな草花をあしらつて、水の色と流れて行く人の顔の色と、衣服の色に、落ちついた調和をとつたなら、きつと画になるに相違ない。しかし流れて行く人の表情が、まるで平和ではほとんど神話か比喩になつてしまふ。けいれんてき痙攣的な苦悶はもとより、全幅の精神をうち壞わすが、全然色氣のない平気な顔では人情が写らない。どんな顔をかいたら成功するだろう。ミレーのオフェリヤは成功かも知れないが、彼の精神は余と同じところに存するか疑わしい。ミレーはミレー、余は余であるから、余は余の興味を以て、一つ風流な土左衛門をかいて見たい。しかし思うような顔はそうたやすく心に浮んで来そうもない。

湯のなかに浮いたまま、今度は土左衛門どざえもんの贊さんを作つて見る。

雨が降つたら濡ぬれるだろう。

霜しもが下おりたら冷つめたから。

土のしたでは暗かろう。

浮かば波の上、

沈まば波の底、

春の水なら苦はなかろ。

と口のうちで小声に誦じゅしつつ漫然まんぜんと浮いていると、どこかで弾ひく三味線の音ねが聞える。美術家だのにと云われると恐縮するが、実のところ、余がこの楽器における智識はすこぶる怪しいもので二が上がろうが、三が下がろうが、耳には余り影響を受けた試ためし

がない。しかし、静かな春の夜に、雨さえ興を添える、山里の湯ゆ壺の中<sup>つぼ</sup>で、魂まで春の温泉<sup>でゆ</sup>に浮かしながら、遠くの三味を無責任に聞くのははなはだ嬉しい。遠いから何を唄<sup>うた</sup>つて、何を弾いているか無論わからない。そこに何だか趣<sup>おもむき</sup>がある。音色<sup>ねいろ</sup>の落ちついているところから察すると、上方<sup>かみがた</sup>の検校<sup>けんぎょう</sup>さんの地唄<sup>じうた</sup>にでも聴かれそうな太棹<sup>ふとざお</sup>かとも思う。

小供の時分、門前に万屋<sup>よろずや</sup>と云う酒屋があつて、そこに御倉さんと云う娘がいた。この御倉さんが、静かな春の昼過ぎになると、必ず長唄の御浚<sup>おさらい</sup>いをする。御浚が始まると、余は庭へ出る。茶畠の十坪余りを前に控えて、三本の松が、客間の東側に並んでいる。この松は周<sup>まわ</sup>り一尺もある大きな樹で、面白い事に、三本寄つて、

始めて趣のある恰好を形つくつていた。小供心にこの松を見る  
と好い心持になる。松の下に黒くさびた鉄灯籠が名の知れぬ赤  
石の上に、いつ見ても、わからず屋の頑固爺のようにかたく  
坐っている。余はこの灯籠を見詰めるのが大好きであつた。灯籠  
の前後には、苔深き地を抽いて、名も知らぬ春の草が、浮世の風  
を知らぬ顔に、ひとり匂うてひとり楽しんでいる。余はこの草のなか  
に、わずかに膝を容るるの席を見出して、じつと、しゃがむのが  
この時分の癖であつた。この三本の松の下に、この灯籠を睨めて、  
この草の香を臭いで、そうして御倉さんの長唄を遠くから聞くの  
が、当時の日課であつた。

御倉さんはもう赤い手絡の時代さえ通り越して、だいぶんと世し

よたい  
帶じみた顔を、帳場へ曝してゐるだらう。聟とは折合がいいか  
知らん。燕は年々帰つて来て、泥を啣んだ嘴を、いそがしげに働  
かしてゐるか知らん。燕と酒の香とはどうしても想像から切り離  
せない。

三本の松はいまだに好い恰好で残つてゐるかしらん。鉄灯籠  
はもう壊れたに相違ない。春の草は、昔し、しゃがんだ人を覚え  
てゐるだらうか。その時ですら、口もきかずに過ぎたものを、今  
に見知らうはずがない。御倉さんの旅の衣は鈴懸のと云う、日ご  
との声もよも聞き覚えがあるとは云うまい。

しゃみね  
三味の音が思わぬパノラマを余の眼前に展開するにつけ、余は  
ゆかま  
床しい過去の面のあたりに立つて、二十年の昔に住む、頑是なき

小僧と、成り済ましたとき、突然風呂場の戸がさらりと開いた。

誰か来たなど、身を浮かしたまま、視線だけを入口に注ぐ。湯  
 槽の縁の最も入口から、隔たりたるに頭を乗せているから、槽に  
 下る段々は、間二丈を隔てて斜めに余が眼に入る。しかし見上げ  
 たる余の瞳にはまだ何物も映らぬ。しばらくは軒を遙る雨垂の音  
 のみが聞える。三味線はいつの間にかやんでいた。

やがて階段の上に何物があらわれた。広い風呂場を照すものは、  
 ただ一つの小さき釣り洋灯のみであるから、この隔りでは澄切つ  
 た空気を控えてさえ、確と物色はむずかしい。まして立ち上  
 がる湯気の、濃かなる雨に抑えられて、逃場を失いたる今宵の風  
 呂に、立つを誰とはもとより定めにくい。一段を下り、二段を踏

んで、まともに、照らす灯影を浴びたる時でなくては、男とも女とも声は掛けられぬ。

黒いものが一步を下へ移した。踏む石は天鷲<sup>びろうど</sup>のごとく柔らかと見えて、足音を証<sup>しよう</sup>にこれを律すれば、動かぬと評しても差<sup>さしつかえ</sup>支ない。が輪廓は少しく浮き上がる。余は画工だけあつて人体の骨格については、存<sup>ぞんがい</sup>外視覚が鋭敏である。何とも知れぬものの一  
段動いた時、余は女と二人、この風呂場の中に在る事を覺つた。

注意をしたものか、せぬものかと、浮きながら考える間に、女の影は遺憾<sup>いかん</sup>なく、余が前に、早くもあらわれた。漲<sup>みな</sup>ぎり渡る湯煙<sup>みな</sup>りの、やわらかな光線を一分子<sup>ぶんし</sup>ごとに含んで、薄<sup>うすくれない</sup>紅の暖かに見える奥に、漾<sup>ただよ</sup>わす黒髪を雲とながして、あらん限りの背丈<sup>せたけ</sup>を、

すらりと伸した女の姿を見た時は、礼儀の、作法の、風紀のと云う感じはことごとく、わが脳裏(のうり)を去つて、ただひたすらに、うつくしい画題を見出し得たとのみ思つた。

古代希臘(ギリシャ)の彫刻はいざ知らず、今世仏国(キンセイフツコク)の画家が命と頼む裸体画を見るたびに、あまりに露骨(あからさま)な肉の美を、極端まで描がき尽そうとする痕迹(こんせき)が、ありありと見えるので、どことなく氣韻(きいん)に乏しい心持が、今までわれを苦しめてならなかつた。しかしその折々はただどことなく下品だと評するまでで、なぜ下品であるかが、解らぬ故(ゆえ)、吾知らず、答えを得るに煩悶(はんもん)して今日(こにち)に至つたのだろう。肉を蔽え(おお)ば、うつくしきものが隠れる。かくさねば卑(いや)しくなる。今の世の裸体画と云うはただかくさぬと

云う卑しさに、技巧を留めておらぬ。衣を奪いたる姿を、そのま  
 まに写すだけにては、物足らぬと見えて、飽くまでも裸体を、衣  
 冠の世に押し出そうとする。服をつけたるが、人間の常態なるを  
 忘れて、赤裸にすべての権能を附与せんと試みる。十分で事  
 足るべきを、十一分<sup>じゅうにぶん</sup>にも、十五分<sup>じゅうごぶん</sup>にも、どこまでも進んで、  
 ひたすらに、裸体であるぞと云う感じを強く描出<sup>びようしゆつ</sup>しようとする。  
 技巧がこの極端に達したる時、人はその観者<sup>かんじや</sup>を強うるを陋<sup>ろう</sup>  
 とする。うつくしきものを、いやが上に、うつくしくせんと焦せ  
 るとき、うつくしきものはかえつてその度<sup>ど</sup>を減するが例である。  
 人事についても満は損を招くとの諺<sup>ことわざ</sup>はこれがためである。

放心<sup>ほうしん</sup>と無邪氣とは余裕を示す。余裕は画<sup>え</sup>において、詩において

て、もしくは文章において、必須の条件である。今代芸術の一大弊竇は、いわゆる文明の潮流が、いたずらに芸術の士を駆つて、拘々として随處に齷齪たらしむるにある。裸体画はその好例であろう。都會に芸妓と云うものがある。色を売りて、人に媚びるを商売にしている。彼らは嫖客に対する時、わが姿のいかに相手の瞳子に映ずるかを顧慮するのほか、何らの表情をも發揮し得ぬ。年々見るサロンの目録はこの芸妓に似たる裸体美人を以て充満している。彼らは一秒時も、わが裸体なるを忘る能わざるのみならず、全身の筋肉をむづつかして、わが裸体なるを観者に示さんと力めている。

今余が面前に婢ひょうていと現われたる姿には、一塵もこの俗埃ぞくあい

の眼に遮<sup>さえ</sup>ぎるものを持びておらぬ。常の人の纏<sup>まと</sup>える衣装<sup>いしょう</sup>を脱ぎ捨てたる様<sup>さま</sup>と云えばすでに人界<sup>にんがい</sup>に墮在<sup>だざい</sup>する。始めより着るべき服も、振るべき袖も、あるものと知らざる神代<sup>かみよ</sup>の姿を雲のなかに呼び起したるがごとく自然である。

室を埋<sup>うず</sup>むる湯煙は、埋めつくしたる後<sup>あと</sup>から、絶えず湧<sup>わ</sup>き上がる。春の夜の灯<sup>ひ</sup>を半透明に崩<sup>くず</sup>し拡げて、部屋一面の虹霓<sup>にじ</sup>の世界が濃<sup>こまや</sup>かに揺れるなかに、朦朧<sup>もうろう</sup>と、黒きかとも思われるほどの髪を暈<sup>ぼか</sup>して、真白な姿が雲の底から次第に浮き上がつて来る。その輪廓<sup>りんかく</sup>を見よ。

頸筋<sup>くびすじ</sup>を軽く内輪<sup>から</sup>に、双方から責めて、苦もなく肩の方へなだれ落ちた線が、豊かに、丸く折れて、流るる末は五本の指と分れ<sup>わか</sup>

るのであろう。ふつくらと浮く二つの乳の下には、しばし引く波が、また滑らかに盛り返して下腹の張りを安らかに見せる。張る勢いきを後ろへ抜いて、勢の尽くるあたりから、分れた肉が平衡を保つために少しく前に傾く。かたむ逆に受くる膝ひざがしらのこのたびは、立て直して、長きうねりの踵かかとにつく頃、平たき足が、すべての葛かつ藤とうを、二枚の躰あしのうちらに安々と始末する。世の中にこれほど錯雜さくざつした配合はない、これほど統一のある配合もない。これほど自然で、これほど柔らかで、これほど抵抗の少い、これほど苦にならぬ輪廓は決して見出せぬ。

しかもこの姿は普通の裸体のごとく露骨に、余が眼の前に突きつけられてはおらぬ。すべてのものを幽玄に化する一種の靈氣れいふん

のなかに髣髴として、十分の美を奥床しくもほのめかして  
 いるに過ぎぬ。片鱗を澆墨淋漓の間に点じて、虬竜の  
 怪を、楮毫のほかに想像せしむるがごとく、芸術的に観じて申し  
 分のない、空氣と、あたたかみと、冥邈なる調子とを具えて  
 いる。六々三十六鱗を丁寧に描きたる竜の、滑稽に落つるが事  
 実ならば、赤裸々の肉を浄洒々に眺めぬうちに神往の余韻は  
 ある。余はこの輪廓の眼に落ちた時、桂の都を逃れた月界の姫  
 姨が、彩虹の追手に取り囲まれて、しばらく躊躇する姿と  
 眺めた。

輪廓は次第に白く浮きあがる。今一步を踏み出せば、せつかく  
 の姫姫が、あわれ、俗界に墮落するよと思う刹那に、緑の髪は、

波を切る靈龜の尾のごとくに風を起して、莽ぼうと靡なびいた。渦捲く煙  
 りを劈つんざいて、白い姿は階段を飛び上がる。ホホホホと鋭どく笑う  
 女の声が、廊下に響いて、静かなる風呂場を次第に向むこうへ遠退く。  
 余はがぶりと湯を呑んだまま槽ふねの中に突立つつたつ。驚いた波が、胸へ  
 あたる。縁ふちを越す湯泉の音がさあさあと鳴る。

## 八

御茶の御馳走ごちそうになる。相客あいきやくは僧一人、觀海寺の和尚おしょうで  
 名は大徹だいてつと云うそうだ。俗ぞく一人、二十四五の若い男である。

老人の部屋は、余が室しつの廊下を右へ突き当つて、左へ折れた行い

き留りどまにある。大きさは六畳おおきもある。大きな紫檀したんの机を真中に据すえてあるから、思ったより狭苦しい。それへと云う席を見ると、布団ふとんの代りに花毯かたんが敷いてある。無論支那製だろう。真中を六角に仕切しきつて、妙な家と、妙な柳が織り出してある。周囲は鉄色に近い藍あいで、四隅に唐草よすみの模様を飾つた茶の輪わを染め抜いてある。支那ではこれを座敷に用いたものか疑わしいが、こうやつて布団に代用して見るとすこぶる面白い。印度インドの更紗さらさとか、ペルシャの壁掛けかべかけとか号するものが、ちよつと間が抜けているところに価値があるごとく、この花毯もこせつかないところに趣おもむきがある。花毯ばかりではない、すべて支那の器具は皆抜けている。どうしても馬鹿で氣の長い人種の発明したものとほか取れない。見ているう

ちに、ぼおつとするところが尊とうとい。日本は巾着きんちやく切りの態度で美術品を作る。西洋は大きくて細こまかくて、そうしてどこまでも婆やばつけ気がとれない。まずこう考えながら席に着く。若い男は余とならんで、花毯なかばの半なかを占領した。

和尚は虎の皮の上へ坐つた。虎の皮の尻尾が余の膝ひざの傍ひざを通り越して、頭は老人の臀しりの下に敷かれている。老人は頭の毛をことごとく抜いて、頬と顎あごへ移植したように、白い鬚ひげをむしやむしやと生はやして、茶托ちゃたくへ載せた茶碗を丁寧に机の上へならべる。

「今日は久し振りで、うちへ御客が見えたから、御茶を上げようと思つて、……」と坊さんの方を向くと、

「いや、御使おつかいをありがとう。わしも、だいぶ御無沙汰ごぶさたをしたか

ら、今日ぐらい来て見ようかと思つとつたところじや」と云う。この僧は六十近い、丸顔の、達磨を草書に崩したような容貌を有している。老人とは平常からの昵懇と見える。

「この方が御客さんかな」

老人は首肯ながら、朱泥の急須から、緑を含む琥珀色の玉液を、二三滴ずつ、茶碗の底へしたたらす。清い香りがかすかに鼻を襲う氣分がした。

「こんな田舎に一人では御淋しかろ」と和尚はすぐ余に話しかけた。

「はああ」となんともかとも要領を得ぬ返事をする。淋しいと云えば、偽りである。淋しからずと云えば、長い説明が入る。

「なんの、和尚さん。このかたは画えを書かれるために来られたの  
じやから、御忙おいそがしくらいじや」

「おお左様さようか、それは結構だ。やはり 南宗派なんそうはかな」

「いいえ」と今度は答えた。西洋画などと云つても、この和尚  
にはわかるまい。

「いや、例の西洋画じや」と老人は、主人役に、また半分引き受  
けてくれる。

「ははあ、洋画か。すると、あの久一きゆういちさんのやられるような  
ものかな。あれは、わしこの間始めて見たが、随分奇麗にかけた  
のう」

「いえ、詰らんものです」と若い男がこの時ようやく口を開いた。

「御前何ぞ和尚さんに見ていただいたか」と老人が若い男に聞く。

言葉から云うても、様子から云うても、どうも親類らしい。

「なあに、見ていただいたんじやないですか、鏡が池で写生しているところを和尚さんに見つかつたのです」

「ふん、そうか——さあ御茶が注げたから、一杯」と老人は茶碗を各自の前に置く。茶の量は三四滴に過ぎぬが、茶碗はすこぶる大きい。生壁色の地へ、焦げた丹と、薄い黄で、絵だか、模様だか、鬼の面の模様になりかかつたところか、ちよつと見当のつかないものが、べたに描いてある。

「李兵衛です」と老人が簡単に説明した。  
「これは面白い」と余も簡単に賞めた。

「李兵衛はどうも偽物にせものが多くて、——その糸底いとぞこを見て御覧なさい。銘めいがあるから」と云う。

取り上げて、障子しようじの方へ向けて見る。障子には植木鉢の葉蘭はらんの影が暖かそうに写っている。首を曲げて、覗き込むと、李ちくの字が小さく見える。銘は觀賞の上において、さのみ大切のものとは思わないが、好事者こうずしゃはよほどこれが気にかかるそうだ。茶碗を下へ置かないで、そのまま口へつけた。濃く甘く、湯加減ゆかげんに出た、重い露を、舌の先へ一しづくずつ落して味あじわつて見るのは閑人適意いんじの韻事いんじである。普通の人は茶を飲むものと心得ているが、あれは間違だ。舌頭ぜつとうへばたりと載のせて、清いものが四方へ散れば咽喉のどへ下るべき液はほとんどない。ただ馥郁ふくいくたる匂においが食道から

胃のなかへ沁み渡るのみである。歯を用いるは卑しい。水はあまりに軽い。玉露に至つては濃なる事、淡水の境を脱して、頸を疲らすほどの硬さを知らず。結構な飲料である。眠られぬと訴うるものあらば、眠らぬも、茶を用いよと勧めたい。

老人はいつの間にやら、青玉の菓子皿を出した。大きな塊を、かくまで薄く、かくまで規則正しく、刳りぬいた匠人の手際は驚ろくべきものと思う。すかして見ると春の日影は一面に射し込んで、射し込んだまま、逃がれ出する路を失つたような感じである。中には何も盛らぬがいい。

「御客さんが、青磁を賞められたから、今日はちとばかり見せようと思うて、出して置きました」

「どの青磁を——うん、あの菓子鉢かな。あれは、わしも好きや。  
 時にあなた、西洋画では襖などはかけんものかな。かけるなら一  
 つ頼みたいがな」

かいてくれなら、かかぬ事もないが、この和尚の氣に入るか  
 入らぬかわからぬ。せつかく骨を折つて、西洋画は駄目だなど  
 と云われては、骨の折栄<sup>おりばえ</sup>がない。

「襖には向かないでしよう」

「向かんかな。そうさな、この間の久一さんの画<sup>え</sup>のようじや、少  
 し派手過ぎるかも知れん」

「私の駄目です。あれはまるでいたずらです」と若い男はしき  
 りに、恥かしがつて謙遜する。

「その何とか云う池はどこにあるんですか」と余は若い男に念のため尋ねて置く。

「ちよつと観海寺の裏の谷の所で、幽<sup>ゆうすい</sup>邃<sup>すい</sup>な所です。——なあに学校にいる時分、習つたから、退屈まぎれに、やつて見ただけです」

「観海寺と云うと……」

「観海寺と云うと、わしのいる所じや。いい所じや、海を一目に見下しての——まあ逗留<sup>とうりゆう</sup>中にちよつと来て御覧。なに、ここからはつい五六丁よ。あの廊下から、そら、寺の石段が見えるじやろうが」

「いつか御邪魔に上<sup>あが</sup>つてもいいですか」

「ああいとも、いつでもいる。こここの御嬢さんも、よう、来られる。——御嬢さんと云えれば今日は御おなみ那美さんが見えんようだが

——どうかされたかな、隠居さん」

「どこぞへ出ましたかな、久きゆう一いち、御前の方へ行きはせんかな」

「いいや、見えません」

「またひとり散歩かな、ハハハハ。御那美さんはなかなか足が強い。この間法用で礪となみ並まで行つたら、姿見橋すがたみばしの所で——どうも、善く似どると思つたら、御那美さんよ。尻を端折はしょつて、草履ぞうりを穿はいて、和尚おしょうさん、何をぐずぐず、どこへ行きなさると、いきなり、驚なろかされたて、ハハハハ。御前はそんな形姿なりで地体じたいどこへ、行つたのぞいと聴くと、今芹摘せりつみに行つた戻りじや、和尚さん少し

やろうかと云うて、いきなりわしの袂たもと<sup>たもと</sup>へ泥どろ<sup>どろ</sup>だらけの芹を押し込んで、ハハハハハ

「どうも、……」と老人は苦笑にがわらいをしたが、急に立つて「実はこれを御覽に入れるつもりで」と話をまた道具の方へそらした。老人が紫檀しちたんの書架から、恭うやうやしく取り下した紋緞子もんどんすの古い袋は、何だか重そうなものである。

「和尚さん、あなたには、御目に懸けた事があつたかな」

「なんじや、一体」

「覗すずりよ」

「へえ、どんな覗かい」

「山陽さんようの愛藏あいざうしたと云う……」

「いいえ、そりやまだ見ん」

「春水の替え蓋がついて……」

「そりや、まだのようだ。どれどれ」

老人は大事そうに緞子の袋の口を解くと、小豆色の四角な石が、ちらりと角を見せる。

「いい色合じやのう。端渓かい」

「端渓で 眼が九つある」

「九つ？」と和尚大に感じた様子である。

「これが春水の替え蓋」と老人は縪子で張つた薄い蓋を見せる。上に春水の字で七言絶句が書いてある。

「なるほど。春水はようかく。ようかくが、書は杏坪の方が

上手じやて」

「やはり杏坪の方がいいかな」

「山陽が一番まずいようだ。どうも才子肌で俗氣があつて、いつこう面白うない」

「ハハハハ。和尚さんは、山陽が嫌いだから、今日は山陽の幅を懸け替えて置いた」

「ほんに」と和尚さんは後ろを振り向く。床は平床ヒラヂを鏡のよう  
にふき込んで、鏽氣サビケを吹いた古銅瓶コドウヘイには、木蘭モクランを二尺の高さ  
に、活けてある。軸は底光りのある古錦欄コキンラに、装幀ソウテイの工夫くふうを  
籠めた物祖従ぶつそらいの大幅たいふくである。絹地ではないが、多少の時代が  
ついているから、字の巧拙に論なく、紙の色が周囲のきれ地とよ

く調和して見える。あの錦欄も織りたては、あれほどのゆかしさも無かつたろうに、彩色さいしきが褪せて、金糸きんしが沈んで、華麗はでなところが滅り込んで、渋いところがせり出して、あんないい調子になつたのだと思う。焦茶こげちゃの砂壁すなかべに、白い象牙ぞうげの軸じくが際立きわだつて、両方に突張つている、手前に例の木蘭がふわりと浮き出されているほかは、床全体の趣とこは落ちつき過ぎてむしろ陰氣である。

「徂徠そらかな」と和尚おしょうが、首を向けたまま云う。

「徂徠もあり、御好きでないかも知れんが、山陽よりは善かるうと思うて」

「それは徂徠の方が遙かにいい。享保きょうほ頃の学者の字はまずくても、どこぞに品ひんがある」

「広澤こうたくをして日本の能書のうしょならしめば、われはすなわち漢人の拙せつなるものと云うたのは、徂徠くりようだつたかな、和尚さん」

「わしは知らん。そう威張いはるほどの字でもないて、ワハハハハ」

「時に和尚さんは、誰を習われたのかな」

「わしか。禪坊ぜんぼう主は本も読まず、手習てならいもせんから、のう」

「しかし、誰ぞ習われたろう」

「若い時に高泉こうせんの字を、少し稽古けいこした事がある。それぎりじや。

それでも人に頼まれればいつでも、書きます。ワハハハハ。時に

その端たんけい溪せんを一つ御見せ」と和尚が催促する。

どうどう縞子どんすの袋を取り除ける。一座の視線はことごとく硯すずり

上に落ちる。厚さはほとんど二寸に近いから、通例のものの倍は

あろう。四寸に六寸の幅も長さもまず並なみと云つてよろしい。蓋ふたには、鱗うろこのかたに研みがきをかけた松の皮をそのまま用いて、上には朱しで、わからぬ書体が二字ばかり書いてある。

「この蓋が」と老人が云う。「この蓋が、ただの蓋ではないので、御覽の通り、松の皮には相違ないが……」

老人の眼は余の方を見ている。しかし松の皮の蓋にいかなる因縁いんねんがあろうと、画工として余はあまり感服は出来んから、  
「松の蓋は少し俗ですな」

と云つた。老人はまあと云わぬばかりに手を挙あげて、

「ただ松の蓋と云うばかりでは、俗もあるが、これはその何ですよ。山陽さんようが広島におつた時に庭に生えていた松の皮を剥はいで

山陽が手ずから製したのですよ」

なるほど山陽は俗な男だと思つたから、

「どうせ、自分で作るなら、もつと不器用に作れそうなものですな。わざとこの鱗うろこのかたなどをぴかぴか研とぎ出さなくつても、よさそうに思われますが」と遠慮のないところを云つて退けた。

「ワハハハハ。そうよ、この蓋ふたはあまり安っぽいようだな」と和お尚しょうはたちまち余に賛成した。

若い男は氣の毒そうに、老人の顔を見る。老人は少々不機嫌の体ていに蓋を払いのけた。下からいよいよ硯すずりが正しょう体たいをあらわす。もしこの硯について人の眼を峙そばだすべき特異の点があるとすれば、その表面にあらわれたる匠しょうじん人の刻こくである。真まんなか中に袂時計たもとどけい

ほどな丸い肉が、縁ふちとすれすれの高さに彫り残されて、これを蜘蛛くもく  
 蛛の背せに象かたどる。中央から四方に向つて、八本の足が彎わんきょく曲し  
 て走ると見れば、先には各おののおのよくがん 眼まなこを抱かかえている。残る一個は背  
 の真中に、黄ききな汁じるをしたたらしたごとく煮染にじんで見える。背と足  
 と縁を残して余る部分はほとんど一寸余の深さに掘り下げる。ある。  
 墨を湛たたえる所は、よもやこの塹壕ざんごうの底ではあるまい。たとい一  
 合の水を注ぐともこの深さを充みたすには足らぬ。思うに水盂すいようの中  
 から、一滴の水を銀杓ぎんしゃくにて、蜘蛛の背に落したるを、貴き墨  
 に磨すり去るのだろう。それでなければ、名は硯でも、その実は純  
 然たる文房用ぶんぽうようの装飾品に過ぎぬ。

老人は涎よだれの出そうな口をして云う。

「この肌合<sup>はだあい</sup>と、この眼<sup>がん</sup>を見て下さい」

なるほど見れば見るほどいい色だ。寒く潤<sup>じゅんたく</sup>沢<sup>たく</sup>を帶びたる肌の上に、はつと、一息懸<sup>ひといきか</sup>けたなら、直ちに凝<sup>こ</sup>つて、一朶<sup>いちだ</sup>の雲を起すだろうと思われる。ことに驚くべきは眼の色である。眼の色と云わんより、眼と地の相<sup>あいまじ</sup>交わる所が、次第に色を取り替えて、いつ取り替えたか、ほとんど吾眼<sup>わがめ</sup>の欺<sup>あざむ</sup>かれたるを見出し得ぬ事である。形容して見ると紫色の蒸羊羹<sup>むしようかん</sup>の奥に、隱元豆<sup>いんげんまめ</sup>を、透いて見えるほどの深さに嵌<sup>は</sup>んだようなものである。眼と云えれば一個二個でも大変に珍重される。九個と云つたら、ほとんど類<sup>るい</sup>はあるまい。しかもその九個が整然と同距離に按排<sup>あんぱい</sup>されて、あたかも人造のねりものと見違えらるるに至つてはもとより天下の逸<sup>い</sup>

品<sup>つひん</sup>をもつて許さざるを得ない。

「なるほど結構です。観<sup>み</sup>て心持がいいばかりじゃありません。こうして触<sup>さわ</sup>つても愉快です」と云いながら、余は隣りの若い男に硯を渡した。

「久一<sup>きゆういち</sup>に、そんなものが解るかい」と老人が笑いながら聞いて見る。久一君は、少々自棄<sup>やけ</sup>の氣味で、

「分りやしません」と打ち遣<sup>や</sup>つたように云い放つたが、わからん硯を、自分の前へ置いて、眺<sup>なが</sup>めていては、もつたいないと気がついたものか、また取り上げて、余に返した。余はもう一遍丁寧に撫<sup>な</sup>で廻わした後<sup>のち</sup>、どうどうこれを恭<sup>うやうや</sup>しく禅師<sup>ぜんじ</sup>に返却した。禅師はとくと掌<sup>て</sup>上で見済ました末、それでは飽<sup>あ</sup>き足らぬと考えたと見

えて、鼠木綿ねずみももんの着物の袖そでを容赦なく蜘蛛くもの背へこすりつけて、光沢つやの出た所をしきりに賞しょうがん翫かんしている。

「隠居さん、どうもこの色が実に善いな。使った事があるかの」「いいや、滅多めつたには使いとう、ないから、まだ買うたなりじや」「そうじやろ。こないなのは支那しなでも珍らしかろうな、隠居さん」  
「左様さよう」

「わしも一つ欲しいものじや。何なら久一さんに頼もうか。どうかな、買うて来ておくれかな」

「へへへへ。硯すずりを見つけないうちに、死んでしまいそうです」

「本当に硯どころではないな。時にいつ御立ちか」

「二三日うちに立ちます」

「隠居さん。吉田まで送つて御やり」

「普段なら、年は取つとるし、まあ見合すところじやが、ことに  
よると、もう逢えんかも、知れんから、送つてやろうと思うてお  
ります」

「御伯父さんは送つてくれんでもいいです」

若い男はこの老人の甥おいと見える。なるほどどこか似ている。

「なあに、送つて貰うがいい。川船かわふねで行けば訳はない。なあ隠  
居さん」

「はい、山越やまごでは難義だが、廻り路でも船なら……」

若い男は今度は別に辞退もしない。ただ黙っている。

「支那の方へおいでですか」と余はちょっと聞いて見た。

「ええ」

ええの二字では少し物足らなかつたが、その上掘つて聞く必要もないから控えた。<sup>ひか</sup>障子を見ると、蘭の影が少し位置を変えている。

「なあに、あなた。やはり今度の戦争で——これがもと志願兵をやつたものだから、それで召集されたので」

老人は当人に代つて、満洲の野<sup>や</sup>に日ならず出征すべきこの青年の運命を余に語<sup>つ</sup>げた。この夢のような詩のような春の里に、啼<sup>な</sup>くは鳥、落つるは花、湧<sup>わ</sup>くは温泉のみと思い詰めていたのは間違である。現実世界は山を越え、海を越えて、平家の後裔<sup>へいけ</sup>のみ住み古るしたる孤村にまで逼<sup>せま</sup>る。朔北<sup>さくほく</sup>の曠野<sup>こうや</sup>を染むる血潮の何万分

の一かは、この青年の動脈から迸る時が来るかも知れない。この青年の腰に吊る長き剣の先から煙りとなつて吹くかも知れない。しかしてその青年は、夢みる事よりほかに、何らの価値を、人生に認め得ざる一画工の隣りに坐つている。耳をそばだつれば彼が胸に打つ心臓の鼓動さえ聞き得るほど近くに坐つている。その鼓動のうちには、百里の平野を捲く高き潮まきしおが今までに響いているかも知れぬ。運命は卒然そつぜんとしてこの二人を一堂のうちに会したるのみにて、その他には何事とも語らぬ。

「御勉強ですか」と女が云う。部屋に帰つた余は、

三脚几に縛さんきやくき しば

りつけた、書物の一冊を抽ぬいて読んでいた。

「御這入りなさい。ちつとも構いません」

女は遠慮する景色もなく、つかつかと這入る。くすんだ半襟はんえりの中から、恰好のいい頸くびの色が、あざやかに、抽ぬき出している。

女が余の前に坐つた時、この頸とこの半襟の対照が第一番に眼についた。

「西洋の本ですか、むずかしい事が書いてあるでしようね」

「なあに」

「じゃ何が書いてあるんです」

「そうですね。実はわたしにも、よく分らないんです」

「ホホホホ。それで御勉強なの」

「勉強じやありません。ただ机の上へ、こう開けて、開いた所を  
いい加減に読んでるんです」

「それで面白いんですか」

「それが面白いんです」

「なぜ？」

「なぜって、小説なんか、そうして読む方が面白いです」

「よっぽど変つていらつしやるのね」

「ええ、ちつと変つてます」

「初から読んじや、どうして悪るいでしょう」

「初から読まなけりやならないとすると、しまいまで読まなけり

やならない訳になりましょう」

「妙な理窟だ事。しまいまで読んだつていいじやありませんか」

「無論わるくは、ありませんよ。筋を読む氣なら、わたしだつて、  
そうします」

「筋を読まなければ何を読むんです。筋のほかに何か読むものが  
ありますか」

余は、やはり女だなと思つた。多少試験してやる気になる。

「あなたは小説が好きですか」

「私が？」と句を切つた女は、あとから「そうですねえ」と判<sup>はつき</sup>  
然<sup>り</sup>しない返事をした。あまり好きでもなさそうだ。

「好きだか、嫌だか自分にも解らないんじやないですか」

「小説なんか読んだつて、読まなくつたつて……」

と眼中にはまるで小説の存在を認めていない。

「それじや、初から読んだつて、しまいから読んだつて、いい加減な所をいい加減に読んだつて、いい訳じやありませんか。あんなようにそう不思議がらないでもいいでしょう」

「だつて、あなたと私は違いますもの」

「どこが？」と余は女の眼の中を見詰めた。うち試験をするのはここだと思つたが、女の眸ひとみは少しも動かない。

「ホホホホ解りませんか」

「しかし若いうちは随分御読みなすつたろう」余は一本道で押し合うのをやめにして、ちょっと裏へ廻つた。

「今でも若いつもりですよ。可哀想に」放した鷹はまたそれか

かわいそそう

たか

かる。すこしも油断がならん。

「そんな事が男の前で云えれば、もう年寄のうちですよ」と、やつと引き戻した。

「そう云うあなたも随分の御年じやあ、ありませんか。そんなに年をとつても、やつぱり、惚れたのほほ、腫れたのは、にきびが出来たのつてえ事が面白いんですか」

「ええ、面白いんです、死ぬまで面白いんです」

「おやそう。それだから画工えかきなんぞになれるんですね」

「全くです。画工だから、小説なんか初からしまいで読む必要はないんです。けれども、どこを読んで面白いのです。あなた

と話をするのも面白い。ここへ逗留とうりゅうしているうちは毎日話をしたいくらいです。何ならあなたに惚れ込んでもいい。そうなるとなお面白い。しかしいくら惚れてもあなたと夫婦になる必要はないんです。惚れて夫婦になる必要があるうちは、小説を初からしまいまで読む必要があるんです」

「すると不人情ふにんじょうな惚れ方をするのが画工なんですね」

「不人情じゃありません。非人情な惚れ方をするんです。小説も非人情で読むから、筋なんかどうでもいいんです。こうして、御籤みくじあを引くように、ぱつと開けて、開いた所を、漫然と読んでるのが面白いんです」

「なるほど面白そうね。じゃ、今あなたが読んでいらっしゃる所

を、少し話してちようだい。どんな面白い事が出てくるか伺いた  
いから」

「話しちや駄目です。え画だつて話にしちや一文の価値ねうちもなくなる  
じやありませんか」

「ホホホそれじや読んで下さい」

「英語ですか」

「いいえ日本語で」

「英語を日本語で読むのはつらいな」

「いいじやありませんか、非人情で」

「これもいつきよう一興いっけいだろうと思つたから、余は女の乞こいに応じて、例  
の書物をぽつりぽつりと日本語で読み出した。もし世界に非人情

な読み方があるとすればまさにこれである。聴く女ももとより非人情で聴いている。

「なき  
情けの風が女から吹く。声から、眼から、肌から吹く。男に扶<sup>たす</sup>  
けられて舳<sup>とも</sup>に行く女は、夕暮のヴエニスを眺<sup>なが</sup>むるためか、扶くる  
男はわが脈<sup>みやく</sup>に稻<sup>いなずま</sup>妻の血を走らすためか。——非人情だから、い  
い加減ですよ。ところどころ脱けるかも知れません」

「よござんすとも。御都合次第で、御足<sup>おた</sup>しなすつても構いません」  
「女は男とならんで舷<sup>ふなばた</sup>に倚る。二人の隔<sup>へだた</sup>りは、風に吹かるるリボ  
ンの幅よりも狭い。女は男と共にヴエニスに去らばと云う。ヴエ  
ニスなるドウジの殿<sup>でんろう</sup>樓は今第二の日没のごとく、薄赤く消えて  
行く。……」

「ドージとは何です」

「何だつて構やしません。昔むかしヴェニスを支配した人間の名ですよ。何代つづいたものですかね。その御殿が今でもヴェニスに残つてるんです」

「それでその男と女と云うのは誰の事なんでしょう」

「誰だか、わたしにも分らないんだ。それだから面白いのですよ。今までの関係なんかどうでもいいでさあ。ただあなたとわたしのように、こういつしょにいるところなんで、その場限りで面白味があるでしう」

「そんなものですかね。何だか船の中のようですね」

「船でも岡でも、かいてある通りでいいんです。なぜと聞き出す

と探偵になつてしまふです」

「ホホホホじや聴きますまい」

「普通の小説はみんな探偵が発明したものですよ。非人情などころがないから、ちつとも趣がない」

「じゃ非人情の続きを伺いましよう。それから?」

「ヴエニスは沈みつつ、沈みつつ、ただ空に引く一択の淡き線となる。線は切れる。切れて点となる。蛋白石の空のなかに円き柱が、ここ、かしこと立つ。ついには最も高く聳えたる鐘楼が沈む。沈んだと女が云う。ヴエニスを去る女の心は空行く風のごとく自由である。されど隠れたるヴエニスは、再び帰らねばならぬ女の心に羈絆の苦しみを与う。男と女は暗き湾の方に眼を注

ぐ。星は次第に増す。柔らかに揺ぐ海は泡を濺がず。男は女の手を**と**把る。鳴りやまぬ弦を握つた心地である。……

「あんまり非人情でもないようですね」

「なにこれが非人情的に聞けるのですよ。しかし厭なら少々略しましようか」

「なに私は大丈夫ですよ」

「わたしは、あなたよりなお大丈夫です。——それからと、ええと、少しく六<sup>む</sup>ずかしくなつて来たな。どうも訳し——いや読みにくい」

「読みにくければ、御<sup>おりやく</sup>略しなさい」

「ええ、いい加減にやりましょう。——この一夜<sup>ひとよ</sup>と女が云う。一

夜？　と男がきく。一と限るはつれなし、幾夜を重ねてこそと云う

「女が云うんですか、男が云うんですか」

「男が云うんですよ。何でも女がヴエニスへ帰りたくないのです  
よ。それで男が慰める語なんです。——真夜中の甲板に帆綱  
を枕にして横わりたる、男の記憶には、かの瞬時、熱き一滴の血  
に似たる瞬時、女の手を確と把りたる瞬時が大濤のごとくに搖  
れる。男は黒き夜を見上げながら、強いられたる結婚の淵より、  
是非に女を救い出さんと思い定めた。かく思い定めて男は眼を閉  
する。——

「女は？」

「女は路に迷いながら、いざこに迷えるかを知らぬ様である。攬さま  
われて空行く人のごとく、ただ不可思議の千万無量——あとがち  
よつと読みにくいですよ。どうも句にならない。——ただ不可思  
議の千万無量——何か動詞はないでしようか」

「動詞なんぞいるものですか、それで沢山ですか」

「え？」

轟ごうと音がして山の樹きがことごとく鳴る。思わず顔を見合わす途と  
端たんに、机の上の二輪挿いちりんざしに活けた、椿つばきがふらふらと揺れる。「地  
震たがい！」と小声で叫んだ女は、膝ひざを崩くずして余の机に靠よりかかる。御お  
互きじの身躯からだがすれすれに動く。キキーと鋭するどい羽搏はばたきをして一羽の  
雉子やぶが藪やぶの中から飛び出す。

「雉子が」と余は窓の外を見て云う。

「どこに」と女は崩した、からだを擦寄せる。余の顔と女の顔が触れぬばかりに近づく。細い鼻の穴から出る女の呼吸が余の髭にさわつた。

「非人情ですよ」と女はたちまち坐住居<sup>いすまい</sup>を正しながら屹<sup>きつ</sup>と云う。

「無論<sup>ごんか</sup>」と言下<sup>した</sup>に余は答えた。

岩の凹みに湛えた春の水が、驚ろいて、のたりのたりと鈍く搖<sup>ねる</sup>いている。地盤の響きに、満泓<sup>まんおう</sup>の波が底から動くのだから、表面が不規則に曲線を描くのみで、碎けた部分はどこにもない。円満に動くと云う語があるとすれば、こんな場合に用いられるのだろう。落ちついて影を<sup>ひた</sup>していた山桜が、水と共に、延びたり縮

んだり、曲がつたり、くねつたりする。しかしどう変化してもやはり明らかに桜の姿たもを保つてゐるところが非常に面白い。

「こいつは愉快だ。きれい奇麗で、変化があつて。こう云う風に動かなくつちや面白くない」

「人間もそう云う風にさえ動いていれば、いくら動いても大丈夫ですね」

「非人情でなくつちや、こうは動けませんよ」

「ホホホホ大変非人情が御好きだこと」

「あなた、だつて嫌な方きらいじやありますまい。昨日の振袖きのうふりそでなんか

……」と言いかけると、

「何か御褒美ごほうびをちようだい」と女は急に甘えるように云つた。

「なぜです」

「見たいとおっしゃつたから、わざわざ、見せて上げたんじやありませんか」

「わたしがですか」

「山越やまごえをなさつた画えの先生が、茶店の婆さんにわざわざ御頼みになつたそうで御座います」

余は何と答えてよいやらちょっと挨拶あいさつが出なかつた。女はすかさず、

「そんな忘れっぽい人に、いくら実じつをつくしても駄目ですわねえ」と嘲あざけるごとく、恨うらむがごとく、また真まつこうから切りつけるがごとく二の矢をついだ。だんだん旗はた色いろがわるくなるが、どこで盛

り返したものか、いつたん機先を制せられると、なかなか隙を見出しへく。

「じゃ昨<sup>ゆうべ</sup>夕の風呂場も、全く御親切からなんですね」と際<sup>きわ</sup>どいところでようやく立て直す。

女は黙つてゐる。

「どうも済みません。御礼に何を上げましょう」と出来るだけ先へ出て置く。いくら出ても何の利目もなかつた。女は何喰わぬ顔で大徹<sup>だいてつ</sup>和尚<sup>おしょう</sup>の額<sup>なが</sup>を眺めてゐる。やがて、

「竹<sup>ちく</sup>影<sup>えい</sup> 扌<sup>かい</sup>払<sup>はらつて</sup> 階<sup>ぢりうご</sup>塵<sup>こ</sup>不<sup>かず</sup>動<sup>すき</sup>」

と口のうちで静かに読み了つて、また余の方へ向き直つたが、急に思い出したように、

「何ですつて」

と、わざと大きな声で聞いた。その手は喰わない。

「その坊主にさつき逢いましたよ」と地震に揺れた池の水のように円満な動き方をして見せる。

「観海寺かんかいじの和尚ですか。肥ふとつてるでしよう」

「西洋画で唐紙からかみをかけてくれって、云いましたよ。禪坊さんなんてものは随分訳わけのわからない事を云いますね」

「それだから、あんなに肥れるんでしよう」

「それから、もう一人若い人に逢いましたよ。……」

「久きゆう一いちでしよう」

「ええ久一君です」

「よく御存じです事」

「なに久一君だけ知つてゐるんです。そのほかには何にも知りやしません。口を聞くのが嫌な人ですね」

「なに、遠慮しているんです。まだ小供ですから……」

「小供つて、あなたと同じくらいじやありませんか」

「ホホホホそうですか。あれはわたくしの従弟ですが、今度戦地へ行

くので、暇 乞に來たのです」

「ここに留つて、いるんですか」

「いいえ、兄の家におります」

「じゃ、わざわざ御茶を飲みに來た訳ですね」

「御茶より御白湯の方が好なんですよ。父がよせばいいのに、呼

ぶものですから。麻痺しびれが切れて困つたでしよう。私がおれば中途から帰してやつたんですが……」

「あなたはどこへいらしたんです。和尚が聞いていましたぜ、また一人散歩かつて」

「ええ鏡の池の方を廻つて来ました」

「その鏡の池へ、わたしも行きたいんだが……」

「行つて御覽なさい」

「画えにかくに好い所ですか」

「身を投げるに好い所です」

「身はまだなかなか投げないつもりです」

「私は近々きんきん投げるかも知れません」

余りに女としては思い切つた冗談だから、余はふと顔を上げた。女は存外たしかである。

「私が身を投げて浮いているところを——苦しんで浮いてるところじゃないんです——やすやすと往生して浮いているところを——奇麗な画にかけて下さい」

「え？」

「驚ろいた、驚ろいた、驚ろいたでしよう」

女はすらりと立ち上る。三歩にして尽くる部屋の入口を出るとき、顧みてにこりと笑つた。茫然たる事多時。

鏡が池へ来て見る。観海寺の裏道の、杉の間から谷へ降りて、向うの山へ登らぬうちに、路は二股ふたまたに岐わかれて、おのずから鏡が池の周囲となる。池の縁ふちには熊笹くまざさが多い。ある所は、左右から生い重なつて、ほとんど音を立てずには通れない。木の間から見ると、池の水は見えるが、どこで始まつて、どこで終るか一応廻つた上でないと見当がつかぬ。あるいて見ると存外小さい。三丁ほどよりあるまい。ただ非常に不規則な形かたちで、ところどころに岩が自然のまま水際みすぎわに横よこたわつてゐる。縁の高さも、池の形の名状しがたいように、波を打つて、色々な起伏を不規則に連ねている。

池をめぐりては雑木ぞうきが多い。何百本あるか勘定かんじょうがし切れぬ。中には、まだ春の芽を吹いておらんのがある。割合に枝の繁こまない所は、依然として、うららかな春の日を受けて、萌もえ出でた下し草たぐささえある。壺つぼすみれ 莖この淡き影が、ちらりちらりとその間に見える。

日本の董とうは眠つてゐる感じである。「天てん来らいの奇想のよう」、と形容した西せいじん人の句はどうていあてはまるまい。こう思う途端とたんに余の足はとまった。足がとまれば、厭いやになるまでそこにいる。いられるのは、幸福な人である。東京でそんな事をすれば、すぐ電車に引き殺される。電車が殺さなければ巡査が追つい立てる。都會は太平の民たみを乞食こじきと間違えて、掏摸すりの親分たる探偵たんていに高い月

俸を払う所である。

余は草を茵しとねに太平の尻をそろりと卸おろした。ここならば、五六日こうしたなり動かないでも、誰も苦情を持ち出す氣遣きづかいはない。自然のありがたいところはここにある。いざとなると容赦ようしゃも未練れんもない代りには、人に因つて取り扱よをかえるような軽薄な態度はすこしも見せない。岩崎いわさきや三井みついを眼中に置かぬものは、いくらでもいる。冷然として古今帝王の權威を風馬牛ふうばぎゅうし得るものは自然のみであろう。自然の徳は高く塵界を超えて、対絶の平等びょう等観どうかんを無邊際むへんきに樹立じゆりつしている。天下の羣ぐんしょう小こを麾さしまねいで、いたずらにタイモンの憤りを招くよりは、蘭らんを九畹えんに滋まき、蕙けいを百畝けいに樹えて、独りその裏うちに起臥起きがする方が遙かに得策である。余

は公平と云い無私と云う。さほど大事なものならば、日に千人の  
 小賊しょうぞくを戮りくして、満圃まんぽの草花を彼らの屍に培養つかばねつちかうがよからう。  
 何だか考かんがえが理に落ちていつこうつまらなくなつた。こんな中学  
 程度の觀想かんそうを練りにわざわざ、鏡が池まで来はせぬ。袂から煙  
 草を出して、寸燐マツチをシユツと擦する。手応てごたえはあつたが火は見えな  
 い。敷島しきしまのさきに付けて吸つてみると、鼻から煙が出た。なる  
 ほど、吸つたんだなどようやく気がついた。寸燐マツチは短かい草のな  
 かで、しばらく雨竜あまいようのよくな細い煙りを吐いて、すぐ寂じやくめ  
 滅ひした。席をずらせてだんだん水際みずぎわまで出て見る。余が茵は  
 天然に池のなかに、ながれ込んで、足を浸せば生温なまぬるい水につく  
 かも知れぬと云う間際まぎわで、とまる。水を覗のぞいて見る。

眼の届く所はさまで深そうにもない。底には細長い水草が、  
 往生おうじょうして沈んでいる。余は往生と云うよりほかに形容すべき  
 言葉を知らぬ。岡の薄なら靡く事を知つてはいる。藻の草ならば誘さそ  
 う波の情けなさを待つ。百年待つても動きそうもない、水の底に沈め  
 られたこの水草は、動くべきすべての姿勢ととのを調えて、朝な夕なに、  
 弄なぶらるる期を、待ち暮らし、待ち明かし、幾代の思いくよを茎おもいの先に籠くき  
 めながら、今に至るまでついに動き得ずに、また死に切れずに、  
 生きているらしい。

余は立ち上がり、草の中から、手頃の石を二つ拾つて来る。  
 功徳くどくになると思ったから、眼の先へ、一つ抛ほうり込んでやる。ぶく  
 ぶくと泡あわが二つ浮いて、すぐ消えた。すぐ消えた、すぐ消えたと、

余は心のうちで繰り返す。すかして見ると、三茎みくきほどの長い髪が、  
も  
慵のうげに揺れかかっている。見つかってはと云わぬばかりに、濁つた  
水が底の方から隠しに来る。南無阿弥陀仏。なんむあみだぶつ

今度は思い切つて、懸命に真まんなか中へなげる。ぽかんと幽かずかに音  
がした。静かなるものは決して取り合わない。もう抛なげる気も無  
くなつた。絵の具箱と帽子を置いたまま右手へ廻る。

二間余りを爪先つまさきあ上がりに登る。頭の上には大きな樹きがかぶさ  
つて、身體からだが急に寒くなる。向う岸の暗い所に椿つばきが咲いている。  
椿の葉は緑が深すぎて、昼見ても、日向ひなたで見ても、軽快な感じは  
ない。ことにこの椿は岩角いわかどを、奥へ一二三間遠退とおのいて、花がなけ  
れば、何があるか気のつかない所に森閑しんかんとして、かたまつてい

る。その花が！　一日勘定かんじょうしても無論勘定し切れぬほど多い。  
しかし眼がつけば是非勘定したくなるほど鮮かあざやである。ただ鮮か  
と云うばかりで、いつこう陽気な感じがない。ぱつと燃え立つよ  
うで、思わず、氣を奪だま<sup>と</sup>られた、後は何だか淒すごくなる。あれほど人  
を欺す花はない。余は深山椿みやまつばきを見るたびにいつでも妖女ようじょの姿  
を連想する。黒い眼で人を釣り寄せて、しらぬ間に、嫣然えんぜんたる  
毒を血管に吹く。欺かれたと悟さとつた頃はすでに遅い。向う側の椿  
が眼に入った時、余は、ええ、見なければよかつたと思つた。あ  
の花の色はただの赤ではない。眼を醒さますほどの派出やかさの奥に、  
言うに言われぬ沈んだ調子はでを持つてゐる。悄然しおぜんとして萎れる  
雨中うちゅうの梨花りかには、ただ憐れな感じがする。冷やかに艶えんなる月下げつか

の海棠には、ただ愛らしい気持ちがする。椿の沈んでいるのは全く違う。黒ずんだ、毒氣のある、恐ろし味みを帶びた調子である。この調子を底に持つて、上部うわべはどこまでも派出に装よそおつてゐる。しかも人に媚ぶる態さまもなければ、ことさらに人を招く様子も見えぬ。ぱつと咲き、ぽたりと落ち、ぽたりと落ち、ぱつと咲いて、幾百年の星霜せいそうを、人目にからぬ山陰に落ちつき払つて暮らしてい。ただ一眼見たが最後！ 見た人は彼女の魔力から金輪際こんりんざい、免るる事は出来ない。あの色はただの赤ではない。屠ほふられたる囚人ゆうじんの血が、自おのづから人の眼を惹いて、自から人の心を不快にするごとく一種異様な赤である。

見ていると、ぽたり赤い奴が水の上に落ちた。静かな春に動い

たものはただこの一輪である。しばらくするとまたぼたり落ちた。あの花は決して散らない。崩れるよりも、かたまつたまま枝を離れる。枝を離れるときは一度に離れるから、未練のないよう見えるが、落ちてもかたまつているところは、何となく毒々しい。

またぼたり落ちる。ああやつて落ちているうちに、池の水が赤くなるだろうと考えた。花が静かに浮いている辺は今でも少々赤いような気がする。また落ちた。地の上へ落ちたのか、水の上へ落ちたのか、区別がつかぬくらい静かに浮く。また落ちる。あれが沈む事があるだろうかと思う。年々落ち尽す幾万輪の椿は、水につかって、色が溶け出して、腐つて泥になつて、ようやく底に沈むのかしらん。幾千年の後にはこの古池が、人の知らぬ間に、

落ちた椿のために、埋うずもれて、元の平地ひらちに戻もどるかも知れぬ。また一つ大きいのが血を塗つた、人魂ひとだまのように落ちる。また落ちる。ぽたり。ぽたりと落ちる。際限なく落ちる。

こんな所へ美しい女の浮いているところをかいたら、どうだろうと思ひながら、元の所へ帰つて、また煙草を呑んで、ぼんやり考え込む。温泉場ゆばの御那美おなみさんが昨日きのう冗談じょうだんに云つた言葉が、うねりを打つて、記憶のうちに寄せてくる。心は大浪おおなみにのる一枚の板子いたごのように揺れる。あの顔を種たねにして、あの椿の下に浮かせて、上から椿を幾輪も落とす。椿が長えとこしなに落ちて、女が長ええに水に浮いている感じをあらわしたいが、それが画でかけるだろうか。かのラオコーンには——ラオコーンなどはどうでも構わない。

原理に背いても、背かなくつても、そう云う心持ちさえ出ればいい。しかし人間を離れないで人間以上の永久と云う感じを出すのは容易な事ではない。第一顔に困る。あの顔を借りるにしても、あの表情では駄目だ。苦痛が勝つてはすべてを打ち壊こしてしまう。と云つてむやみに気楽ではなお困る。いつそ一層ほかの顔にしては、どうだろう。あれか、これかと指を折つて見るが、どうも思おもわしくない。やはり御那美さんの顔が一番似合うようだ。しかし何だか物足らない。物足らないとまでは気がつくが、どこが物足らないかが、吾われながら不明である。したがつて自己の想像でいい加減に作り易かえる訳に行かない。あれに嫉しつとを加えたら、どうだろう。嫉ぞうおでは不安の感が多過ぎる。憎惡はどうだろう。憎惡は烈はげし

過ぎる。<sup>いかり</sup>怒?

怒では全然調和を破る。

<sup>うらみ</sup>恨?

恨でも春

<sup>しゅんこん</sup>恨と

か云う、詩的のものならば格別、ただの恨では余り俗である。いろいろに考えた末、しまいにようやくこれだと気がついた。多くある情緒のうちで、憐れと云う字のあるのを忘れていた。憐れは神の知らぬ情で、しかも神にもつとも近き人間の情である。

御那美さんの表情のうちにはこの憐れの念が少しもあらわれておらぬ。そこが物足らぬのである。ある咄嗟<sup>とつさ</sup>の衝動で、この情がある女の眉宇<sup>びう</sup>にひらめいた瞬時に、わが画は成<sup>じょうじゆ</sup>就するであろう。しかし——いつそれが見られるか解らない。あの女の顔に普段充満しているものは、人を馬鹿にする微笑<sup>うすわらい</sup>と、勝とう、勝とうと焦る八の字のみである。あれだけでは、とても物にならない。

あせ

がさりがさりと足音がする。胸裏きょうりの図案は三分二ぶふで崩れた。

見ると、筒袖つつそでを着た男が、背せへ薪まきを載のせて、熊くま笹ざさのなかを観

海寺の方へわたつてくる。隣りの山からおりて来たのだろう。

「よい御天氣で」と手拭てぬぐいをとつて挨拶あいさつする。腰かがを屈かがめる途端とたん

に、三尺帯おとに落した鉈なたの刃はがぴかりと光つた。四十恰好がつこうの逞たくましい

男である。どこかで見たようだ。男は旧知だんなのように馴々なれなれしい。

「旦那だんなも画おかを御描お書きなさるか」余の絵の具箱は開けてあつた。

「ああ。この池でも画かこうと思つて来て見たが、淋さみしい所だね。

誰も通らない」

「はあい。まことに山の中で……旦那とうげあ、峠おふで御降おふられなさつて、

さぞ御困りでござんしたろ」

「え？ うん御前おまえはあの時の馬子まごさんだね」

「はあい。こうやつて薪たきぎを切つては城下じょうかへ持つて出ます」と源兵衛は荷おろを卸おろして、その上へ腰をかける。煙草入たばこ入れを出す。古いものだ。紙かわだか革かわだか分らない。余は寸燃マツチを借かしてやる。

「あんな所を毎日越すなあ大変だね」

「なあに、馴れてなまけいますから——それに毎日は越しません。三日みつかに一返ペん、ことによると四日目よつかめくらいになります」

「四日に一返ペんでも御免だ」

「アハハハハ。馬が不憫ふびんですから四日目くらいにして置きます」

「そりやあ、どうも。自分より馬の方が大事なんだね。ハハハハ」

「それほどでもないんで……」

「時にこの池はよほど古いもんだね。全体いつ頃からあるんだい」

「昔からありますよ」

「昔から？　どのくらい昔から？」

「なんでもよっぽど古い昔から」

「よっぽど古い昔しからか。なるほど」

「なんでも昔し、志保田の嬢様が、身を投げた時分からあります

よ」

「志保田つて、あの温泉場ゆばのかい」

「はあい」

「御嬢さんが身を投げたつて、現に達者でいるじゃないか」

「いんにえ。あの嬢さまじやない。ずっと昔の嬢様が」

「ずっと昔の嬢様。いつ頃かね、それは」

「なんでも、よほど昔しの嬢様で……」

「その昔の嬢様が、どうしてまた身を投げたんだい」

「その嬢様は、やはり今の嬢様のように美しい嬢様であつたそう  
ながな、旦那様」

「うん」

「すると、ある日、一人の梵論字ひとり ぼろんじが来て……」

「梵論字と云うと虚無僧こもそうの事かい」

「はあい。あの尺八を吹く梵論字の事でござんす。その梵論字が  
志保田の庄屋しょうやへ逗留とうりゆうしているうちに、その美くしい嬢様が、  
その梵論字を見染めて——因果いんがと申しますか、どうしてもいつし

よになりたいと云うて、泣きました

「泣きました。ふうん」

「ところが庄屋どのが、聞き入れません。梵論字は智にはならんと云うて。とうとう追い出しました」

「その虚無僧をかい」

「はあい。そこで娘様が、梵論字のあとを追うてここまで来て、——あの向うに見える松の所から、身を投げて、——とうとう、えらい騒ぎになりました。その時何でも一枚の鏡を持つていたとか申し伝えておりますよ。それでこの池を今でも鏡が池と申します」

「へええ。じゃ、もう身を投げたものがあるんだね」

「まことに怪しからん事でござんす」

「何代くらい前の事かい。それは」

「なんでもよつぽど昔の事でござんすそうな。それから——これはここ限りの話だが、旦那さん」

「何だい」

「あの志保田の家には、代々氣狂だいだいきちがいが出来ます」

「へええ」

「全く祟たたりでござんす。今の嬢様も、近頃は少し変だ云うて、皆が囁はやします」

「ハハハハそんな事はなかろう」

「ござんせんかな。しかしあの御袋おふくろさま様がやはり少し変でな」

「うちにいるのかい」

「いいえ、去年亡くなりました」

「ふん」と余は煙草の吸殻から細い煙の立つのを見て、口を閉じた。源兵衛は薪を背にして去る。

画をかきに来て、こんな事を考えたり、こんな話を聴くばかりでは、何日かかっても一枚も出来っこない。せつかく絵の具箱まで持ち出した以上、今日は義理にも下絵をとつて行こう。幸、向側の景色は、あれなりで略纏まつている。あすこでも申し訳にちよつと描こう。

一丈余りの蒼黒い岩が、真直に池の底から突き出して、濃き水の折れ曲る角に、嵯々と構える右側には、例の熊笹が断

崖いの上から水際まで、一寸の隙間なく叢生している。上には三抱ほどの大木な松が、若薦にからまれた幹を、斜めに捩つて、半分以上水の面へ乗り出している。鏡を懐にした女は、あの岩の上からでも飛んだものだろう。

三脚几に尻を据えて、画面に入るべき材料を見渡す。松と、竹と、岩と水であるが、さて水はどこでとめてよいか分らぬ。岩の高さが一丈あれば、影も一丈ある。熊笹は、水際でとまらずに、水の中まで茂り込んでいるかと怪まるくらい、鮮やかに水底まで写っている。松に至つては空に聳ゆる高さが、見上げらるるだけ、影もまたすこぶる細長い。眼に写つただけの寸法ではどうてい取りがつかない。一層の事、実物をやめて影だけ描くのも一興

だろう。水をかいて、水の中の影をかいて、そうして、これが画だと人に見せたら驚ろくだろう。しかしただ驚ろかせるだけではつまらない。なるほど画になつていると驚かせなければつまらない。どう工夫くふうをしたものだらうと、一心に池の面おもを見詰める。

奇体なもので、影だけ眺めていてはいつこう画にならん。実物と見比べて工夫がして見たくなる。余は水面から眸ひとみを転じて、そろりそろりと上方へ視線を移して行く。一丈の巖いわおを、影の先から、水際の継目まで眺めて、継目から次第に水の上に出る。潤じゅん沢たくの気合けあいから、皴しゆん皺しゆの模様を逐一吟味ちくいちぎんみしてだんだんと登つて行く。ようやく登り詰めて、余の双眼そうがんが今危巖きがんの頂いただきに達したるとき、余は蛇へびに睨にらまれた墓ひきのごとく、はたりと画筆えふでを取り

落した。

緑りの枝を通す夕日を背に、暮れんとする晩春の蒼黒く巖頭を  
 彩る中に、楚然として織り出されたる女の顔は、——花下に余  
 を驚かし、まぼろしに余を驚ろかし、振袖に余を驚かし、風呂  
 場に余を驚かしたる女の顔である。

余が視線は、蒼白き女の顔の真中まんなかにぐさと釘付けにされた  
 ぎり動かない。女もしなやかなる体躯たいくを伸せるだけ伸して、高い  
 巖いわおの上に一指も動かさずに立つている。この一刹那いつせつな！

余は見えず飛び上つた。女はひらりと身をひねる。帯の間に椿  
 の花の如く赤いものが、ちらついたと思つたら、すでに向うへ飛  
 び下りた。夕日は樹梢じゅしおを掠めて、幽かに松の幹を染むる。熊

笛はいよいよ青い。

また驚かされた。

## 十一

山里やまとの臘おぼろに乗じてそぞろ歩く。観海寺の石段せきだんを登りながら仰あ  
数おぎか春ぞうしゅん星せい一二三と云う句を得た。余は別に和尚おしょうに逢う用  
事もない。逢うて雑話ざわをする気もない。偶然と宿しゆくを出でて足の向  
くところに任せてぶらぶらするうち、ついこの石磴せきとうの下に出た。  
しばらく不許くんしゆ葷さん入いり山門さんもんと云う石を撫なでて立つて立つていたが、  
急にうれしくなつて、登り出したのである。

トリリストラム・シャンデーと云う書物のなかに、この書物ほど神の御覚召に叶うた書き方はないとある。最初の一句はともかくも自力で綴る。あとはひたすらに神を念じて、筆の動くに任せよ。何をかくか自分には無論見当がつかぬ。かく者は自己であるが、かく事は神の事である。したがつて責任は著者にはないそうだ。余が散歩もまたこの流儀を汲んだ、無責任の散歩である。ただ神を頼まぬだけが一層の無責任である。スターんは自分の責任を免れると同時にこれを在天の神に嫁した。引き受けてくれる神を持たぬ余はついにこれを泥溝の中に棄てた。

石段を登るにも骨を折つては登らない。骨が折れるくらいなら、すぐ引き返す。一段登つて佇むとき何となく愉快だ。それだから

二段登る。二段目に詩が作りたくなる。默然として、吾影を見る。角石に遮られて三段に切れているのは妙だ。妙だからまた登る。仰いで天を望む。寝ぼけた奥から、小さい星がしきりに瞬きをする。句になると思つて、また登る。かくして、余はどうとう、上まで登り詰めた。

石段の上で思い出す。昔し鎌倉へ遊びに行つて、いわゆる五山なるものを、ぐるぐる尋ねて廻つた時、たしか円覚寺の塔頭であつたろう、やはりこんな風に石段をのそりのそりと登つて行くと、門内から、黄な法衣を着た、頭の鉢の開いた坊主が出て来た。余は上る、坊主は下る。すれ違つた時、坊主が鋭どい声でどこへ御出なさると問うた。余はただ境内を拝見にと答えて、

同時に足を停めたら、坊主は直ちに、何もありませんぞと言い捨てて、すたすた下りて行つた。あまり洒落だから、余は少しく先を越された氣味で、段上に立つて、坊主を見送ると、坊主は、かの鉢の開いた頭を、振り立て振り立て、ついに姿を杉の木の間に隠した。その間かつて一度も振り返つた事はない。なるほど禪僧は面白い。きびきびしているなど、のつそり山門を這入つて、見ると、広い庫裏も本堂も、がらんとして、人影はまるでない。余はその時に心からうれしく感じた。世の中にこんな洒落な人があつて、こんな洒落に、人を取り扱つてくれたかと思うと、何となく氣分が晴々した。<sup>せいせい</sup>禪<sup>ぜん</sup>心得ていたからと云う訳ではない。禪のぜの字もいまだに知らぬ。ただあの鉢の開いた坊主の所作が気

に入ったのである。

世の中はしつこい、毒々しい、こせこせした、その上ずうずうしい、いやな奴やつで埋うづまつてゐる。元来何しに世の中へ面づらを曝さらしてい るんだか、解げしかねる奴さえいる。しかもそんな面に限つて大きいものだ。浮世の風にあたる面積の多いのをもつて、さも名誉のごとく心得てゐる。五年も十年も人の臀しりに探たんてい偵じをつけて、人のひる屁への勘定かんじょうをして、それが人世だと思つてる。そうして人の前へ出て来て、御前は屁をいくつ、ひつた、いくつ、ひつたと頼みもせぬ事を教える。前へ出て云うなら、それも参考にして、やらんでもないが、後ろの方から、御前は屁をいくつ、ひつた、いくつ、ひつたと云う。うるさいと云えばなおな云う。よせと

云えますます云う。分つたと云つても、屁をいくつ、ひつた、  
 ひつたと云う。そうしてそれが処世の方針だと云う。方針は人  
 々勝手である。<sup>ん</sup>ただひつたひつたと云わずに黙つて方針を立てる  
 がいい。人の邪魔になる方針は差し控<sup>さひか</sup>えるのが礼儀だ。邪魔に  
 ならなければ方針が立たぬと云うなら、こつちも屁をひるのをも  
 つて、こつちの方針とするばかりだ。そうなつたら日本も運の尽  
 きだろう。

こうやつて、美しい春の夜に、何らの方針も立てずに、あるいは  
 てるのは実際高尚だ。<sup>きた</sup>興來れば興来るをもつて方針とする。興去  
 れば興去るをもつて方針とする。句を得れば、得たところに方針  
 が立つ。得なれば、得ないところに方針が立つ。しかも誰の迷

惑にもならない。これが真正の方針である。屁を勘定するのは人身攻撃の方針で、屁をひるのは正当防禦の方針で、こうやつて観海寺の石段を登るのは隨縁放曠の方針である。

仰数春星一二三の句を得て、石磴を登りつくしたる

時、臚にひかる春の海が帶のごとくに見えた。山門に入る。絶句は纏める氣にならなくなつた。即座にやめにする方針を立てる。

石を斂んで庫裡に通ずる一筋道の右側は、岡つつじの生垣で、

垣の向は墓場であろう。左は本堂だ。屋根瓦が高い所で、幽かに光る。数万の甍に、数万の月が落ちたようだと見上る。どこやらで鳩の声がしきりにする。棟の下にでも住んでいるらしい。気のせいいか、廂のあたりに白いものが、点々見える。糞かも知れぬ。

雨垂れ落ちの所に、妙な影が一列に並んでいる。木とも見えぬ、草では無論ない。感じから云うと岩佐又兵衛のかいた、鬼の念佛が、念仏をやめて、踊りを踊つてゐる姿である。本堂の端から端まで、一列に行儀よく並んで躍つてゐる。その影がまた本堂の端から端まで一列に行儀よく並んで躍つてゐる。朧夜にそぞのかされて、鉢も撞木も、奉加帳も打ちすぎて、誘い合せるや否やこの山寺へ踊りに来たのだろう。

近寄つて見ると大きな霸王樹である。高さは七八尺もある、糸瓜ほどの青い黃瓜を、杓子のように圧しひしやげて、柄の方を下に、上へ上へと継ぎ合せたように見える。あの杓子がいくつ継がつたら、おしまいになるのか分らない。今夜のうちにも廂ひさし

を突き破つて、屋根瓦の上まで出そうだ。あの杓子が出来る時は、何でも不意に、どこからか出て来て、ぴしゃりと飛びつくに違いない。古い杓子が新しい小杓子を生んで、その小杓子が長い年月のうちにだんだん大きくなるようには思われない。杓子と杓子の連續がいかにも空飛とっぴである。こんな滑稽こつけいな樹はたんとあるまい。しかも澄ましたものだ。いかなるこれ仏と問われて、庭前まへの柏樹はくじゅ子と答えた僧があるよしだが、もし同様の間に接した場合には、余は一も二もなく、月下の霸王樹はおうじゆと応えるであろう。

少時しょうじ、晁補之ちようほしと云う人の記行文を読んで、いまだに暗あんしょ誦とうしている句がある。「時に九月天高く露清く、山空むなしく、月明かに、仰いで星斗せいとを覗れば皆みな光大ひかりだい、たまたま人の上にある

がごとし、窓間の竹數十竿、相摩裏して声切々やまず。竹間の梅棕森然として鬼魅の離立笑の状のごとし。二三子相顧み、魄動いて寝るを得ず。遅明皆去る」とまた口の内で繰り返して見て、思わず笑つた。この霸王樹も時と場合によれば、余の魄を動かして、見るや否や山を追い下げたであろう。

刺に手を触れて見ると、いらいらと指をさす。

石凳を行き尽くして左へ折れると庫裏へ出る。庫裏の前に大きな木蓮がある。ほとんど一抱もある。高さは庫裏の屋根を抜いている。見上げると頭の上は枝である。枝の上も、また枝である。そうして枝の重なり合つた上が月である。普通、枝がああ重なると、下から空は見えぬ。花があればなお見えぬ。木蓮

の枝はいくら重なつても、枝と枝の間はほがらかに隙<sup>す</sup>いている。

木蓮は樹下に立つ人の眼を乱すほど細い枝をいたずらには張らぬ。花さえ明か<sup>あきら</sup>である。この遙かなる下から見上げても一輪の花は、はつきりと一輪に見える。その一輪がどこまで簇<sup>むら</sup>がつて、どこまで咲いているか分らぬ。それにもかかわらず一輪はついに一輪で、一輪と一輪の間から、薄青い空<sup>はんぜん</sup>が判然と望まれる。花の色は無論純白ではない。いたずらに白いのは寒過ぎる。<sup>もつぱ</sup>専らに白いのは、ことさらに人の眼を奪う巧み<sup>たく</sup>が見える。木蓮の色はそれではない。極度の白きをわざと避けて、あたたかみのある淡黄<sup>たんこう</sup>に、奥床<sup>おくゆか</sup>しきも自らを卑下<sup>ひげ</sup>している。余は石<sup>いしだたみ</sup>礎<sup>くら</sup>の上に立つて、このおとなしい花が累々<sup>るいり</sup>とどこまでも空裏<sup>くうり</sup>に蔓る様を見上げて、

しばらく 茫然としていた。眼に落つるのは花ばかりである。葉は一枚もない。

木蓮の花ばかりなる空を瞻る

と云う句を得た。どこやらで、鳩がやさしく鳴き合っている。

庫裏に入る。庫裏は明け放してある。盜人はおらぬ国と見える。狗はもとより吠えぬ。

「御免」

と訪問される。森として返事がない。

「頼む」

と案内を乞う。鳩の声がくううくううと聞える。

「頼みまああす」と大きな声を出す。

「おおおおおおお」と遙かの向むこうで答えたものがある。人の家を訪とうて、こんな返事を聞かされた事は決してない。やがて足音が廊下へ響くと、紙燭の影が、衝立ついたての向側にさした。小坊主こい坊主がひよこりとあらわれる。了念りょうねんであった。

「和尚おしゃうさんはおいでかい」

「おられる。何しにござつた」

「温泉にいる画工えかきが來たと、取次とりついでおくれ

「画工さんか。それじや御上りおあがり」

「断わらないでもいいのかい」

「よろしかろ」

余は下駄を脱いで上がる。

「行儀がわるい画工さんじやな」

「なぜ」

「下駄を、よう御揃えなさい。そらここを御覧」と紙燭を差しつける。黒い柱の真中に、土間から五尺ばかりの高さを見計つて、半紙を四つ切りにした上へ、何か認めてある。

「そおら。読めたら。脚<sup>きやつか</sup>下を見よ、と書いてあるが」

「なるほど」と余は自分の下駄を丁寧に揃える。

和尚の室<sup>へや</sup>は廊下を鍵<sup>かぎ</sup>の手に曲<sup>まが</sup>つて、本堂の横手にある。障<sup>しょ</sup>子<sup>うじ</sup>

を恭<sup>うやうや</sup>しくあけて、恭<sup>うやうや</sup>しく敷居越しにつくばつた了念が、

「あのう、志保田<sup>しほだ</sup>から、画工さんが来られました」と云う。はなはだ恐縮<sup>てい</sup>の体である。余はちよつとおかしくなつた。

「そうか、これへ」

余は了念と入れ代る。室がすこぶる狭い。中に囲炉裏を切つて、  
鉄瓶が鳴る。和尚は向側に書見をしていた。

「さあこれへ」と眼鏡をはずして、書物を傍へおしやる。  
「了念。りょううねええん」

「ははははい」

「座布団を上げんか」

「はははははい」と了念は遠くで、長い返事をする。

「よう、来られた。さぞ退屈だろ」

「あまり月がいいから、ぶらぶら來ました」

「いい月じやな」と障子を開ける。飛び石が二つ、松一本のほか

には何もない、平庭の向うは、すぐ懸崖と見えて、眼の下に  
朧夜の海がたちまちに開ける。急に気が大きくなつたような心  
持である。漁火がここ、かしこに、ちらついて、遙かの末は空  
に入つて、星に化けるつもりだろう。

「これはいい景色。和尚さん、障子をしめているのはもつた  
ないじやありませんか」

「そうよ。しかし毎晩見ているからな」

「何晩見てもいいですよ、この景色は。私なら寝ずに見ていま  
す」

「ハハハハ。もつともあなたは画工だから、わしとは少し違うて  
「和尚さんだつて、うつくしいと思つてるうちは画工でさあ」

「なるほどそれもそうじやろ。わしも達磨だるま<sup>え</sup>の画ぐらいはこれで、かくがの。そら、ここに掛けてある、この軸じくは先代がかかれたのじやが、なかなかようかいとる」

なるほど達磨の画とこが小さい床とこに掛つてゐる。しかし画としてはすこぶるまずいものだ。ただ俗氣ぞつきがない。拙せつを蔽おおとうと力めているところが一つもない。無邪氣な画だ。この先代もやはりこの画のようない構はない人であつたんだろう。

「無邪氣な画ですね」

「わしらのかく画はそれで沢山じや。氣象きしようさえあらわれておれば……」

「上手で俗氣があるのより、いいです」

「ははははまあ、それでも、賞ほめて置いてもらおう。時に近頃は  
画工にも博士があるかの」

「画工の博士はありませんよ」

「あ、そうか。この間、何でも博士に一人逢おうた」

「へええ」

「博士と云うとえらいものじやろな」

「ええ。えらいんでしょう」

「画工にも博士がありそうなものじやがな。なぜ無いだろう」

「そういえば、和尚さんの方にも博士がなけりやならないでしょ

う」

「ハハハハまあ、そんなものかな。——何とか云う人じやつたて、

この間逢うた人は——どこぞに名刺があるはずだが……

「どこで御逢いです、東京ですか」

「いやここで、東京へは、も二十年も出ん。近頃は電車とか云うものが出来たそうじやが、ちよつと乗つて見たいような気がする」

「つまらんものですよ。やかましくつて」

「そうかな。蜀 犬 日に吠え、吳 牛月に喘ぐと云うから、わしのような田舎者いなかもものは、かえつて困るかも知れんてのう」

「困りやしませんがね。つまらんですよ」

「そうかな」

鉄瓶てつびんの口から煙さかんが盛さかんに出る。和尚おじょうは茶箪笥ちゃだんすから茶器を取り出して、茶を注いでくれる。

「番茶を一つ御上り。<sup>おあが</sup>志保田の隠居さんのような<sup>うま</sup>甘い茶じやない」

「いえ結構です」

「あなたは、そうやつて、方々あるくように見受けるがやはり画<sup>え</sup>をかくためかの」

「ええ。道具だけは持つてあるきますが、画はかかないでも構わないんです」

「はあ、それじや遊び半分かの」

「そうですね。そう云つても善いでしょう。屁<sup>へ</sup>の勘定<sup>かんじょう</sup>をされるのが、いやですかね」

さすがの禪僧も、この語だけは解<sup>げ</sup>しかねたと見える。

「屁の勘定た何かな」

「東京に永くいると屁の勘定をされますよ」

「どうして」

「ハハハハハ勘定だけならいいですが。人の屁を分析して、臀の穴が三角だの、四角だのつて余計な事をやりますよ」

「はあ、やはり衛生の方かな」

「衛生じやありません。探偵たんていの方です」

「探偵？　なるほど、それじや警察じやの。いつたい警察の、巡査のて、何の役に立つかの。なけりやならんかいの」

「そうですね、画工えかきには入りませんね」

「わしにも入らんがな。わしはまだ巡査の厄介やっかいになつた事がな

い」

「そうでしょう」

「しかし、いくら警察が屁の勘定をしたてて、構わんがな。澄ま  
していたら。自分にわるい事がなけりや、なんぼ警察じやて、ど  
うもなるまいがな」

「屁くらいで、どうかされちやたまりません」

「わしが小坊主のとき、先代がよう云われた。人間は日本橋の真  
中に臓腑ぞうふをさらけ出して、恥ずかしくないようにななければ修業  
を積んだとは云われんてな。あなたもそれまで修業をしたらよか  
ろ。旅などはせんでも済むようになる」

「画工になり澄ませば、いつでもそうなれます」

「それじや画工になり澄したらよから」

「屁の勘定をされちゃ、なり切れませんよ」

「ハハハハ。それ御覧。あの、あなたの泊<sup>とま</sup>つている、志保田の御那美さんも、嫁<sup>い</sup>に入つて帰つてきてから、どうもいろいろな事が氣になつてならん、ならんと云うてしまいにとうとう、わしの所へ法<sup>ほう</sup>を問い合わせに来たじやて。ところが近頃はだいぶ出来てきて、そら、御覧。あのような訳<sup>わけ</sup>のわかつた女になつたじやて」

「へええ、どうもただの女じゃないと思いました」

「いやなかなか機<sup>き</sup>鋒<sup>ほう</sup>の銳<sup>する</sup>どい女で——わしの所へ修業に來ていた泰<sup>たい</sup>安<sup>あん</sup>と云う若<sup>にゃく</sup>僧<sup>そう</sup>も、あの女のために、ふとした事から大事<sup>だいじ</sup>を<sup>ほ</sup>窮<sup>きゆう</sup>明<sup>めい</sup>せんならん因縁<sup>いんねん</sup>に逢<sup>こう</sup>着<sup>ちやく</sup>して——今によい智識<sup>ちしき</sup>になるようじや」

静かな庭に、松の影が落ちる、遠くの海は、空の光りに応うる  
 がごとく、応えざるがごとく、有耶無耶のうちに微かなる、耀き  
 を放つ。漁火いざりびは明滅す。

「あの松の影を御覧」

「奇麗きれいですな」

「ただ奇麗かな」

「ええ」

「奇麗な上に、風が吹いても苦にしない」

茶碗に余つた渋茶を飲み干して、糸底いとぞこを上に、茶托ちやたくへ伏せて、立ち上る。

「門まで送つてあげよう。りょううねええん。御客が御帰おかえりだぞ

よ

送られて、庫裏くりを出ると、鳩がくううくううと鳴く。

「鳩ほど可愛いものはない、わしが、手をたたくと、みな飛んでくる。呼んで見よか」

月はいよいよ明るい。しんしんとして、木蓮もくれんは幾朵いくだの雲華うんげを空裏くうりに擎ささげている。汎寥けつりようたる春夜しゅんやの真中まなかに、和尚ははたと掌たなこを拍うちつ。声は風ふう中に死して一羽の鳩も下りぬ。

「下りんかいな。下りそうなものじやが」

了念は余の顔を見て、ちよつと笑つた。和尚は鳩の眼が夜でも見えると思うているらしい。氣楽なものだ。

山門の所で、余は二人に別れる。見返えると、大きな丸い影と、

小さな丸い影が、石礫の上に落ちて、前後して庫裏の方に消えて行く。

## 十二

基督教は最高度に芸術家の態度を具足したるものなりとは、才スカーリー・ワイルドの説と記憶している。基督は知らず。觀海寺の和尚のごときは、まさしくこの資格を有していると思う。趣味があると云う意味ではない。時勢に通じていると云う訳でもない。彼は画と云う名のほとんど下すべからざる達磨の幅を掛けて、ようできたなどと得意である。彼は画工に博士があるものと心得て

いる。彼は鳩の眼を夜でも利くものと思つてゐる。それにも関わらず、芸術家の資格があると云う。彼の心は底のない囊のように行き抜けである。何にも停滞しておらん。隨處に動き去り、任意に作し去つて、些の塵滓の腹部に沈澱する景色がない。もし彼の脳裏に一点の趣味を貼し得たならば、彼は之く所に同化して、行屎走尿の際にも、完全たる芸術家として存在し得るだろう。余のごときは、探偵に屁の数を勘定される間は、どうてい画家にはなれない。画架に向う事は出来る。小手板を握る事は出来る。しかし画工にはなれない。こうやつて、名も知らぬ山里へ来て、暮れんとする春色のなかに五尺の瘦躯を埋めつくして、始めて、眞の芸術家たるべき態度に吾身を置き得るのであ

る。一たびこの境界に入れば美の天下はわが有に帰する。尺素を染めず、寸縫を塗らざるも、われは第一流の大画工である。技巧において、ミケルアンゼロに及ばず、巧みなる事ラフハエルに譲る事ありとも、芸術家たるの人格において、古今の大家と歩武を齊ゆうして、毫も遜るところを見出しえない。余はこの温泉場へ来てから、まだ一枚の画もかかない。絵の具箱は酔興に、扱いできたかの感さえある。人はあれでも画家かと嗤うかもしれぬ。いくら嗤われても、今の余は眞の画家である。立派な画家である。こう云う境を得たものが、名画をかくとは限らん。しかし名画をかき得る人は必ずこの境を知らねばならん。

朝飯をすまして、一本の敷島をゆたかに吹かしたるときの

余の観想は以上のごとくである。日は霞を離れて高く上つてゐる。  
 障子を開けて、後ろの山を眺めたら、蒼い樹が非常にすき通つて、例になく鮮やかに見えた。

余は常に空氣と、物象と、彩色の関係を宇宙でもつとも興味ある研究の一と考えてゐる。色を主にして空氣を出すか、物を主にして、空氣をかくか。または空氣を主にしてそのうちに色と物とを織り出すか。画は少しの氣合一つでいろいろな調子が出る。

この調子は画家自身の嗜好で異なつてくる。それは無論であるが、時と場所とで、自ずから制限されるのもまた当前である。英国人のかいた山水に明るいものは一つもない。明るい画が嫌なのかも知れぬが、よし好きであつても、あの空氣では、どうする事

も出来ない。同じ英人でもグーダルなどは色の調子がまるで違う。違うはずである。彼は英人でありながら、かつて英國の景色をかいた事がない。彼の画題は彼の郷土はない。彼の本国に比すると、空気の透明の度の非常に勝つていて、埃及または波斯辺の光景のみをえらんでいる。したがつて彼のかいた画を、始めて見ると誰も驚ろく。英人にもこんな明かな色を出すものがあるかと疑うくらい判然出來上つてゐる。

個人の嗜好はどうする事も出来ん。しかし日本の山水を描くのが主意であるならば、吾々もまた日本固有の空氣と色を出さなければならん。いくら仏蘭西の絵がうまいと云つて、その色をそのままに写して、これが日本の景色だとは云われない。やはり面ま

のあたり自然に接して、朝な夕なに雲容煙態を研究したあげく、あの色こそと思つたとき、すぐ三脚几を担いで飛び出さなければならん。色は刹那に移る。一たび機を失すれば、同じ色は容易に眼には落ちぬ。余が今見上げた山の端には、滅多にこの辺で見る事の出来ないほどな好い色が充ちてゐる。せつかく来て、あれを逃すのは惜しいものだ。ちょっと写してきよう。

襖を開けて、椽側へ出ると、向う二階の障子に身を倚たして、那美さんが立つてゐる。顎を襟のなかへ埋めて、横顔だけしか見えぬ。余が挨拶をしようと思う途端に、女は、左の手を落としたまま、右の手を風のごとく動かした。閃くは稻妻か、二ふ折れ三折れ胸のあたりを、するりと走るや否や、かちりと音がし

て、閃めきはすぐ消えた。女の左り手には九寸五分の白鞘すんぶ 鞘しらさや が  
る。姿はたちまち障子の影に隠れた。余は朝つぱらから歌舞伎座かぶきざ  
を覗のぞいた氣で宿を出る。

門を出て、左へ切れると、すぐ岨道そばみち つづきの、爪上つまあげりにな  
る。鶯うぐいすが所ところどころ々で鳴く。左り手がなだらかな谷へ落ちて、蜜柑みかん  
が一面に植えてある。右には高からぬ岡が二つほど並んで、ここ  
にもあるは蜜柑のみと思われる。何年前か一度この地に來た。指  
を折るのも面倒だ。何でも寒い師走しわすの頃であつた。その時蜜柑山  
に蜜柑がべた生りに生る景色を始めて見た。蜜柑取りに一枝壳つ  
てくれと云つたら、幾顆いくつでも上げますよ、持つていらっしゃいと  
答えて、樹きの上で妙な節の唄うたをうたい出した。東京では蜜柑の皮

でさえ薬種屋やくしゅやへ買いに行かねばならぬのにと思つた。夜になる  
と、しきりに銃つの音がする。何だと聞いたら、獵師りょうしが鴨かもをとる  
んだと教えてくれた。その時は那美さんの、なの字も知らずに済  
んだ。

あの女を役者にしたら、立派な女おんながた形がたが出来る。普通の役者は、舞台へ出ると、よそ行きの芸をする。あの女は家のなかで、  
常じょうじゅう住じゅ芝居しばゐをしている。しかも芝居しばゐをしているとは気がつかん。  
自然しぜん天然てんねんに芝居しばゐをしている。あんなのを美的生活びてきせいかつとでも云う  
のだろう。あの女の御蔭おかげで画えの修業がだいぶ出来た。

あの女の所作しょさを芝居しばゐと見なければ、薄氣味うすぎみがわるくて一日もいたたまれん。義理とか人情とか云う、尋常の道具どうぐ立て立だてを背景にし

て、普通の小説家のような観察点からあの女を研究したら、刺激が強過ぎて、すぐいやになる。現実世界に在つて、余とあの女の間に纏綿てんめんした一種の関係が成り立つたとするならば、余の苦痛は恐らく言語ごんごに絶するだろう。余のこのたびの旅行は俗情を離れて、あくまで画工になり切るのが主意であるから、眼に入るものはことごとく画として見なければならん。能、芝居、もしくは詩中の人物としてのみ觀察しなければならん。この覺悟の眼鏡めがねから、あの女を覗のぞいて見ると、あの女は、今まで見た女のうちでもっともうつくしい所作をする。自分でうつくしい芸をして見せると云う気がないだけに役者の所作よりもなおうつくしい。

こんな考かんがえをもつ余を、誤解してはならん。社会の公民として不

適當だなどと評してはもつとも不届きである。善は行い難い、徳は施こしにくい、節操は守り安からぬ、義のために命を捨てるのは惜しい。これらをあえてするのは何人なんびとに取つても苦痛である。その苦痛を冒すためには、苦痛に打ち勝つだけの愉快がどこかに潜ひそんでおらねばならん。画と云うも、詩と云うも、あるは芝居と云うも、この悲酸ひさんのうちに籠る快感の別号に過ぎん。この趣おもむきを解し得て、始めて吾人の所作は壯烈にもなる、閑雅にもなる、すべての困苦に打ち勝つて、胸中的一点の無上趣味を満足せしめたくなる。肉体の苦しみを度外に置いて、物質上の不便を物とも思わず、勇猛精進しょうじんの心を駆かつて、人道のために、鼎ていかくに烹にらるるを面白く思う。もし人情なる狭せまき立脚地に立つて、芸術の定

義を下し得るとすれば、芸術は、われら教育ある士人の胸<sup>きょううり</sup>裏に潜<sup>ひそ</sup>んで、邪<sup>じゃ</sup>を避け正<sup>せい</sup>に就<sup>つ</sup>き、曲<sup>きょく</sup>を斥<sup>け</sup>直<sup>す</sup>にくみし、弱<sup>じやく</sup>を扶<sup>たす</sup>け強<sup>きょう</sup>を挫<sup>くじ</sup>かねば、どうしても堪<sup>たま</sup>えられぬと云う一念の結晶して、燦<sup>さん</sup>として白日<sup>はくじつ</sup>を射返すものである。

芝居氣<sup>しばゐき</sup>があると人の行為を笑う事がある。うつくしき趣味<sup>つらぬ</sup>を貫<sup>わら</sup>かんがために、不必要なる犠牲<sup>てら</sup>をあえてするの人情に遠きを嗤<sup>ぐ</sup>うのである。自然にうつくしき性格を發揮するの機会を待たずして、無理矢理に自己の趣味觀を衒うの愚<sup>ぐ</sup>を笑うのである。真に個<sup>こちゅう</sup>中の消息を解し得たるものゝ嗤うはその意を得ている。趣味の何物たるをも心得ぬ下司<sup>げす</sup>下郎<sup>げろう</sup>の、わが卑しき心根に比較して他を賤しむに至つては許しがたい。昔し嚴<sup>がん</sup>頭<sup>とう</sup>の吟<sup>ぎん</sup>を遺<sup>のこ</sup>して、五十丈の飛<sup>ひ</sup>

瀑を直下して 急湍に赴いた青年がある。余の視るところにては、彼の青年は美の一字のために、捨つべからざる命を捨てたるものと思う。死そのものは洵に壮烈である、ただその死を促がすの動機に至つては解しがたい。されども死そのものの壮烈をだに体し得ざるもののが、いかにして 藤村子の所作を嗤い得べき。彼らは壮烈の最後を遂ぐるの情趣を味い得ざるが故に、たとい正当の事情のもとにも、とうてい壮烈の最後を遂げ得べからざる制限ある点において、藤村子よりは人格として劣等であるから、嗤う権利がないものと余は主張する。

余は画工である。画工であればこそ趣味専門の男として、たどり人情世界に墮在するも、東西両隣りの没風流漢よりも高尚

である。社会の一員として優に他を教育すべき地位に立っている。詩なきもの、画なきもの、芸術のたしなみなきものよりは、美くしき所作が出来る。<sup>え</sup>人情世界にあって、美くしき所作は正である、義である、直である。正と義と直を行為の上において示すものは天下の公民の模範である。

しばらく人情界を離れたる余は、少なくともこの旅<sup>りょ</sup>中<sup>ちゆう</sup>に人情界に帰る必要はない。あつてはせつかくの旅が無駄になる。人情世界から、じやりじやりする砂をふるつて、底にあまる、うつくしい金<sup>きん</sup>のみ眺めて暮さなければならぬ。余自らも社会の一員をもつて任じてはおらぬ。純粹なる専門画家として、己れさえ、纏<sup>てんめん</sup>綿<sup>めん</sup>たる利害の累<sup>るいさく</sup>索<sup>さく</sup>を絶つて、優に画布裏<sup>がふり</sup>に往来している。

いわんや山をや水をや他人をや。那美さんの行為動作といえどもただそのままの姿と見るよりほかに致し方がない。

三丁ほどのぼ上ると、向うに白壁のひとかまえ構が見える。蜜柑みかんのなかの住居すまいだなと思う。道は間もなく二筋に切れる。白壁を横に見て左りへ折れる時、振り返つたら、下から赤い腰こしまき巻まきをした娘あがが上あがつてくる。腰巻はぎまきがしだいに尽きて、下から茶色の脛はぎが出る。脛はぎが出切つたら、藁草履わらぞうりになつて、その藁草履はらぞうりがだんだん動いて来る。頭の上に山桜が落ちかかる。背中には光る海しおを負おっている。

畳たたむ春の峰で、今朝櫻えんから仰あいだあたりかも知れない。南側には焼野とも云うべき地勢が幅半丁ほど広がつて、末は崩れた崖がけとな

る。崖の下は今過ぎた蜜柑山で、村を跨いでむこう向を見れば、眼に入るのは言わずも知れた青海である。

路は幾筋もあるが、合うては別れ、別れては合うから、どれが本筋とも認められぬ。どれも路である代りに、どれも路でない。草の中に、黒赤い地が、見えたり隠れたりして、どの筋につながるか見分のつかぬところに変化があつて面白い。

どこへ腰を据えたものかと、草のなかを遠近と徘徊する。

橡から見たときは画になると思つた景色も、いざとなると存外纏まらない。色もしだいに変つてくる。草原をのそつくうちに、いつしか描く気がなくなつた。描かぬとすれば、地位は構わん、どこへでも坐つた所がわが住居である。染み込んだ春の日が、深く

草の根に籠つて、どつかと尻を卸すと、眼に入らぬ陽炎を踏み潰したような心持ちがする。

海は足の下に光る。遮ぎる雲の一片さえ持たぬ春の日影は、普ねく水の上を照らして、いつの間にかほとぼりは波の底まで浸しみ渡つたと思わるほど暖かに見える。色は一刷毛の紺青を平らに流したる所々に、しろかねの細鱗を畳んで濃やかに動いている。春の日は限り無き天が下を照らして、天が下は限りなき水を湛えたる間には、白き帆が小指の爪ほどに見えるのみである。しかもその帆は全く動かない。往昔入貢の高麗船が遠くから渡つてくるときには、あんなに見えたであろう。そのほかは大千世界を極めて、照らす日の世、照らさるる海の世のみである。

ごろりと寝る。帽子が額をすべて、やけに阿弥陀となる。所々の草を一二尺抜いて、木瓜の小株が茂つてゐる。余が顔はちょうどその一つの前に落ちた。木瓜は面白い花である。枝は頑固で、かつて曲った事がない。そんなら真直かと云うと、けつして真直でもない。ただ真直な短かい枝に、真直な短かい枝が、ある角度で衝突して、斜に構えつつ全体が出来上つてゐる。そこへ、紅だか白だか要領を得ぬ花が安閑と咲く。柔かい葉さえちらちら着ける。評して見ると木瓜は花のうちで、愚かにして悟つたものであろう。世間には拙を守ると云う人がある。この人が来世に生れ変るときつと木瓜になる。余も木瓜になりたい。

小供のうち花の咲いた、葉のついた木瓜を切つて、面白く枝えだぶ

振りを作つて、筆架<sup>ひつか</sup>をこしらえた事がある。それへ二銭五厘の水<sup>すい</sup>  
 筆<sup>ひつ</sup>を立てかけて、白い穂が花と葉の間から、隠見<sup>いんけん</sup>するのを机  
 へ載せて楽んだ。その日は木瓜<sup>ぼけ</sup>の筆架ばかり気にして寝た。あく  
 る日、眼が覚めるや否<sup>いな</sup>や、飛び起きて、机の前へ行つて見ると、  
 花は萎え葉は枯れて、白い穂だけが元のごとく光つている。あん  
 なに奇麗なものが、どうして、こう一晩のうちに、枯れるだろう  
 と、その時は不審<sup>ふしん</sup>の念に堪<sup>た</sup>えなかつた。今思うとその時分の方が  
 よほど出世<sup>しゆつせ</sup>間的<sup>けんてき</sup>である。

寝るや否や眼についた木瓜は二十年来の旧知己である。見詰め  
 ているとしだいに気が遠くなつて、いい心持ちになる。また詩興  
 が浮ぶ。

寝ながら考える。一句を得ることに写生帖に記して行く。  
しばらくして出来上つたようだ。始めから読み直して見る。

出門多所思。春風吹吾衣。芳草生車轍。廢道入霞微。停而  
矚目。万象帶晴暉。聽黃鳥宛転。觀落英紛霏。行盡平蕪遠。  
題詩古寺扉。孤愁高雲際。大空斷鴻帰。寸心何窈窕。縹渺忘  
是非。三十我欲老。韶光猶依々。逍遙隨物化。悠然對芬菲。

ああ出来た、出来た。これで出来た。寝ながら木瓜を観て、世  
の中を忘れている感じがよく出た。木瓜が出なくつても、海が出  
なくつても、感じさえ出ればそれで結構である。と唸りながら、  
喜んでいると、エヘンと云う人間の咳 扞せきぱらいが聞えた。こいつは  
驚いた。

寝返りをして、声の響いた方を見ると、山の出鼻を回つて、雜ぞ

木の間から、一人の男があらわれた。

茶の中折れを被つてゐる。中折れの形は崩れて、傾く縁の下から眼が見える。眼の恰好はわからんが、たしかにきよろきよろときよろつくようだ。藍の縞物の尻を端折つて、素足に下駄がけの出で立ちは、何だか鑑定がつかない。野生の鬚だけで判断するにまさに野武士の価値はある。

男は岨道を下りるかと思いのほか、曲り角からまた引き返した。もと来た路へ姿をかくすかと思うと、そうでもない。またあるき直してくる。この草原を、散歩する人のほかに、こんなに行きつ戻りつするものはないはずだ。しかしあれが散歩の姿であろ

うか。またあんな男がこの近辺きんぺんに住んでいるとも考へられない。  
 男は時々立ち留どまる。首を傾ける。または四方を見廻わす。大に考  
 え込むようにもある。人を待ち合せる風にも取られる。何だかわ  
 からない。

余はこの物騒ぶつそうな男から、ついに吾眼をはなす事ができなかつ  
 た。別に恐しいでもない、また画えにしようと云う気も出ない。た  
 だ眼をはなす事ができなかつた。右から左、左りから右と、男に  
 添うて、眼を働かせているうちに、男ははたと留つた。留ると共  
 に、またひとりの人物が、余が視界に点出てんしゆつされた。

二人は双方そうほうで互に認識したように、しだいに双方から近づい  
 て来る。余が視界はだんだん縮ちぢまつて、原の真中で一点の狭き間せま

に置たたまれてしまう。二人は春の山を背せに、春の海を前に、ぴたりと向き合つた。

男は無論例の野武士のぶしである。相手は？ 相手は女である。那美さんである。

余は那美さんの姿を見た時、すぐ今朝の短刀を連想した。もしや懷ふところに呑んでおりはせぬかと思つたら、さすが非人情ひにんじょうの余もただ、ひやりとした。

男女は向き合つたまま、しばらくは、同じ態度で立つてゐる。

動く景色けしきは見えぬ。口は動かしてゐるかも知れんが、言葉はまるで聞えぬ。男はやがて首を垂たたれた。女は山の方を向く。顔は余の眼に入らぬ。

山では鶯が啼く。女は鶯に耳を借して、いるとも見える。しばらくすると、男は屹と、垂れた首を挙げて、半ば踵を回らしかけ。尋常の様ではない。女は颯と体を開いて、海の方へ向き直る。帶の間から頭を出して、いるのは懷劍らしい。男は昂然として、行きかかる。女は二歩ばかり、男の踵を縫うて進む。女は草履ばかりである。男の留つたのは、呼び留められたのか。振り向く瞬間に女の右手は帶の間へ落ちた。あぶない！

するりと抜け出たのは、九寸五分かと思いのほか、財布のような包み物である。差し出した白い手の下から、長い紐がふらふらと春風に揺れる。

片足を前に、腰から上を少しそらして、差し出した、白い手頸

に、紫の包。これだけの姿勢で充分<sup>え</sup>画にはなろう。

紫でちよつと切れた図面が、二三寸の間隔をとつて、振り返る男の体のこなし具合で、うまい安排につながれている。不即不離とはこの刹那の有様を形容すべき言葉と思う。女は前を引く態度で、男は後えに引かれた様子だ。しかもそれが実際に引いてもひかれてもおらん。両者の縁は紫の財布の尽くる所で、ふつりと切れている。

二人の姿勢がかくのごとく美妙な調和を保つていると同時に、両者の顔と、衣服にはあくまで、対照が認められるから、画として見ると一層の興味が深い。

背のすんぐりした、色黒の、鬚づらと、くつきり締つた細<sup>ほそおも</sup>

面てに、襟の長い、撫肩の、華奢姿。ぶつきらぼうに身をひねつた下駄がけの野武士と、不斷着の銘仙さえしなやかに着こなした上、腰から上を、おとなしく反り身に控えたる瘦形。  
 はげた茶の帽子に、藍縞の尻切り出立ちと、陽炎さえ燃やすべき櫛目の通つた鬚の色に、黒縞子のひかる奥から、ちらりと見せた帶上の、なまめかしさ。すべてが好画題である。

男は手を出して財布を受け取る。引きつ引かれつ巧みに平均を保ちつつあつた二人の位置はたちまち崩れる。女はもう引かぬ、男は引かりようともせぬ。心的状態が絵を構成する上に、かほどの影響を与えるとは、画家ながら、今まで気がつかなかつた。  
 二人は左右へ分かれる。双方に気合がないから、もう画として

は、支離滅裂しりめつれつである。雑木林ぞうきばやしの入口で男は一度振り返った。女は後あとをも見ぬ。すらすらと、こちらへ歩行あるいてくる。やがて余の真ま正面しょうめんまで来て、

「先生、先生」

と二声ふたこえ掛けた。これはしたり、いつ目付めつかつたろう。

「何です」

と余は木瓜ぼけの上へ顔を出す。帽子は草原へ落ちた。

「何をそんな所でしていらつしやる」

「詩を作つて寝ねていました」

「うそをおつしやい。今のを御覧でしよう」

「今の？ 今の、あれですか。ええ。少々拝見しました」

「ホホホホ少々でなくとも、たくさん御覧なさればいいのに」

「実のところはたくさん拝見しました」

「それ御覧なさい。まあちょっと、こつちへ出ていらっしゃい。

木瓜の中から出ていらっしゃい」

余は唯々として木瓜の中から出て行く。

「まだ木瓜の中に御用があるんですか」

「もう無いんです。帰ろうかとも思うんです」

「それじやごいつしょに参りましょうか」

「ええ」

余は再び唯々として、木瓜の中に退いて、帽子を被り、絵の道具を纏めて、那美さんといつしょにあるき出す。

「画を御書きになつたの」

「やめました」

「ここへいらしつて、まだ一枚も御書きなさらないじやありませんか」

「ええ」

「でもせつかく画を書きにいらしつて、ちつとも御書きなさらない  
くつちや、つまりませんわね」

「なにつまつてるんです」

「おやそう。なぜ?」

「なぜでも、ちゃんとつまるんです。画なんぞ描いたつて、描か  
なくつたつて、つまるところは同じ事でさあ」

「そりや洒落<sup>しゃれ</sup>なの、ホホホホ随分<sup>のんき</sup>呑氣<sup>のんき</sup>ですねえ」

のんき

「こんな所へくるからには、香氣にでもしなくつちや、來た甲斐がないじやありませんか」

「なあにどこにいても、呑気にしなくつちや、生きている甲斐はありませんよ。私なんぞは、今のようなところを人に見られても恥かしくも何とも思いません」

「思わんでもいいでしよう」

「そうですかね。あなたは今の男をいつたい何だと御思いです」「そうさな。どうもあまり、金持ちじやありませんね」

「そうさな。どうもあまり、金持ちじやありませんね」

「ホホホ善くあたりました。あなたは占いの名人ですよ。あの男は、貧乏して、日本にいられないからつて、私に御金を貰いに来

たのです

「へえ、どこから来たのです」

「城下から來ました」

「随分遠方から來たもんですね。それで、どこへ行くんですか」

「何でも満洲へ行くそうです」

「何しに行くんですか」

「何しに行くんですか。御金を拾いに行くんだが、死に行くんだが、分りません」

この時余は眼をあげて、ちよと女の顔を見た。今結んだ口元には、微かなる笑の影が消えかかりつつある。意味は解げぬ。

「あれは、わたくしの亭主です」

迅雷を掩うに遑あらず、女は突然として一太刀浴びせかけた。余は全く不意撃ふいうちくを喰つた。無論そんな事を聞く気はなし、女も、よもや、ここまで曝さらけ出そうとは考えていなかつた。

「どうです、驚ろいたでしよう」と女が云う。

「ええ、少々驚ろいた」

「今の亭主じやありません、離縁りえんされた亭主です」

「なるほど、それで……」

「それぎりです」

「そうですか。——あの蜜柑山みかんやまに立派な白壁の家がありますね。ありや、いい地位にあるが、誰の家なんですか」

「あれが兄の家です。帰り路にちょっと寄つて、行きましょう」

「用でもあるんですか」

「ええちつと頼まれものがあります」

「いつしょに行きましょう」

峠道そばみちの登り口へ出て、村へ下りずに、すぐ、右に折れて、また一丁ほどを登ると、門がある。門から玄関へからずに、すぐ庭口へ廻る。女が無遠慮につかつか行くから、余も無遠慮につかつか行く。南向きの庭に、棕櫚しゅうろが三四本あつて、土屏どべいの下はすぐ蜜柑畠である。

女はすぐ、橡鼻えんばなへ腰をかけて、云う。

「いい景色だ。御覧なさい」

「なるほど、いいですな」

障子のうちは、静かに人の気合もせぬ。女は音のう景色もない。ただ腰をかけて、蜜柑畠を見下して平氣でいる。余は不思議に思つた。元来何の用があるのかしら。

しまいには話もないから、両方共無言のままで蜜柑畠を見下している。午に逼る太陽は、まともに暖かい光線を、山一面にあびせて、眼に余る蜜柑の葉は、葉裏まで、蒸し返されて耀やいている。やがて、裏の納屋の方で、鶏が大きな声を出して、こけこつこううと鳴く。

「おやもう。御午ですね。用事を忘れていた。——久一さん、

久一さん」

女は及び腰になつて、立て切つた障子を、からりと開ける。

内は空しき十畳敷に、狩野派の双幅が空しく春の床を飾つてい  
る。

「久一さん」

納屋の方でようやく返事がする。足音が襖の向ふすまむこうでとまつて、からりと、開あくが早いか、白しらさや鞆たんとうの短刀たんとうが畠たけの上へ転ころがり出す。

「そら御伯父さんの餞せんべつ別べつだよ」

帯の間に、いつ手が這入はいつたか、余は少しも知らなかつた。短刀は二三度とんぼ返りを打つて、静かな畠の上を、久一さんの足下しもとへ走る。作りがゆる過ぎたと見えて、ぴかりと、寒いものが一寸ばかり光つた。

## 十三

川舟かわふねで久一さんを吉田の停車場ステーションまで見送る。舟のなかに坐つたものは、送られる久一さんと、送る老人と、那美さんと、那美さんの兄さんと、荷物の世話をする源兵衛と、それから余である。余は無論御招伴おしょうばんに過ぎん。

御招伴でも呼ばれれば行く。何の意味だか分らなくとも行く。非人情の旅に思慮は入らぬ。舟は筏いかだに縁ふちをつけたように、底が平ひらたい。老人を中心に、余と那美さんが艤とも、久一さんと、兄さんが、舳みよしに座をとつた。源兵衛は荷物と共にひとり離れている。

「久一さん、軍いくさは好きか嫌いかい」と那美さんが聞く。

「出て見なければ分らんさ。苦しい事もあるだろうが、愉快な事も出て来るんだろう」と戦争を知らぬ久一さんが云う。

「いくら苦しくつても、国家のためだから」と老人が云う。  
「短刀なんぞ貰うと、ちよつと戦争に出て見たくなりやしないか」と女がまた妙な事を聞く。久一さんは、

「そうさね」

と軽く首肯う。老人は鬚を掀げて笑う。兄さんは知らぬ顔をしている。

「そんな平氣な事で、軍さが出来るかい」と女は、委細構わず、白い顔を久一さんの前へ突き出す。久一さんと、兄さんがちよつと眼を見合せた。

「那美さんが軍人になつたらさぞ強かろう」兄さんが妹に話しかけた第一の言葉はこれである。語調から察すると、ただの冗談んとも見えない。

「わたしが？　わたしが軍人？　わたしが軍人になれりやとうになっています。今頃は死んでいます。久一さん。御前も死ぬがいい。生きて帰つちや外聞がいぶんがわるい」

「そんな乱暴な事を——まあまあ、めでたく凱旋がいせんをして帰つて来てくれ。死ぬばかりが国家のためではない。わしもまだ二三年は生きるつもりじや。まだ逢える」

老人の言葉の尾を長く手繩たぐると、尻が細くなつて、末は涙の糸になる。ただ男だけにそこまではだまを出さない。久一さんは何も

云わずに、横を向いて、岸の方を見た。

岸には大きな柳がある。下に小さな舟を繋いで、一人の男がしきりに垂綸を見詰めている。一行の舟が、ゆるく波足を引いて、その前を通つた時、この男はふと顔をあげて、久一さんと眼を見合せた。眼を見合せた両人の間には何らの電気も通わぬ。男は魚の事ばかり考えている。久一さんの頭の中には一尾の鮒も宿る余地がない。一行の舟は静かに太公望の前を通り越す。

日本橋にほんばしを通る人の数は、一分に何百か知らぬ。もし 橋畔きょうはん

に立つて、行く人の心に蟠まる葛藤わだかを一々に聞き得たならば、浮世は目眩めまぐるして生きづらかろう。ただ知らぬ人で逢い、知らぬ人でわかれるから結句日本橋に立つて、電車の旗を振る志願者けつく

も出て来る。太公望が、久一さんの泣きそうな顔に、何らの説明をも求めなかつたのは幸である。さいわい顧かえり見ると、安心して浮標を見詰めている。おおかた日露戦争にちろうせんそうが済むまで見詰める気だろう。

かわはば川幅かわはばはあまり広くない。底は浅い。流れはゆるやかである。

舷ふなばに倚よつて、水の上を滑すべつて、どこまで行くか、春が尽きて、人が騒いで、鉢はちち合せをしたがるところまで行かねばやまぬ。なまぐさ腥ようしやき一点の血を眉間に印したるこの青年は、余ら一行を容赦ゆうしゃなく引いて行く。運命の繩なわはこの青年を遠き、暗き、物凄ものすごき北の国まで引くが故ゆえに、ある日、ある月、ある年の因果いんがに、この青年と絡からみつけられたる吾われらは、その因果の尽くるところまでこの青年に引かれて行かねばならぬ。因果の尽くるとき、彼と吾らの間にふ

つと音がして、彼一人は否応なしに運命の手元まで手繰り寄せらるる。残る吾らも否応なしに残らねばならぬ。頼んでも、もがいても、引いていて貰う訳には行かぬ。

舟は面白いほどやすらかに流れる。左右の岸には土筆つぐしでも生えておりそうな。土堤どていの上には柳が多く見える。まばらに、低い家がその間から藁屋根わらやねを出し。煤けた窓ますを出し。時によると白い家鴨ひるを出す。家鴨はがあがあと鳴いて川の中まで出て来る。

柳と柳の間に的てきれきと光るのは白桃しろももらしい。とんかたんと機はたえまを織る音が聞える。とんかたんの絶間たえまから女の唄うたが、はあい、いようう——と水の上まで響く。何を唄うのやらいつこう分らぬ。「先生、わたくしの画えを書いて下さいな」と那美さんが注文する。

久一さんは兄さんと、しきりに軍隊の話をしている。老人はいつか居眠りをはじめた。

「書いてあげましょう」と写生帖を取り出して、

春風にそら解け繻子ひとふで<sup>ど</sup>の銘は何

と書いて見せる。女は笑いながら、

「こんな一筆ひとふでがきでは、いけません。もつと私の氣象きじょうの出る  
ように、丁寧にかいて下さい」

「わたしもかきたいのだが。どうも、あなたの顔はそれだけじゃ  
画えにならない」

「御挨拶ごあいさつです事。それじや、どうすれば画になるんです」

「なに今でも画に出来ますがね。ただ少し足りないところがある。

それが出ないところをかくと、惜しいですよ」

「足りないたつて、持つて生れた顔だから仕方がありますんわ」

「持つて生れた顔はいろいろになるものです」

「自分の勝手にですか」

「ええ」

「女だと思って、人をたんと馬鹿になさい」

「あなたが女だから、そんな馬鹿を云うのですよ」

「それじや、あなたの顔をいろいろにして見せてちようだい」

「これほど毎日いろいろになつてればたくさんだ」

女は黙つて向をむく。川縁かわべりはいつか、水とすれすれに低く着

いて、見渡す田のもは、一面いちめんのげんげんで埋うずまつてある。鮮あざやか

な紅の滴々が、いつの雨に流されてか、半分溶けた花の海は霞  
 のなかに果しなく広がつて、見上げる半空には崢嶸そうこうたる一峰  
 が半腹から微かに春の雲を吐いている。

「あの山の向うを、あなたは越していらしつた」と女が白い手を  
 舷から外へ出して、夢のような春の山を指す。

「天狗岩はあの辺ですか」

「あの翠の濃い下の、紫に見える所がありましょうう」

「あの日影の所ですか」

「日影ですかしら。禿はげてるんでしよう」

「なあに凹くぼんでるんですよ。禿げていりや、もつと茶に見えます」

「そうでしようか。ともかく、あの裏あたりになるそうです」

「そうすると、七曲りはもう少し左りになりますね」

「七曲りは、向うへ、ずっと外れます。あの山のまた一つ先きの山ですよ」

「なるほどそうだつた。しかし見当から云うと、あのうすい雲が懸つてるあたりでしよう」

「ええ、方角はあの辺です」

居眠をしていた老人は、舷から、肘を落して、ほいと眼をさます。

「まだ着かんかな」

胸膈を前へ出して、右の肘を後ろへ張つて、左り手を真直に伸して、ううんと欠伸をするついでに、弓を攣く真似をして見

せる。女はホホホと笑う。

「どうもこれが癖で、……」

「弓が御好おすきと見えますね」と余も笑いながら尋ねる。

「若いうちは七分五厘まで引きました。押しは存外今でもたしか  
です」と左の肩を叩たたいて見せる。舳では戦争談が酣たけなわである。

舟はようやく町らしいなかへ這入る。腰障子に御肴おんさかなと書いた居酒屋が見える。古風な縄暖簾なわのれんが見える。材木の置場が見える。人力車の音さえ時々聞える。乙鳥つばくろがちちと腹を返して飛ぶ。  
家鴨あひるがあがあ鳴く。一行は舟を捨てて停車場ステーションに向う。

いよいよ現実世界へ引きずり出された。汽車の見える所を現実世界と云う。汽車ほど二十世紀の文明を代表するものはあるまい。

何百と云う人間を同じ箱へ詰めて轟ごうと通る。情け容なさ赦ようしやはない。

詰め込まれた人間は皆同程度の速力で、同一の停車場へとまつて  
そうして、同様に蒸氣じょうきの恩澤おんたくに浴さねばならぬ。人は汽車へ  
乗ると云う。余は積み込まれると云う。人は汽車で行くと云う。  
余は運搬されると云う。汽車ほど個性を輕蔑けいべつしたものはない。

文明はあらゆる限りの手段をつくして、個性を発達せしめたる後、  
あらゆる限りの方法によつてこの個性を踏み付けようとする。一ひ

人前何坪何合かの地面を与えて、この地面のうちでは寝るとも  
起きるとも勝手にせよと云うのが現今文明である。同時にこの  
何坪何合の周囲に鉄柵てつさくを設けて、これよりさきへは一步も出て  
はならぬぞと威嚇おどかすのが現今文明である。何坪何合のうちで

自由を擅ほしいままにしたものが、この鉄柵外にも自由を擅にしたくなるのは自然の勢いきおいである。憐あわれるべき文明の国民は日夜にこの鉄柵に噛かみついて咆ほうこう哮こうこうしている。文明は個人に自由を与えて虎とらのごとく猛たけからしめたる後、これを檻かんせ窯窯の内に投げ込んで、天下の平和を維持しつつある。この平和は眞の平和ではない。動物園の虎が見物人にらを睨ねらめて、寝転ねこころんでいると同様な平和である。檻おりの鉄棒が一本でも抜けたら——世はめちやめちやになる。第二の仏蘭西革命フランスかくめいはこの時に起るのであろう。個人の革命は今すでに日夜に起りつつある。北欧の偉人イブセンはこの革命の起るべき状態についてつぶさにその例証を吾人に与えた。余は汽車の猛烈に、見みさかいなく、すべての人を貨物同様に心得て走る様さまを見るたびに、

客車のうちに閉じ籠められたる個人と、個人の個性に寸毫の注意をだに払わざるこの鉄車とを比較して、——あぶない、あぶない。氣をつけねばあぶないと思う。現代の文明はこのあぶないで鼻を衝かれるくらい充満している。おさき眞闇に盲動する汽車はあぶない標本の一つである。

停車場前ステーションの茶店に腰を下ろして、蓬餅よもぎもちを眺めながら汽車論を考えた。これは写生帖へかく訳にも行かず、人に話す必要もないから、だまつて、餅を食いながら茶を飲む。

向うの床几しようぎには二人かけている。等しく草鞋わらじば穿きで、一人は赤毛布あかげふと、一人は千草色ちくさいいろの股引ももひきの膝ひざに継がしら布づきをあてて、継布つぎふのあたつた所を手で抑えている。

「やつぱり駄目かね」

「駄目さあ」

「牛のように胃袋が二つあると、いいなあ」

「二つあれば申し分はなえき、一つが悪るくなりや、切つてしま  
えば済むから」

この田舎者<sup>いなかもの</sup>は胃病と見える。彼らは満洲の野に吹く風の臭い<sup>におい</sup>  
も知らぬ。現代文明の弊<sup>へい</sup><sup>みと</sup>をも見認めぬ。革命とはいかなるものか、  
文字さえ聞いた事もあるまい。あるいは自己の胃袋が一つあるか  
二つあるかそれすら弁じ得んだろう。余は写生帖を出して、二人  
の姿を描き取つた。

じやらんじやらんと号鈴<sup>ベル</sup>が鳴る。切符<sup>きっぷ</sup>はすでに買うてある。

「さあ、行きましょ」と那美さんが立つ。

「どうれ」と老人も立つ。一行は揃つて改札場<sup>かいさつば</sup>を通り抜けて、プラットフォームへ出る。号鈴<sup>ベル</sup>がしきりに鳴る。

轟<sup>ごう</sup>と音がして、白く光る鉄路の上を、文明の長蛇<sup>ちようだ</sup>が蜿蜒<sup>のなづかず</sup>て来る。文明の長蛇は口から黒い煙を吐く。

「いよいよ御別かれか」と老人が云う。

「それでは御機嫌<sup>ごきげん</sup>よう」と久一さんが頭を下げる。

「死んで御出で」と那美さんが再び云う。

「荷物は来たかい」と兄さんが聞く。

蛇は吾々<sup>われわれ</sup>の前でとまる。横腹の戸がいくつもあく。人が出たり、這入つたりする。久一さんは乗つた。老人も兄さんも、那美

さんも、余もそこに立つてゐる。

車輪が一つ廻れば久一さんはすでに吾らが世の人ではない。遠い、遠い世界へ行つてしまふ。その世界では煙硝の臭いの中で、人が働いている。そして赤いものに滑つて、むやみに転ぶ。空では大きな音がどんどんと云う。これからそう云う所へ行く久一さんは車のなかに立つて無言のまま、吾々を眺めている。

吾々を山の中から引き出した久一さんと、引き出された吾々の因果はここで切れる。もうすでに切れかかっている。車の戸と窓があいているだけで、御互の顔が見えるだけで、行く人と留まる人の間が六尺ばかり隔つてゐるだけで、因果はもう切れかかっている。

車掌が、ぴしやりぴしやりと戸を開てながら、こちらへ走つて来る。一つ閉てるごとに、行く人と、送る人の距離はますます遠くなる。やがて久一さんの車室の戸もぴしやりとしまつた。世界はもう二つに為つた。老人は思わず窓側へ寄る。青年は窓から首を出す。

「あぶない。出ますよ」と云う声の下から、未練のない鉄車の音がごつとりごつとりと調子を取つて動き出す。窓は一つ一つ、

余等の前を通る。久一さんの顔が小さくなつて、最後の三等列車が、余の前を通るとき、窓の中から、また一つ顔が出た。

茶色のはげた中折帽の下から、鬚だらけな野武士が名残り惜氣に首を出した。そのとき、那美さんと野武士は思わず顔を見合せ

た。鉄車てつしゃは「どりどり」と運転する。野武士の顔はすぐ消えた。  
那美さんは茫然ぼうぜんとして、行く汽車を見送る。その茫然のうちに  
は不思議にも今までかつて見た事のない「憐れあわ」が一面に浮いて  
いる。

「それだ！ それだ！ それが出れば画えになりますよ」と余は那  
美さんの肩たたを叩きながら小声に云つた。余が胸中の画面はこの咄とつ  
嗟の際に 成就じょうじゆしたのである。

# 青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集3」やくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年12月1日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

初出：「新小説」

1906（明治39）年9月

入力：柴田卓治

校正：伊藤時也

1999年2月17日公開

2011年5月21日修正

### 青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

# 草枕

## 夏目漱石

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>